
アルルーナ成長日誌

eins

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルルーナ成長日誌

【Nコード】

N2238D

【作者名】

e i n s

【あらすじ】

16歳の男子高校生。唯一の趣味はゲームというゲーマーである。そんな四季は、金銭的な理由から諦めていたゲーム機を幸運にも手に入れた。

プロローグ

【Dreams and Phantasms】。ゲーム会社【ディースト】が開発した仮想世界体験型MMORPGである。

ネット上では、【幻夢】と呼ばれている。専用のゲーム機【Ark】を使用する事により、仮想世界【ノア】の中で戦闘や生産等、様々なことを体験することの出来るゲームだ。レベル・スキル制でファンタジー物、とありがちなものだが、大きな特徴は名前以外のキャラクターメイキングが無いという所だ。プレイヤーは、現実の姿そのまま【ノア】の中を旅することになる。

この情報が流れた当初は、色々な所で叩かれたものだ。プライベートの観点から購入者がいる筈が無いと、ニュースの中で評論家が騒いでいたのが印象的だった。しかし、予想に反して大半のゲーマーは、すんなりと受け入れてしまったのだ。プライベートと言っても、よく考えれば、現実での情報などプレイヤーが気を付ければ洩れる訳もなく、それは今までの物と変わらない。

ゲームの中で偶然顔見知りに出会ったとしても、他人の空似と否定すれば終わる話なのだ。そして、ゲーマーの受け入れた要因。それには、最近のMMORPGは、うけ狙いを除き美形外装しか存在しないという背景がある。美人は3日で飽きるという言葉もあるように、みんな食傷気味になっていたのだ。

だったら、キャラクターメイキングの時に、現実の姿を使えばいい

と思うだろう。

そう思う人間も少なくなかったようで、何度か某大規模掲示板で特定ゲームではそうしようと決められたこともあった。

だが、ふたを開けてみるとオッドアイなど有り得ない外装はいなかったが、どこを見ても美男美女ばかりだったのである。

少しでも周りに好印象を持って欲しい、リアルの外見など確認する方法が無いのだから、自分1人くらい……後は予想がつくであろう。そんな事もあり、強制的に現実の姿が適応されるのは、不正が出来ないので大歓迎だったのだ。

それ以外にも、RMTが当たり前な現在、詐欺や迷惑行為などに対する抑止の効果が見込まれたというのも大きかったようだ。

後、適応されるのは外装だけなので、他のゲームと同様に格闘家だろうがヲタだろうが、ゲームの中の初期ステータスは同じである。

まあ、本人の反射神経・バランス感覚・集中力等により大きく差が出ることになるが、他は平等という事だ。

魔法など無いが、代わりに各武器スキルで習得できる技がある。

ゲームのグラウンドクエストは、プレイヤーが初めて降り立つ街でもある迷宮都市【ルトメイヴィス】の中央にある地下迷宮の最下層に到達することだ。

地下迷宮にはある程度レベルが上がらないと入れないようで、最初はフィールド上のMobを倒したりクエストをこなしたりして、レベルをあげる必要があるらしい。

もちろん、地下迷宮以外にも様々なイベントやダンジョンが用意されている。

当然、【幻夢】にも世界観や壮大なストーリーがあるのだが、多くのプレイヤーがそうであるように、そんなものには興味がないので読む訳がない。

付け加えると、この世界の通貨単位はYコリルで、プレイヤーに与えられる初期アイテムは、【スモールポーション】5個と1000Yである。

本当に大雑把で少量だが、以上が俺の持っている【幻夢】に関する情報だ。

最後に、自己紹介。

名前：春夏秋冬ひとこせ 四季しき

年齢：16

性別：男

備考：

古流武術を習っていて、IQが180以上ある……なんてことはない。

典型的なゲーヲタ。

運動は苦手ではないが得意でもない。

学校の成績は中の上。

身長160cm体重42kgとロースペックを誇り、帰宅部に在籍
日光が苦手で日に当たらないために色白、不本意な童顔に眼鏡を標準装備している。

冗談の様な名前に、若干のコンプレックスがある。

第1話（前書き）

わかりにくいものは、ページ下部に注釈を入れています。

第1話

「四季、誕生日プレゼントだ」

「はあ？」

ニコニコとした笑顔で言われた言葉。
どこにも不自然な所は無い。

大抵の家庭で年に一度は発せられる言葉だろうし、プレゼントを受け取ることであっさり終わる事の出来るイベントのはずだ。

「親父、今日は何月何日だ？」

「ん？ 7月18日だが、どうした？ 記憶喪失か？」

確かに今日は7月18日だ。

「で、俺の誕生日は？」

「2月22日だろうが。どうしたんだ。ま、まさか！？ 本当に記憶喪失にでもなったのか？」

まるで、こちらがおかしいかの様な発言に、頭が痛くなってくる。

「あのなあ。誕生日プレゼントは普通誕生日に渡すもんだろ！ それに、どこに誕生日プレゼントがあるってんだ！ 何も持ってないじゃないか！？」

思いつきり手ぶらでどこにもそれらしい物がない。

だが、悪びれる所かむしろ胸を張りながら、

「お父さんは常識に囚われない自由人なんだ。それにこの方がサブライズ感があるだろ？」

自由人どころかただの変人である。

だが、さすがに実の父親に向かって「変人の間違いだろ？」とは可哀想で言えず、無難にスルーする。

「ああ、そうだな。で？ 肝心のプレゼントは？」

言いながら、ふと嫌な考えが浮かぶ。

この変人のことだ「馬鹿には見えない だ」とかい出しかねない。

「ん？ プレゼントならすでにお前の部屋に搬入済みだぞ」

さっきごそごそやっていたのがそれか、部屋に直接持っていくって事はかなり大きな物なんだな。

まともな物とは思えないが、逆に予想外であろうその物体に若干の興味が沸いてくる。

「んじゃ、ちよい見てくる」

と、一言残し部屋に向かう。

開けた扉を即座に閉める。

頬つぺたを抓ってみる……が痛い。

どうやら夢ではないようだ。

最後に見た時の記憶と照らし合わせてみる。

どう考えても、自分の部屋のレイアウトが明らかに局地的に激しい変貌を遂げている。

俺とした事が、奴の変人具合を甘く見すぎていたようだ。

ベッドがあった筈の場所にあったのは、黒い直方体の物体だった。

雑誌やCMで何度も見た【Ark】である。

【Ark】とは、昨年末から約半年間のcを経て、明日正式稼動する仮想世界体験型MMORPG【Dreams and Phantasms】のゲーム機だ。

完全予約制の限定5万台で定価は7万9800円だ。

他社のMMO用ゲーム機が、約3万〜5万円ということを見ると、多少高めの値段設定だと思う。

個人的には、期待感を胸にcに応募したが、募集人数1000名の狭き門に物の見事に弾き返され涙を飲み、正式発表された値段に購入を断念したという、暗い感情が芽生えるゲーム機でもある。

しかし、何故こんな物がここに……。

考えても埒があかないので、元凶を締め上げるために居間に戻る。

「おお、どうだ？ 気に入っ「何処から盗んできた!？」へぶっ!

「!

とりあえず、先制攻撃にボディーブローをしかける。

「先月、新しいゴルフクラブを買ったという情報は掴んでいる。月3万円の小遣いからどう融通しても、【Ark】を買う金は無い筈だ」

「ん？ ああ。あれは困っていた老人を助けて貰った物だ」

「なっ！？」

言うに事欠いて、そんな見え見えの嘘をつくとは……。

変人だとは思っていたが、ここまで悪化しているとは認識がまだまだ甘かったようだ。

「親父、自首してくれ。初犯……かどろかは分らないが、少なくともこれ以上俺に迷惑がかからない内に自首するべきだ。というか、自首しろ！！」

「うゝむ。演劇部にでも入ったのか？ 中学からずっと帰宅部だったから、心配していたんだ。いやゝ、よかった、よかった」

この家の長男として責任を取り、不思議物体を処理するしかない。覚悟を決めて通報しようと思つた電話に手を伸ばすが、

「たっただいまゝゝ」

「お帰りー」

タイミング悪く、妹の春音はるねが部活から帰って来てしまった。

「あれ？ アニキ、何処か電話するの？」

「ああ。警察にな……。親父が強盗をやらかしたみたいなんだ」

「えっ？」

こうなつては事情を知つておいた方がいいと思い、妹に説明をする。

「【Ark】を知ってるか？」

「あれだけ話題になればね。男子連中はその話よくするし。まあ、予約が間に合わなかつたりあの値段だから、あんまり買った人いないみたいけどね。で、それがどうしたの？」

「その【Ark】をどこかから盗んできたみたいでな。今、俺の部屋にあるんだ」

ショックを受けるであろう妹の顔を見ることが出来ず、視線を床に落とす。

「あれって冗談じゃなかつたんだ」

「……………はっ？」

な、なんだ???

「お父さん。この間のお爺ちゃん、本当に送つてきたんだね」

「ああ。てつきり冗談かと思つたんだがな、さつき届いたんだよ」

ダメだ。摩訶不思議な展開に付いて行けない。

何かの暗号なのか？ それとも妹が親父に汚染されてしまったのか？

「あの格好で【ディースト】の会長だなんて、ボケてるか冗談だと思っただのにね」

「そうそう。野良犬に追いかけてられる姿からは、とても信じられなかったな」

クツ！ どうやら観念するしかない。
信じられないが、本当のことのようだ。

「で？ どういうことなんだ？」

「えっとね

話の内容を簡潔に纏めてみる。

先週の日曜日、妹と親父が散歩していた所、前から野良犬に追いかけてられている謎の老人に遭遇したらしい。

可哀想なので野良犬を追い払ってあげると、自分は【ディースト】の会長だと自己紹介して、お礼がしたいと言っただらしい。

2人とも冗談だと思ったようで、その冗談に乗ってあげて『だったら【Ark】が欲しい』と言っただらしい。

老人は、『あんな物でいいのか』と言い、送り先を聞いて去っていったらしい。

「んで、それがさっき届いたと？」

「ああ。冗談だと思ったし、お前欲しがっていただろ？」

ごめんよ。変人だなんて思ってたごめんよ、お父さん。

「春音はいいのか？ お前の方が貰う権利あるだろ」

「私ゲームって興味ないし」

そういえば、俺と正反対の体育会系だったな。

ちなみに俺は帰宅部で妹はテニス部だ。

「ありがとな」

「駅前のリセリのケーキよろしくね」

「了解しました。軍曹殿」

【Ark】のことを考えると安い物だと諦める。
気は進まないし日頃の行いのせいとはいえ、親父にも謝った方がいいよな。

「親父。疑ってごめん」

「何の事だ？」

「だから、【Ark】を盗んだんじゃないかって、さっき」

「そんな事言ったか？」

「……」

こ、こういう奴だとは分かっていたが……。
気分を入れ替える為に【Ark】の説明書でも読もう、それがいいに違いない。

「ちよつと部屋に戻るな」

”妹に” 一声掛け部屋に戻る。

今更だしどうでも良いことだが、親父の名前は冬樹^{ふゆき}だ。

「ふうん、ちゃんと設置までやってくれてるんだな」

とりあえず説明書を読むことにする。

「へえ〜」

「うーむ」

「ほう……」

要約すると、【Ark】は虹彩認識システムに登録した人しか使えないようだ。

まあ、代理育成が出来なくなるから、学生としては助かるな。

登録出来るのは1人だけで、中に入り目を開けると自動的に登録してくれるらしい。

よし！ 登録終了つと。

「1アカウント1キャラクターで削除不能か」

おいおい。育成失敗したら目も当てられないな。

んで、ログイン中の身体は睡眠状態になるらしく、睡眠時間をまるまるゲームに当てられるっぽい。

明日から夏休みだから、1日中眠ることになりそうだな。

「四季、御飯よ」

姉さんの声が聞こえる。

ああ、姉さんといっているが実の母親で、名前は夏子^{なつこ}だ。

若く見られることに執着が激しく、外で母さんと呼ぶと地獄を見ることになる。

俺以上の童顔で、友人達には姉だと思われている。

「はい」

殴りこまれる前に答える。

今日はさっさと飯と風呂を済ませて、ネットで幻夢の情報を漁るか。必要な情報を暗記しないといけない。

1:c

クローズド。

正式サービス開始前、少数のテスターに不具合などをチェックさせるテストプレイの事。

人数を限定しない場合は、オープン。
大抵は、クローズド オープン サービス開始の流れ。
この作品ではc からサービス開始になってます。

2：テスター

テストに参加したプレイヤーの事。

正式サービス開始前に、ゲーム中のバグや不具合や問題点を報告する為、または顧客確保の為に無料で運営側が募った人の事。
しかし、ほとんどのテスターは、単純に先行してゲームを熟知する為にテスターをやったりする。

第2話

正式サービスが開始する正午丁度にログインし、名前を決めるだけのあつさりしたキャラメイクを終え、【ノア】の世界に降り立つ。初めて降り立った憧れの世界に、感慨深く周りを見渡すと予想通りの光景、ゲーヲタの集団が目に入ってくる。

もちろん、外見でゲーヲタだと判断することは出来ないのだが、纏っているオーラというか雰囲気、第六感を刺激するのである。お仲間であると……。

つてか、のんびりと浸っている場合じゃない。

さつさと武器と防具を手に入れて、スタートダッシュを成功させなくては、期末でもやらない一夜漬けが無駄になる。

『ありがとうございます』

昨日の夜に決めていた通りに、【ショートソード】2本「各250ユリル」と【ソフトレザー】「280ユリル」を購入した。

ショートソードを2本買ったのは、華麗な二刀流で敵を倒す、なんて甘い夢を見ているわけではなく、敵の攻撃を防ぐ為だ。

正直、運動？何それ？美味しいの？な自分に、敵の攻撃を避けるなんて勿論無理なわけで、攻撃を防いだ方が無難っぽい。

それなら盾の方が良さそうな物だが、そこはそれ武器で弾いた方がかつこ良さそうだからだ。

笑いたければ笑え、ただの見栄なんだ。

アイテムウィンドウを開き装備して、ついでにスキルメニューから【片手剣】を探しスキルスロットにセットする。ちなみに、生産系スキルを取るつもりは無い。物作りには心惹かれるが、単純作業の繰り返しに飽きるのが目に見える。

「次は、クエストか」

クエストを受ける為に、街の中央地下迷宮のすぐ傍にある【冒険者ギルド】に向かうが、みんな考えることは同じらしい。

武器屋でも思ったが、ギルドも人が溢れかえっていた。

何とか受付のNPCから初級クエストを受け、その場を離れる。

受けたクエストは、街の西にある森で動物を倒し、【肉】と【毛皮】を2個ずつ手に入れるというものだ。

c の情報では、動物はノンアクティブで、更に攻撃しても反撃しないらしい。

無抵抗な相手というのは気が進まないが、とりあえず猪や熊など凶悪な見た目の動物がいるのを期待して、森に行くことにする。

願い叶わず、森にいた動物は鹿やウサギなど、攻撃を躊躇わせるようなものばかりだった。

「ちよろちよろ逃げんなっ！」

「オラアッ！」

「死ねえ！」

森の中、何処も彼処も動物を虐殺しているプレイヤーの声が響いている。

クエストに必要な肉と毛皮を得る為だろうが、現実ではないとはいえ、どうしてここまで残酷なことが出来るのか不思議なものだ。

先程見かけたのだが、10代前半だと思われる女の子が嬉々としてウサギを切り刻む姿は、夢に出てきそうなくらい怖気を誘うものがあった。

別に動物好きという訳でもないが、見た目は現実のままだし、無抵抗な相手に攻撃する気が起こらない。

ただ歩いているのも暇なので、プレイヤーがいない方に誘導してみたり、木の実などをあげたりとまったりしたプレイを楽しみながら歩く。

所詮オブジェクトに過ぎないというのは分かっているし、スタートダッシュに乗り遅れるという危機感もある。

だが、周りの必死さに完全に引いてしまい、今更テンションを揚げてその中に加わるというのは無理というものだった。

もっと悩まずに殺せる魔物っぽい生き物はいないのかと森の奥に進んでいると、木々が途切れ開けた広場の様な場所に出た。

「でけえなおい」

目に飛び込んできたモノに思わずツツコミを入れる。

圧巻とも言おうか、樹齡何万年だ？と聞きたいくらいの巨木だ。

それにしても、こんなに大きければ森の外からも見えたとはいえないが、どうなってるんだろう。

バグなのか、演出上あえてそうしているのか分からないが、この樹を初めて見たプレイヤーは総じて呆然とするのだろう。

「自分がそうなのだから、他の奴もそうだ。そうじゃない奴は変人だ！」と勝手な決めつけをしながら大樹に近づいていく。

昔、映画で見たワンシーンのように抱きついて耳を当ててみる。

「流石に、水を吸い上げる音は聞こえないか……」

少し残念に思いながらも大樹から離れ、いるかいなか分からない魔物探しを再開しようと、森の方に向かおうとした時、

「その若者よ、お待ちなさい」

突然、頭に入ってくるような声が聞こえてきたが、周りにそれらしい人影はない。

気のせいかと思い再び歩きですが、

「私はこの森の長、貴方の後ろの樹が私です」

どうやら何かのイベントらしい。

どこでフラグを立てたのかは分からないが、ゲーム初日にやった事が散歩だけという、情けない事態を打破してくれる展開は大歓迎だ。

「え〜と、それでどんなご用でしょう?」

「貴方は森の動物達を害する事もなく、寧ろ悪しき者達から助けて頂きとても感謝しています」

「はあ」

散歩するついでに暇つぶしでやった事がフラグを立てていたとは、流石に思いも寄らなかった。

【友好度】の様な隠しパラメーターが在るのだろう。

『感謝の証としてこの種を受け取ってください』

目の前に草団子のような物が現れる。

受け取らなければ話が進まないだろうと手にとって見ると、見た目に反して硬い手触りだった。

キーンと効果音が鳴り、新規スキル修得のメッセージが流れる。

『いつまでもそのやさしさを忘れないで下さいね』

その声を合図にしたかのように徐々に樹が消えていく。

「えっ？ あ、あの？」

『その種は、私が生まれてから蓄えてきた力の結晶なのです。その為、苗木の状態にまで若返るのですよ』

「そ、そうですか」

1分後、完全に樹が消えてしまいが、樹のあった中心部辺りに小さな苗木が生えていた。

どのくらいの時間を掛けてあの状態にまで成長するのか分からないが、かなり頻度の低いイベントだったみたいだ。

スタートダッシュに乗り遅れたかと思っただが、思わぬ幸運に恵まれたものだ。

とりあえず、クエスト画面から受けたクエストを解除し、手に入れたアイテムの確認をする為にアイテムウィンドウを開く。

「【樹人の種】ね」

【樹人の種】は発芽させると使い魔が手に入るみたいだ。使い魔の情報は公式HPには載っていたが、c 中誰も手に入れてなかったはずだ。

手に入れた人物が情報を隠匿した可能性もあるが、もしも隠匿した人が居たとしても情報が皆無という事は、それ程手に入りにくいものという事だろう。

まあ、このイベントの難易度？を考えると、このレアかどうかかわからないが、貴重っぽいアイテムが手に入ったのも妥当かもしれない。通常、初級クエストはチュートリアルの意味合いも兼ねている事が多いし、序盤のいい収入源になっているから、動物を殺すのは流れとして自然である。

しかし、動物を殺した時点でフラグが立たなくなるのだから、初級クエストが罫という運営の捻くれ具合が伺える。

「それにしても、発芽ってどうすればいいんだろ？」

草団子？を手を持ち考える。

種なんだし、単純に考えれば地面に植えればいい筈だ。

「あっ」

そういえばスキルも覚えたのだと確認してみると、スキルリストに【タイム】という項目が増え《種の発芽》という技が出現していた。どうやら種を手を持ち、発芽する事を願えばいいだけらしい。早速、【タイム】を空いているスキルスロットにセットする。

そして、芽が出てくる事を想像してみると、

「うおっ!!」

草団子を持っていた右手の手の平に違和感を感じ、気になって見てみると、

「な、なんじゃこりゃ〜!?!」

草団子から根のようなものが伸び手の平に引っ付いている。

しかも、俺の体液でも吸い取っているのか、どんどん巨大になっていく。

「お、お、おい。てか、大丈夫なのか？　なんか、やたら身体が重くなってきたんだが」

視界の端に映ったHPバーを見ると、見る見る減っていく。

おいおい、どんな死に方だよ!とツツコミを入れようとした時、キーンと効果音がしたのと同時に、直径1m程になった草団子が手から離れ地面に落ちる。

「巨大草団子か、なかなか斬新な使い魔だな……って、どうやって戦うんだよ!!」

裏拳でツツコミを入れると、ピキピキッ!と巨大草団子に輝が入り真っ二つに割れてしまった。

そして、中から美味しそうな餡子が出てくる筈も無く。

名前：アルルーナ

種族：樹人

説明：森を象徴する力が集まり、意思を持つ事によって生まれた存在

餌：飲み物全般

愛情度：100 「普通」

満腹度：100% 「満腹」

習得スキル：

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

以上が、ステータス画面から得られた情報だ。

小柄で華奢な体躯の、幼い少女。

整い過ぎて、造り物めいた印象を与える顔立ちに、陶器を思わせる木目細かな白い肌。

翡翠を思わせるジェイドグリーンの瞳と同色の髪。

触れると壊れてしまいそうなその姿は、全ての者に神秘的な印象を与えるだろう。

「……………」

そして、それら全てを台無しにする、頭から生えた3本のコスモス。

「……………」

「狙い過ぎて外しちゃった」と主張するかの様な外見である。他にいるだろう使い魔も、こういうのなんだろう？ 開発チームを問い詰めてみたい気がする。

「……………」

きょとんとした顔でこちらを見ているが、どうすればいいんだ？ とりあえず、意思疎通を図ってみるか、

「言葉はわかる？」

「はい、わかります」

よかった。

会話が出来るのは非常に助かる。

「え〜と、俺の名前はシュウ。これからヨロシクな」

「アルルーナです。こちらこそよろしくお願いします、シュウさん」

「あ、呼び捨てでいいよ」

「わかりました、シュウ」

人間タイプなだけに知能が高いようだ。別ゲームだが、勝手にふらふら移動するのもある事を考えると、当たり前だったかもしれない。

「基本的には俺の近くにいて欲しい。それと、何か気付いたことがあつたら遠慮なく言ってくれ」

「わかりました」

「あとは、アルって呼んでもいいかな？」

「はい、好きなように呼んでください」

な、なんか、非常に素っ気無い感じが。

「この辺りに動物以外のMobがいるか、わかるかな？」

「『この森には結界が張られていて、魔物が入って来れない』という設定になっていますから、動物しかいません」

「そっ、そうなんだ」

おいおい。どんな奴がAIをプログラミングしたんだよ。

どう考えても、「設定になっています」って言っちゃダメだろ。

地味に開発チームに会ってみたい気がする、きっと親父といい勝負の変人揃いだろう。

「街の北にある草原に行こうと思うんだけど、いいかな？」

自分もそうだが、アルがどのくらい戦えるか見るために、後回しにしていた街の北にある草原の方に行くことにする。

「はい」

どうにも先行きが不安だが、気のせいだろうと思い直し草原に向けて出発する。

あ！？ そういえば、さっきかなりHPが減ったんだった。

アルに吸い取られたHPを回復する為に、赤ポを鞆から取り出しを飲んでおく。

「もう少しで忘れるところだったな」

そして、今度こそと出発するが、気のせいだろうか？

背中に感じるアルの視線が、若干冷たくなった気がする。

アルルーナ成長日誌

LV1 HP:120 SP:28

STR:4 VIT:5 INT:7 DEX:3 AGI:3

攻撃力:12 魔法攻撃力:12 防御力:13 魔法防御力:1

3 敏捷度:11

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

愛情度:98 「普通」

満腹度:100% 「満腹」

備考：

まだ会ったばかりなので、これといって書くことが無い。
強いて書くなら、無表情なのが怖い。

1：スタートダッシュ

サービス開始と同時に始め、廃プレイする事により他のプレイヤーより先行する事。

狩り場に人が少ない為狩り易い、後発プレイヤーに上位狩り場のドロップ品が高く売れる等、利点が多い。

2：廃プレイ

1日のほとんどの時間をゲームに費やす事。

3：ノンアクティブ

プレイヤーが接近しても自ら攻撃して来ることはなく、こちらが攻撃する事によって初めて敵対行動をとるMobの事。
攻撃しなくても敵対行動をとるMobは、アクティブ。

4：フラグ

特定のイベントを起こす為に、必要な条件の事。

5：Mob

【暴徒の群れを指す英語のmob】、【Mobile Object】か【Moving object】の略等あるが、ソースは不明なため、どれかは断言は出来ない。

ここでは、プレイヤーを攻撃する可能性のあるモンスターの事、として使っている。

6：赤ポ

HP回復系ポジションの略称。

ほとんどのゲームで回復系ポジションが赤いので、そう略される事が多い。

第3話

「アル、コード だっ!!」

襲いかかってくるゴブリンから視線を逸らさず指示を出し、力任せに斬りつけて来た短剣を左の剣で弾く。

短剣を弾かれよろけた所に、アルの手の平から伸びた鞭の様な根っこが足を絡め取り、うつ伏せに転ばせる。

すかさず、ゴブリンの両手を踏みつけ、背中を両手の剣で突き刺す。

『ギョグアアア』

消え入るような声を最後に、ゴブリンが消えていく。

「うゝむ。楽なのはいいんだけど、なんか物足りない気がする」

「????」

この戦法で倒したゴブリンはすでに30を数える。

戦法といっても、自分が注意を引き付けている間に、ターゲットの後ろに移動したアルが、根っこ鞭を使い転ばせるだけの単純なものだ。

何故こうなったかというと、以下の通りである。

最初は、雑魚の代名詞でもあるゴブリンくらい、自分もアルも楽に

倒せるだろうと思っていた。

とりあえず、自分一人で1匹倒してみようと思い、アルに手を出さない様に指示する。

「アル、ちょっと一人で戦ってみるから、手を出さないで見ててね」

「わかりました」

アルの了承を得て、一番近くに居たゴブリンに向け歩いて行く。

スクリーンショット

SSで見ていたのと迫力が違うな、妙に生々しいというか、食事中は勘弁して欲しいグロ映像だ。

手に持っている錆びた短剣は、斬られたら破傷風とか起こしそうだし。

若干びびっている、向こうもちちらに気付いた様で短剣を振り上げ襲い掛かって来た。

『ギエギエ』

「うおっ!?!」

軽いパニック状態である。

生粋のゲーヲタである自分が、華麗に攻撃を避けれるはずも無く、あっさりと攻撃を受けてしまった。

「ん？ 痛くない……って、ゲームだった」

いかん、いかん。あまりのリアルさに現実と混同してしまった。

今度こそと、落ち着いて短剣を左の剣で弾き、がら空きになった胴を右の剣で薙ぐ。

すぐさま後ろに飛び退き、次の攻撃に備える。

『ゲツゲツゲ』

痛みを感じているのかわからないが、若干苦しそうな顔で再度攻撃してきた。

先程同様に、短剣を弾こうとしたが、

「あら？」

見事に空振りし、無防備な胸の辺りに攻撃を受ける。
どうも目測を誤ったようだ。

『ギヨツギヨツギヨー』

なんか、馬鹿にされている気がそこはかたなくする。
こみあげる怒りを静めながら、今度こそ確実に短剣を弾くと、治まらなかつた怒りが宿った一撃が、ゴブリンの身体に吸い込まれるように直撃した。

『ギョグアアア』

ゴブリンが動きを止め消えていく。

「ふう、終わったか」

安堵の息をつくと共に、雑魚相手にこの体たらくな自分に飽きれてしまう。

戦いに慣れてくればマシになるかなと思いつき、今度はアルに戦わせてみることにする。

離れた所で戦いを見ていたアルを呼ぶと、トテトテと擬音がしそう

な走り方で近づいて来た。

「シユウ。大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな。今度はアルに戦って欲しいんだけど、いいか？」

「はい、やってみます」

「あそこに1匹でいる奴と戦ってみてくれ」

「わかりました」

ゴブリンに向けて走っていくアルを見送りながら、どんな戦い方をするのか気になってくる。

”根っこを鞭の様に使い攻撃する”との事だが、それらしい物を持ってない。

万が一のことを考え、何時でも手助け出きる様に近くに行くが、

「……………」

えっと、一方的ですか？ 女王様ですか？

手の平から伸びた根っこの鞭で、距離を保ちながらピシッ！ピシッ！と危なげなく戦っている。

これは楽勝というか、俺ってアルより弱い？

頭の中で『アル>>>俺>ゴブリン』という、嫌な力関係の図式が思い浮かぶ。

主人として情けなく思いながら、もう倒したかな？と目を向けるが、

「ん？」

まだ戦闘は続いていた。

不思議に思いゴブリンのHPバーを見てみると、まだ3分の1くらい残っている。

その時、攻撃が当たった様で、ゴブリンのHPバーが減少する。

20分の1くらい。

そうか、そうだったのか、謎は全て解けた！！ 犯人はこの、じゃなくって。

妙に強すぎると思ったが、たまたま戦い方がうまく噛み合っただけのように。

まあ、プレイヤーよりも強い使い魔というのは、立場が無くなるので困るけど。

しかし、弱ったな。

俺は、少ない攻撃で倒せるが、戦い自体が危なっかしい。

アルは、被ダメ無しで倒せるが、結構1匹辺りの時間が掛かる。

「シュウ、終わりましたよ」

考えているうちに、ゴブリンを倒した様だ。

「アル、よくやったな」

と花を避けて頭を撫でる。

うーん、なんか手触りがいい。

「ありがとうございます」

うつとりしているかどうかは、その無表情な顔からは読み取れないが、避けないことを考えると嫌がってはいない様だ。

どうでもいいと思っている可能性が高いけど。

その後にアルと話し合い、試行錯誤の末に生み出されたのが、【オペレーションコード】である。

43匹目つと。

『ギョグエエエ』

倒すと共に、キーンと効果音がする。
アルのレベルが上がり、新しいスキルを覚えたらしい。

「《悲鳴》ねえ」

説明文によると、

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

ゴブリン相手だと使わなくても十分なのだが、どんなものかは興味がある。

「アル、あそこに居るゴブリンに《悲鳴》だ」

「……………!!」

「ん？ 何も聞こえないけど、おっ!？」

指定したゴブリンがぱたりと倒れるが、3秒ほどでむくりと起きあがり、こちらに向かって走ってくる。

1パターンだが、コードで倒す。

それにしても、使い様によっては今までよりも効率よく戦えそうだが、コードは1匹で居るゴブリンにしか使えないので、2匹以上固まっているのは避けていたが、【悲鳴】を活用すれば2匹までなら行けるっぽい。

まずは1匹を《悲鳴》で気絶させ、その間にもう1匹をコード倒す。

そして、起きあがってきた奴にもコードを使い倒す。

この戦法を【オペレーションコード】と名付けることにする。

アルにコードの事を伝え、2匹いるゴブリンを探していると、ピッ！ピッ！とアラームの音がした。

「もうそんな時間が、6時間なんてあっという間だな」

これからという所で、夕飯の時間になってしまった。

狩りの続きは夕飯と風呂を済ませてからやることにして、ログアウトする為に急いで街に戻ることにした。

敢えて触れなかったが、狩りの最中も帰り道もすれ違った人の目付きが怖かった。

原因は、俺の後ろからちょこちょこ付いて来るアルなのだろうが、イジメヨクナイ。

アルルーナ成長日誌

LV3 HP:178 SP:39

STR:19 VIT:21 INT:25 DEX:8 AGI:
11

攻撃力:21 魔法攻撃力:17 防御力:31 魔法防御力:2
2 敏捷度:14

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

愛情度:112 「普通」

満腹度:76% 「小腹がすいた」

備考:

他の使い魔がどうかは知らないが、かなり優秀。
意思疎通が楽な為、苦手な戦闘を1人よりもとても楽にこなせる。

1:SS

スクリーンショットの略。

現在画面に映っている映像を、そのまま静止画像ファイルとして保

存する機能を使い、撮られた画像の事。

第4話

夕飯と風呂を手早く済ませて、新情報はないかと攻略サイトと掲示板を覗いてみる。

これといってめぼしい物はなく、使い魔関連の情報も有益な物はなかった。

目撃情報は多数あるが、正確な入手方法の情報はまだ出ていない。度々入手方法が書き込まれるのだが、しばらくするとガセだったとの書き込みが連投されている。

まあ、俺が書き込めばいいのだけど、本人が特定されそうな書き込みは、後々煩わしい事になるのは確実なので御免蒙る。

それに、この手のゲームでは情報こそがもつとも貴重なアイテムだと言える。

運良く手に入れたそれを口八で提供するほどお人好しではない。なんて、かつこよく言っているが、本当は書き込みをした事が無いので踏ん切りがつかないだけである。

「本当に情報が欲しかったら、ゲームの中で直接聞いて来るだろうし。まあ、いいか」

無駄な事に時間を使うのは止めて、さっさとログインすることにする。

「ふう、こっちの方が身体が軽く感じるな」

ここはホームポイントだ。

ログイン、ログアウトを安全に出来る所で、死亡した時に帰還される場所でもある。

ログアウトはフィールド上でも出来るのだが、10分程プレイヤーが無防備な状態で残ってしまう。

その間にPKやMobに殺されてもデスペナが発生するので、出来るだけホームポイントでログアウトした方がいいのである。

「……………」

無言と視線が痛い。

一応挨拶しておいた方がいいかも。

「お待たせ。アル」

「ううん。私も今来た所だから気にしないで」

「……………」

こっ、これはツッコミを入れた方がいいのだろうか？

若干頭を差し出した様に見えるのは、ツッコミ待ちか？ ツッコミ待ちなのか？

間違っていた場合、愛情度が下がる可能性もあるが、ツッコミ待ちだった場合、スルーしたら可哀想だ。

一か八かだが、ツッコミ待ちの方に賭けてみる！！

「彼女かつ！！」

「……………」

外してしまったようだ。

「どこからだよっ!!」の方が良かったか？

悩んでいた分、ツッコミが遅れたのが良くなかったのかもしれない。やっぱり、人間慣れない事はするべきじゃない。

いや、俺が悪いんじゃない!

よく考えれば、こんなふざけたAIをプログラムした”親父”が悪いんだ!!

すでに脳の中では『開発チーム』変人『親父』即ち『開発チーム』親父』との式が成り立っていた。

そんな事を考えていると、くいくいつとズボンを引っ張られる。

「ん?」

と視線を向けると、そこには、

「……………」

親指を立てた無表情のアルが居た。

すでに心身ともに疲労のピークに達した気がするが、街中をぶらぶら見回る事にする。

「アル。情報収集がてら街の中をぶらぶらつこつと思っただけど、二二二で待ってるか?」

「いえ、シユウと一緒にいきます」

「そつか。んじゃ、迷子にならないようにな」

「はい」

ドアを開けて外に出る。

まだまだ、プレイヤーの開く露天の数は少ない。

出してる商品も、スモールポーションやクエストアイテムの肉と毛皮くらいしかない。

遠目なのではつきりと値段は見えないが、余り儲けが出るとは思えない。

恐らく、ユリルを得る為というより、会話の切っ掛けが欲しくて露天しているのだろう。

商品を買った人と軽く雑談している姿が、そこそこ見受けられる。

うゝむ、社交性のある人はいいな。

ああして、情報や仲間を得られるのはこの手のゲームで重要な才能である。

孤高を気取ってか、敢えてソロプレイを楽しむ人もいるが、会話の切っ掛けが掴めずソロプレイをしている人もいると思う。

かくいう俺も、会話スキルの低さからソロが多かったりする。

そんな事を考えていると、

「屋台か」

NPCの店の方まで来てしまった。

串焼きのような物が売られているが、現実で夕飯を食べたせいか、それ程食欲が沸かない。飽く迄もデータ上の物なので太ったりする心配がなく、ダイエットにはいいかもしれない。まあ、はつきり言っただいエットに縁遠い身体だし、資金不足になりがちな序盤は、唯でさえ少ない資金を娯楽に投入するのは憚られる。収穫は全くなかったが、気分転換にはなったと思う。また、狩りに行くかな。

「アル、そろそろ狩りに行こうか？」

「……………」

返事がない。ただの屍のよ…………じゃなく。じっと何かを見ている。

「どうかしたか？」

「いえ」

そう言われても気になり、先程見ていた方向を見てみる。なるほどね。そういう事か。そこには、NPCの経営する飲み物屋の屋台が在った。そつえば餌をやってなかったと思ひ、若干気まずい思いがしてくる。

「あゝ、なんか喉が乾いたなゝ」

「……………っ!？」

正直、自分でも白々しいと思ったが、屋台に向かう。
お酒類はなかったが、結構色々な種類が用意されている。

『いらつしやいませ』

「えっと、俺は、【サラマンダーの怒り】を1つ下さい。アルはどれ」【ドライアードの喜び】を1つ！！！」を下さい

またなんか変なスイッチでも入ったのか。

アルの方を見ると、いつもの無表情が嘘の様に崩れていた。
NPCの店員がコップに注いでいる作業を、一心不乱に見つめている。

「もう、普段家で何も食べさせてないみたいじゃない」と、母親っぽいツッコミを入れたくなる。

『はい、お待ちどうぞさまです。2つで、80ユリルになります』

「はい。これ」

『ありがとうございます。また来てくださいね』

この萌え……燃え盛る炎の様な緋色が俺のだろう。
萌黄色の方をアルに渡す。

「はい。落とさないようにね」

「ありがとう、シユウ。貴方に心からの感謝を」

「あ、ああ」

そこまでのことか？　そこまでのことなのか？？
小1時間程問い詰めたい気がするが、喜んでくれたので良しとしよ
う。

コクコクと、至福の表情で飲む姿に不思議な昂ぶりを覚えるが、人
間失格のような気がして目を逸らす。

「俺も飲むか」

と、ベリー系の甘酸っぱい味を期待して、飲んでみる。

ん？　このまったりとして、それでいてしつこい、不快感を催し味
覚を破壊するかのような辛味。

「ぐふおー!!」

喉が焼けるように痛く、息が出来ない。

クツ!?　無差別殺人か!?

それとも、分不相応な使い魔を得たことにより、暗殺者を差し向け
られたか!?

「シユウ」

「……………」

「シユウ」

アルの呼び掛けが、失いそうな意識を繋ぎ止める。

「……………ぐ……………な、なんだ？」

「それ。使い魔用の飲み物」

「え？」

「だから、使い魔用の飲み物」

「な、なんだつて……!!!!」

思いも寄らぬアクセシントには遭ったが、気を取り直して赤ポの補充と新しい装備を購入する。

しかし、アルよ。

出来れば飲む前、いや、購入前に言っただけ欲しかったよ。

あそこが使い魔用ドリンクショップだと……。

アルルーナ成長日誌

LV3 HP:178 SP:39

STR:19 VIT:21 INT:25 DEX:8 AGI:

11

攻撃力：21 魔法攻撃力：17 防御力：31 魔法防御力：2
2 敏捷度：14

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

愛情度：216 「相方候補」
満腹度：120% 「かなり満腹」

備考：
何故かツッコミをさせようとボケる事がある。
それと若干天然っぽい。

1：PK
【Player Kill】、【Player Killer】の略。
他のプレイヤーに対して攻撃を行い殺害する事、またはその行為を行う人の事。

2：デスペナ
【デスペナルティ】の略。
死亡時に与えられるペナルティ。
経験値を失ったり、アイテムを落としたり、所持金の減額などが行

われる。

3：ソロ

パーティを組まず、一人でプレイすること。

第5話

夜空に輝く満天の星を見上げる。

こんなに美しい星空を見てみると、自分が如何にちっぽけな存在なのかを痛感させられる。

日々の生活に追われ、夜空の星を見るゆとりすら忘れてしまっていたなんて。

「アル。星が綺麗だね」

傍らに佇んでいる、自分にとって掛け替えのない存在に声をかける。出会ってから僅かな時間しか経っていないのに、彼女と一緒に居るだけですごく幸せな気分させられる。

彼女は私の顔を見上げ、

「シユウ。囲まれていますか、どうしますか？」

あっさりと現実逃避から目を覚ましてくれましたよっと。

現実とは違い、【ノア】は漸く夕暮れの時刻だ。

夕飯前と同じようにゴブリンを狩っていく。

1、2匹ずつの処理能力なので、それ程は効率が良くない。

「よいせつとー！」

『ゴギエアア』

「ほいつと!」

『ゲギヨグウウ』

「跪きなさいつ!」

『ゲへへへ』

「こなくそ!」

『ギヨグウウウ』

なんか、若干不穏当な発言があったような気がしたが、スルーしておく。

キーンという効果音と共に、技を習得した事を伝えるシステムメッセージが流れる。

「おっ、やっと技の登場か」

【片手剣】のスキル熟練度が100になり、やっと技を習得できた。

《クレセント》

斬り上げから斬り降ろしにつなげる基本技。スキル熟練度に応じて攻撃回数が増加。

「ふむん?」

どうにも文字だけではイメージが掴めない。

実際に使ってみるか。

「アル」

「……………」

ん？ 聞こえなかったのかな？

「アル？」

「は、はい。なんですか？ シュウ」

ツッコミ待ちだったのか。

狩りの相棒として特に不満はないのだが、やたらとフアジーな思考に付いていけない部分がある。

「いや。覚えた技を試してみたいから、次のは手を出さないで見てくれ」

「わかりました」

とは言ったものの、1人で戦うのは初戦以来である。

多少緊張しながら手近のゴブリンに向かう。

うまく気付かれずに背後から近付けたので、技を使おうとしたのだが、

「……………」

あれ？ 技が出ない。

「……………」

やっぱり出ないな。

嫌な予感がするが、あれか？ あれなのか？

「クレセントツッ！」

おおっ！ グンツと若干身体が引っ張られ、自分が動かすだけよりも速く滑べらかに動く。

システムのアシストに乗るように、居合いの様な姿勢から逆袈裟に斬り上げ、来た道に戻るように斬り降ろす。

『ギョグエアアア』

癖になりそうな快感を感じる。

1人ではゴ布林相手にすらあたふたしていた自分が、急に一端の剣士にでもなった気がしてくる。

それに魔法にはない爽快感がある。

しかし、

「選りによって音声入力かよ。今時、戦隊ヒーローじゃあるまいし」

というのが、ネックである。

考えてみて欲しい。ゲームの中とはいえ、現実の姿なのだ。

いい年した大人ではないが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。どおりでcの時から、技についての詳細情報がなかった筈だ。

もう1つ、予想では勝手に身体が技の動きをするのかと思っていた。ただ実際は、ある程度の動きはシステムが制御してくれるが、動かすのは自分の様だ。

まあ、技を使わずに自分だけで動きを再現するよりも、よっぽど動

きが速く、ダメージが高くなるらしい　ゴブリン相手なので実感はないが、見付けた少ない情報の中にそう載っていた　ので嬉しいが……。

と、

「……………」

いつのまにか傍までアルが来ていた。
な、何故だ!?

アルの視線から敬意の念を感じる。
小学生高学年の女子が、くだらない事で笑っているクラスの男子を見るかのような視線を、向けられると思ったのに。

アルの期待の視線に後押しされる形で、コード　を封印しゴブリンを狩ることになった。

「クレセントツ!」

『ギョグアアア』

1つ!

「クレセントツ!」

『ガアアアツアア』

2つ!!

「クレセントーツ!!!」

『ギョエエウエエエ』

3つ!!!

すでに、恥ずかしさなど忘却の彼方である。

というのも、何気に楽しくなってしまったのだ。

アルはというと、態とじゃないと思いたいが、倒そうとせず足止め
に専念している。

「そろそろ戻る」

何時の間にか辺りは暗くなっていた。

予想以上に乗りに乗っていたようだ……調子に。

敵を求める余りどんどん移動していた為、周りにプレイヤーの姿は
ない。

それどころか、派手に声を上げていたせいで、近くにいたゴブリン
を一気に集めてしまったようだ。

という経緯で、冒頭の部分につながるんだけど。

何故か襲ってこず、一定距離を保って周りに集まっている。

総攻撃でもするつもりだろうか？

「シユウ。どうしますか？」

再度のアルの問いかけ。

が、これといって打開策が在る筈もない。

しかし、一応だが、主人としての見栄がある為、

「左の方が若干手薄だから、一気に突破しよう。止めは刺さなくていいから、近づかせないよう気を付けて」

「わかりました」

特攻を敢行することにした。

覚悟を決め、突っ込もうとした時、

『ゲギヨギヨギヨ!!!』

ゴブリンの怒鳴り声のようなものが聞こえた。

「ん？」

「行きますか？」

「いや、様子がおかしい。ちょっと待って」

前方のゴブリンが左右に分かれる。

そして、やたらとピカピカした光源が近づいて来た。

「あれ何かわかるか？」

「いえ。ただ、あれが品位に欠けているのはわかります」

2 m程前で立ち止まった”ソレ”は、金ぴかのゴブリンだった。肌の色から手にしている短剣、装飾品まで金ぴかなのだ。イベントモンスターなのだろうが、何故かあまり喜べない。

『ギャギャギャ。ヨクモオレサマノテシタヲタクサンタオシテクレ
タナ』

「話せるのか!？」

ちよい吃驚である。

知性の感じられない見た目に反して、言葉を解するとは。そんな事を考えている間にも、何やらぶつぶつ能書きを垂れている。当然無視であるが。

『ヨツテ、オレサマミズカラアイテヲシテヤロウ』

「いや、何がどうなってそうなたんだ？」

「シユウ。どんなお馬鹿が相手でも、話はちゃんと聞くものです」

クツ！ 口惜しいが正論である。

「悪かったな。アル」

「いえ。次から気を付けていただければ結構ですので、気にしないで下さい」

『アヤマルアイテガチガウダロ!!』

「……………!!!!!!!!」

精神系の攻撃か！？
心のどこかを貫かれたような気がする。
まさか、ツツコミスキルを習得しているとは！？ 侮れない奴だ。

『ヨツテ、オレサマミズカラアイテヲシテヤロウ』

「望む所だ！」

「受けて立ちます！」

何とか仕切りなおして、場の空気を守り立てる。
どうやら、金ぴか君を倒せばいいだけらしい。
周りのゴブリン全部を相手にする事を考えれば楽なものだ。

「アル。コード だ」

「はい」

見た目から、普通のゴブリンとの違いが見つからず、攻撃方法も同じだろうと必勝の策を用いる。
ただ、相手が言葉を話す事から、念の為金ぴか君に聞こえないよう小声で話す。
そして、少しでも注意を引く為に、地面を蹴って音を立てると、

『ギョギョギョー！』

あっさりと、こちらに突っ込んできた。

「のわっ！」

思っていた以上に、普通のゴブリンよりステータスが高かったようだ。

普通のゴブリンとは段違いの速さで襲いかかって来る。

「ちよっ！ まっ！ って！ って！」

短剣一本での攻撃を両手の二本の剣で弾くのが精一杯である。

普通のゴブリンなら、1パターンの斬り降ろししかして来ないのに、むかつくくらい高性能な奴だ。

アルはまだかと、若干の苛立ちを覚えた時、

『へブチッ！』

チャンス到来である。

透かさず、両手を踏みしめる。

「クッククックク」

『ア、アノ〜？』

「ん？ 何だ？」

『アシヲドケテホシイノデスガ』

金ぴか君が、卑屈な感じで懇願をする。

「ん〜ん。……却下」

勿論、そんな意見は却下である。
というか、まともに戦えば負ける事確定だし。

「アル。根っこはしっかり足に巻きつけておけよ」

「らじや」

っ！？ いや、今は止めておこう。

いつもであれば、転ばせるまでがアルの仕事なのだが、足をフリーにすると力任せに逃げられるので、倒すまでは掴んでいてもらおうとする。

「ではっ！..!」

10分後、

「まだかよ」

金ぴか君は未だに存命である。

『イタイッテ』

いい加減にして欲しいものだ。

『ニヨヘー』

面倒くさい。

『ニユホホ』

……。

『ムニユウ』

……。

『へバイドブ』

金ぴか君のHPバーは、いつのまにか0になっている。
本来なら、消えていく筈なのだが、全くその心配がない。

「おい！」

『モベイボ』

「おい！……！」

『マニユノ、ン？ ナニ？』

「いや、遊んでるだろ？」

『ソ、ソシナコトハナイデスヨ』

あからさまに目を逸らすな！ てか、アルは足から根っこ外してるじゃないか！？

体育座りをして、ぼーっとこちらを見ているし。

「早く死ね」

『へッ？』

「早く！」

『ハ、ハイ。ギョブロオオオ』

ナニか拙いものを感じ取ったのか、急に素直になってくれた。びくんと、一瞬硬直し消えて……いかない。貴様っ！とばかりに剣を振り下ろすが、

「あら？」

今度は刺さらない。

『エツト。イベントヲススメタイノデ、テヲジユウニシテクレマセ
ンカ？』

「ああ」

釈然としない物を感じたが、一応従う。

まさか、「ウソニキマツテルダロ。バカメツ！」って攻撃して来ないだろうな？

さ、流石に、そこまで理不尽じゃないか。

「アル。こっちに来て」

「はい」

どこか、やれやれと言った感じでこちらに来た。
いやいや。お前はこっち側だろっ！

『ヨクゾオレサマヲオシタ。キサマタチノケントウヲタタエテ、
コレヲクレテヤロウ。アリガタクチヨウダイシロ』

と、身に付けていた腕輪をこちらに投げる。

【ゴブリンロードの腕輪】「防御力＋1 クリティカル率上昇」
金メッキが施された悪趣味な腕輪。

『デハ、サラバダ』

その一言を合図にしてか消えていく。

周りにいたゴブリン達も方方に散って行った。

「……………」

何故だろう？ 勝った筈なのにどこか敗北感がある。

途中までは良かったんだ。

見た目はアレだが強敵との戦い。

ちよっと卑怯だったが、作戦を立てて辛くも勝利を収める。

あれか！ コード がよくなかったのか？
もっと、誰かを壁役にしてとか？
それとも正統派っぽいのがよかったのか？

「シユウ。1つお聞きしたいのですが」

「ん？ どうした？」

「ソレ装備するのですか？」

「ソレ？」

アルの視線を辿ると、手の中にある悪趣味な腕輪に行き着いた。

こ、これを俺が装備するののか？

クリティカル率上昇は魅力的だが、こんな物を装備するのは己のアイデンティティー崩壊を意味する。

「アルが付け「嫌です！」そ、そうか」

うゝむ。AIすら拒絶するとは、なんとという凶悪な腕輪なんだ。

是非ともこの場に捨てて行きたかったが、取引に使えるかもしれないので取っておく事にする。

「なんか、疲れたから街に戻るうか？」

「そうですね」

ログイン中は身体が睡眠状態にあり、休息は必要ない筈なのだが、精神的なものまでは癒してくれないようだ。

「よし！ 街に戻ろう」

街に帰る途中、ふと疑問に思ったのだが、金ぴかもアルもAIにしてはかなり思考が人間くさい。
もしかしたら、AIじゃなくプレイヤーの様に中に人間がいるんじゃないか、という怖い結論に達したが、自身の為に即座に却下した。

アルルーナ成長日誌

L V 6 H P : 2 6 5 S P : 5 5

S T R : 4 1 V I T : 4 6 I N T : 5 1 D E X : 1 7 A G
I : 2 1

攻撃力 : 2 4 魔法攻撃力 : 2 7 防御力 : 3 6 魔法防御力 : 3
8 敏捷度 : 2 3

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP 5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

愛情度：277 「相方候補」

満腹度：93% 「満腹」

備考：

思考に謎な部分が多い。

使い魔は基本忠実な筈だが、簡単にNOと言う。

やはり、プログラミングした奴は病院に行くべきだと、改めて思った。

第6話

あの後、街に着いてからアルに飲み物を買ってあげ、ホームポイントに戻ってログアウトした。

やはり、精神的な疲れは意識がある状態だと、なかなか回復しないと思う。

ゲームをして精神的に疲労するのは、どう考えても本末転倒だろう。そして、【Ark】の中でそのまま寝たのである。

「ふあゝあ」

昨日は結局ほぼ1日中寝ていた為、逆に身体がだるい気がする。

まあ、今日も1日ゲームをするのは決定事項だが。

「なんか新しい情報あるかな？」

某大規模掲示板を見てみると、金ぴか君の事が書き込まれていた。いや、それはいいのだ。それはいいのだが。

「いやいや。勝てないってどういうことよ!？」

イベントのフラグ自体は簡単な物で『ゴブリンを規定数以上倒す』だけらしい。

その情報を書き込まれた後、それを見た結構な人数のプレイヤーが挑んだらしいが、物の見事に砕け散ったっぽい。

確かに普通のゴブリンよりもかなり素早かったが。

あ、アレが原因か。

異常なHP量とHP0になっても何故か死なないという理不尽。

じゃあ、あの悪趣味な腕輪って結構なレアになるのかな？

金ぴかを楽に倒せるくらい、全体のレベルが上がるまでだろうけど。

「うーん。どうしよ？ 早い内に腕輪の事書き込んで、何かと取引しようかな？」

もちろん、ここではなく公式HPの取引掲示板でだ。

多少の冷やかしはあるだろうが、流石に詐欺や嫌がらせなどはしないだろう。

という訳で、アイテム情報と同等の物との交換を望む旨を書き込む。

「メールお願いねっと。これでよし」

最後に、希望者は交換する物の情報をゲーム内でメールしてくれるよう追記した。

ちなみに、書き込んだのはアイテム名と効果だけだ。

決して、あの見た目について書けば、交換してくれる物のランクが下がりそうだ等とは思ってはいない。

「おはよ」

「おはよう、四季」

「アニキ、おはよ〜」

「遅いわね。夏休みだからってだらだらしない！」

う〜む。何故か姉さんかあさんがお怒りモードである。

チラリと親父を見てみると、何気なく新聞を読んでいる様に見えるが、こめかみから流れた汗を見逃さない。
新聞逆さだし。

「ごめん、姉さん。で、親父。何をやったんだ？」

「なっ、何を言ってるんだ。四季。お、お父さんが浮気なんてする筈ないじゃないか！」

「」「」……………「」「」

いや。流石にその自爆っぷりは人としてどうかと思うよ。
しかし、浮気？ この変人が？
そんな物好きが母さん以外にいるとは思えないが。

「しいきい？」

「申し訳ありません、お姉様」

心の声でもダメなのか？ というか、どうやって心を読んだんだ？
若干の動揺を、両親の異常っぷりはいつもの事かと無理やり鎮める。

「で、どこの誰と浮気したんだ？」

「お隣りさんだって」

妹よ、それは本当か!?

あのご近所のアイドルでもある涼子さんが、親父の毒牙にかかるなんて、ジーザス。

砕け散った俺の初恋。

斯くなる上は、

「聞いてよ、四季。この人ったら今朝早く、一緒に散歩してたのよ！」

「いや。だから、お隣りさんに頼まれて散歩しただけだっつて」

「言い訳なんて聞きたくないわ！」

ん？ 頼まれて散歩？

非常に気になるキーワードだ。

我関せずな妹に聞いてみる事にする。

「誰と散歩したんだっつて？」

「お隣りのマロンよ」
マロン

どうせそんなオチだろうと思ったよ！

仕様もない夫婦喧嘩は放っておいて、さっさを朝食を済ませて部屋に戻る。

今日は、ゴブリンのみというのも飽きたので、街の近くを散策しようかと思う。

決して”アレ”に遭いたくないからではない、と思う。

「ふむふむ」

ゴブリンしかいない北の草原とは違い、街周辺は数種類のMobがいるみたいだ。

攻撃方法と注意点を出来るだけ記憶してからログインする。

ログインして、最初に目に飛び込んできたモノは、

「アル、何してるんだ？」

「イ、イエ。ナニモシテマセンヨ？」

鏡に向かって百面相しているアルの姿だった。

無表情なのを気にしていたのか。

鏡に映ったアルの笑顔に、不覚にもときめいてしまったのは秘密である。

「え〜と。今日は、街の周りを探索するつもりなんだ。昨日と違って色んなMobが出て来るから、気を付けてね」

「わかりました」

じゃあ、行くべと思ったが、

「ありゃ？ もうメールが着てる」

メール着信のシグナルが点灯していた。

2件の着信があったが、

「赤ポ10個と【ショートパイク】？ ああ。槍か」

赤ポは論外として、槍も多分買い換えて不要になった奴だろう。武器屋で見た気がする。

断りのメールを送り、今度こそホームポイントから出る。

「ウツプ。グロツ過ぎい」

「シユウ？」

現実の人間の姿を外装に出来るくらいだから、【幻夢】のグラフィックはかなり本物に近い。

そのせいで、初戦のゴブリンにやられそうになったのだが、すっかり忘れてたようだ。

何が言いたいかというと、

「食後に【ゾンビ】はきついだろ」

って事である。

ログイン前に見たMob情報が思い出される。

注意点：外見 悪臭

って、どう注意すれば良いんだよ!?

「アル。自由に攻撃してくれ」

「わかりました」

仕様がなく普通に戦う事にする。

『オオオオーッ!』

叫び声を上げ、ゾンビが突進してくる。

攻撃方法は体当たりと掴んでの噛みつきだけだった筈だ。

「よつと」

ドタドタとした突進を避けた時、

「えい!」

アルの声と共にピシッ!デッ!っという音がした。

背後から攻撃しようとして透かさず振り向くが、肝心のゾンビがいない。

「あじ?」

周りを見渡すがそれらしい影もない。
アルが何らかの攻撃で倒したのかと若干気を抜く。

「シユウ。逃げてください!!」

「へっ?」

『オウオアー』

「うげっ、離せ! このっ!」

突然、足元から現れたゾンビにしがみ付かれる。
うがぁ! ネットトして気持ち悪いし、クセエ!
なにより、Mobとはいええ、男に抱き疲れるのが耐えられん!

『ウウオアオアーッ』

「って、いい加減に離れんか!!」

顔面に剣を突き刺し、力任せに蹴り飛ばす。

アルも根っこで引っ張ってくれた様で、簡単に引き剥がせた。

「このっ! このっ! このっ!」

両手の剣を振り回し、滅多斬りにする。

アルも気を利かせてくれたのか、根っこでゾンビの両手を吊り上げ、襲い掛かって来ようとするのを阻止してくれた。

「クレセントッ!!!」

『オウオオオ』

ゾンビが断末魔の叫びを上げ、消えていった。

「なあ、アル？」

「何ですか？」

「ゾンビが俺にしがみ付いて来る直前、姿が見えなかったんだが、どうなってたんだ？」

「転んでました」

「へっ？」

「シユウの足元でうつぶせに倒れてました」

「……………」

つまりこういう事か？

俺がゾンビの突進を横に避けて、背後から攻撃しようとして振り向こうとした時にアルの攻撃で転んだ。

ん？ あの”デッ！”か？ あの”デッ！”なのか？？

まさに灯台下暗し！！ とでも言えいいのか！？

「そ、そうか」

「どうかしましたか？」

「いや。何でもないんだ。何でもないんだよ。アル」

アルに”自由”に攻撃してくれと指示したのは俺だ。

恐らく、ゴブリンとの戦闘で多用したコードから、転ばすのが戦闘手段として有用だと学習し、ゾンビの足を根っこで払ったのだろう。

その攻撃のタイミングが悪かったからと言って、アルに対して文句を言える筈もない。

足を引つ張って転ばすなんて事をアルに覚えさせたのは、自分なんだから自業自得なのだ。

ゾンビにしがみ付かれたせいで悪臭が漂っていたが、2、3分すると防具等に付いた汚れごと消えてくれた。

ちなみに、悪臭が消えるまでアルが若干距離を取っていたのは、気のせいだと思いたい。

L V 6 H P : 2 6 5 S P : 5 5

S T R : 4 1 V I T : 4 6 I N T : 5 1 D E X : 1 7 A G

I : 2 1

攻撃力 : 2 4 魔法攻撃力 : 2 7 防御力 : 3 6 魔法防御力 : 3

8 敏捷度 : 2 3

【通常攻撃】「消費S P 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費S P 5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

愛情度 : 2 7 2 「相方候補」

満腹度 : 9 8 % 「満腹」

備考 :

ゾンビと戦った後は、毎回、臭いが無くなるまで距離を取る。
俺でもそうするだろうが……すごく切ない気分になる……。

1 : レア

レアアイテム。

M o b から稀にしかドロップしない物、難易度の高いクエストの報酬など、通常ではなかなか手に入らないアイテムのこと。

第7話

現在、取引相手との待ち合わせ中である。

3日間で56通のメールが届いた。

その内、55通は先の2通と同じく余ったと思われる装備やアイテムだったが、残りの1通はちょっと変わっていた。

かなり丁寧な文面で、自分が鍛冶屋をしている事、交換する物の説明が難しいので直接会って話したいとの旨が書かれていた。

生産系で何故”アレ”が必要なのか不思議に思ったが、ここまで丁寧なお願いを無下に断るのは失礼だし、説明が難しいという交換する物にも興味があり、とりあえず会う事にした。

待ち合わせ場所は、街の南側にある広場の噴水前にあるベンチだった。

アルは俺の隣りに座り、例のドリンクショップで買った飲み物を味わう様にちびちび飲んでいる。

ちなみに、今飲んでいるのは【ウンディーネの憂鬱】だ。

ドリンクショップに行く度にサラマンダーの怒りを勧めているのだが、毎回きつぱりと断られている。

「シユウさんですか？」

「はい、そうです。【カナタ】さんですね」

「ええ。無理を聞いていただき、申し訳ありません」

取引相手のカナタさんは、30代後半くらいの真面目そうなおじさんだった。

ちびな俺からすると、ものすごく羨ましい長身で、若干痩せ気味である。

「いえ。あ、えくと。ゲームの中ですし、お、いや、僕の方が年下ですので、楽な話し方でもいいですよ」

「そうかい？ 偶にマナーに五月蠅い人がいるからね。初対面では、出来るだけ敬語を使う事にしてるんだよ」

そういうのがあるから、面倒になってソロが多いんだけど。

ごめんなさい。嘘です。口下手で人見知りだから、ソロオンリーなんです。

「確かに、そういうの厳しい人がいますね」

「押し付けられるのは困るよね。ああ、シュウ君も楽な話し方でいいよ」

「助かります。隣りに座ってるのは、使い魔のアルです」

無難に自己紹介を済ませます。

アルは飲み物に気が向いていて、今頃カナタさんに気付いたのか、目をぱちくりさせている。

「アルちゃんでもいいかな？ カナタといます。よろしくね」

「はい。アルルーナです。好きな様に呼んで下さい。カナタ」

「行き成り呼び捨てかよ！」

ぺちんつと、反射的にツツコミを入れる。

叩き易そうな位置に頭を向けていたアルは、上手くいったとばかりにニヤリと笑う。

「ぬう」

この3日、敢えてスルーをし続けてたのに、まずったな。

第3者がいる事で緊張が解け、気を抜いてしまったせいだろう。金ぴか君イベント以来の敗北感を味わう。

「クツクツク。あ、ああ。いいんだよ。シユウ君」

「そうですか？ すいません、なんか変な風に学習しているみたいで」

「しかし、使い魔だったかな？ はじめて見たよ。cの時は、まだ実装されてなかったから、残念だったんだけど」

ん？ cの時？

「カナタさんって、テスターだったんですか？」

「そうだよ。だから、シユウ君のアイテムがどうしても欲しくってね」

「どづいつ事ですか？」

「実は、鍛冶屋に必要な鉱石を掘る時にクリティカルが出ると、偶

にだけどレアな鉱石が出て来たりするんだ」

初耳である。

多少興味があったので、情報は漁っていたがそんな情報は出ていなかった。

「えっ？ でも、cの時の情報には目を通していますが、そんな事出て無かったですよ」

「ああ。テストターの鍛冶屋は大体50人くらいだね。その中でも、熱心に情報収集してた鍛冶屋は20人程だったんだよ。で、話し合っつてこの事は隠匿する事にしたんだ」

まあ、無い話じゃない。

どんな情報でも、何かを切っ掛けにお宝になる可能性がある。

この情報も、クリティカルなんて狙って出来ないから、一見意味の無い情報に思えるが、今回の取引アイテムである腕輪の存在が出た事で、一気に有益な情報になったわけだ。

あのイベントは、cの時にはなかったから、腕輪の事は誰も知らなかった。

だから、新規プレイヤーがクリティカルの秘密に気付く前に間に合っつて、運がよかったとも言えるけど。

「でも、他のメールの人って赤ポや要らなくなった物とか、どうしても欲しいって感じがしなかったんですけど」

「それは……多分、戦闘系のテストターか新規の人だと思うよ。まあ、あわよくばと思って送った鍛冶屋もいたかもしれないけどね」

ふむ。ダメ元か。

「ただ、他の鍛冶屋と話した感じだと、下手に価値を知っていたせいで、交換する物を用意出来ないから、諦めたって雰囲気だったよ」
なるほどね。

だが、余計にカナタさんの交換する物が気になるな。
ここまで腕輪の価値を話しておいて、つまらない物を出して来るとは思えないが。

「この情報って言わなかった方が、取引しやすかったんじゃないですか？」

「ん〜、まあ、そうなんだけどね。後で、この事知って騙されたって思われたくないし」

「ならいいんですけど。じゃあ、見せてもらえますか？」

「これだよ」

と言って鞆からある物を取出した。

ショートソード？　なんで？

「ショートソードですよね？　ひよつとして、情報とショートソード合わせてって事ですか？　だったら」

「ああ、違う違う。これを出したのは、今からする説明をわかりやすくする為だよ」

「???」

説明ねえ。まあ、自信あるみたいだから聞いてみるか。
気に食わなかったら、断ればいいんだし。
先に情報を出してもらってるので、無下にしないかい。

「どづい事です？」

「まず、このショートソードだけど、これは僕が造ったやつでね。
君が持っているのと攻撃力を比べて見てくれないか」

「じゃあ、ちょっと貸してもらいますよ」

「どづい事だろう？」

あれ？ カナタさんの剣の方が攻撃力と耐久度が高い。

「3高いですね。攻撃力と耐久度が」

「熟練度にもよるけど、同じ素材で同じ武器なら、基本的にプレイ
ヤーの造った装備の方が、効果は高いんだ」

まあ、大抵のゲームではそうなってるな。
偶に化け物みたいなドロップ品もあるけど。

「で、とりあえず、このショートソードは手付として受けとって欲
しい」

「手付ですか？」

「ああ。そして、良い鉱石が手に入ったら、優先して君の武器を作
る事を約束する。ただ、その時はお金を払ってもらうけどね」

テスターの鍛冶屋なら、少なくとも新規に任せるよりはいいだろう。それに、今回の取引にしても頭の回転もいいみたいだ。こういう人は、味方にしておいた方が得策だと思う。

「専属鍛冶屋みたいなものですか？」

「そうそう。他にお得意さんがいるけど、優先するって約束は守るよ」

こっちに有利過ぎる条件の様な気もするけど、それだけ腕輪に価値があると判断しているんだろう。しかし、出し辛いな。

あの見た目だと、話しを無かった事にされそうで怖いな。

「で、どうかな？」

「あ。いえ、取引条件としては申し分無いんですけど、逆にこっちが出し辛くなって思ったんです」

「どういう事だい？　もしかして、あのアイテム自体ガセだったなんて事じゃ」

ああ、勘違いしてるな。正直に話した方がいいか。嘘を付いた訳じゃないんだし。

「いやいや。違いますよ。書き込んでいた通りの装備効果なんですけど」

「なんですけど？」

「見た目がちょっとアレなんですよ」

と、腕輪を出す。

「じつ、これは！？ 確かに、出すのを躊躇うのがわかる気がするよ」

予想通りの反応である。

AIにまで嫌われた腕輪だもんな。

「この腕輪でいいですか？ こちらとしては、先程の条件なら取引OKですけど」

「ちょっと見た目に吃驚したけど、効果があるのなら気にしない」とにするよ」

「じゃあ」

「ああ。交渉成立だ」

やった〜！ やっと腕輪とおさらば出来……じゃなくて。

腕が良いかは判らないけど、専属鍛冶屋ゲットである。

「ありがとうございました」

「こちらこそありがとう。無理を聞いてくれて」

あの後、カナタさんはフレンドリストに登録し帰って行った。
早速、街の南東にある鉾山に向かうそうだ。

全く会話に加わらず、静かだなと思っていたアルは、ぐっすりと寝ていた。

幸せそうな寝顔を見ていると、起こすのが可哀想だったので、起きるまで待つ事にする。

3時間後、全く起きる気配が無い。

いい加減起こすかと思った時、気付いてしまった。

「薄目開けてるの見えるぞ」

「……………!?!」

「狸寝入りかよっ!」

ぺちんっ! にやり

アルルーナ成長日誌

LV10 HP:377 SP:75

STR:65 VIT:80 INT:86 DEX:25 AG

I:33

攻撃力:38 魔法攻撃力:46 防御力:65 魔法防御力:5

5 敏捷度:27

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

愛情度:432 「相方かな？」

満腹度:87% 「満腹」

備考:

ボケスキルが上がってきたのか、俺のツッコミススキルが上がってしまったのか、ツッコミを我慢できなくなった。
着実に洗脳されている気がする……。

1:ドロップ

モンスターを倒す事によってアイテムを入手出来る事。

または、入手できるアイテム自体を指す。

単純に【落とす】とも言つ。

第8話

無理に反撃せず防御に徹して、攻撃を捌く事に専念する。

そして、アルの《悲鳴》が効いて【オーク】が倒れてしまう前に、

「クレセントッ！」

強引に技を始動する。

更に、倒れた所を左の剣で突き刺すと、

『ガアアアアア！』

断末魔の声を上げ最後のオークが消えていく。

「ふう、やっと死んだか」

「お疲れ様です。シユウ」

「ああ。それにしても、無駄にHP高いんだよな、こいつら」

最近、戦闘時の役割が固定されてきた。

まず、攻撃力の低いアルは、Mobが1匹なら隙を作る役を、複数いる時には、敵が一気に襲って来ない様に足止めを担当している。

俺はというと、前者なら堅実に防戦に徹して隙を突いて倒し、後者なら多少強引にでも倒す速度を優先する。

相変わらず、紙一重で攻撃を避けたり、的確に攻撃を当てるなんて事は出来ないが、少し身体を動かす事に慣れてきた。それに、レベルの上昇により現実と比べて身体能力が上がっているのである。まだ、ちょっとした差だけど。

『オオオアアア』

すでに、御馴染みとなった臭いは慣れてしまった。慣れたくは無かったが。

「クレセントツ！アルっ！」

「はいっ。えいっ！」

多少梃子摺っていたゾンビも、今では余裕を持って戦えるようになってた。

しかし、豚も死体も食い飽きた。臭いも精神的に来るし。新しい狩場でも探そうかな。

「シユウ！？ お腹壊しますよ？」

「そういう意味の食うじゃねえよ！ てか、なんで考えてる事がわかるんだー！」

「フッ……」

鼻で笑われたし。

「オラアツ!!!」

『オウアオウオオ』

八つ当たりを受けたゾンビが消えるのと共に、キーンと効果音がある。

アルのレベルが上がり、新しいスキルを覚えたいらしい。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

「ふむ？ 【奉仕の果実】ね」

アルの想いか。

日頃の事を考えると、碌な物じゃなさそうだが。

「アル。どんなのわかるか？」

「1時間後を楽しみにお待ち下さい」

「むう………」

しょうがない。狩りをしながら待つか。

豚と死体狩りをしていると、カナタさんから頼んでいた武器が出来たとメールが着いたので、街に戻る事にした。

「アル、街に戻るよ」

「……………」

「ん？」

アルの様子がおかしい。
何かあったのだろうか。

「どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「シユウ」

「なんだ？」

相変わらずの無表情だが、どこかいつもと違い深刻な印象を受ける。
なんだ？ 特殊イベントか？ 進化でもするのか？？

「……………」

「シユウ。義理チョコです」

「まだ7月だ！ それ以前にチョコじゃねえし！！」

アルが差出したのは、

「……桃？」

っぽい、果物だった。

とりあえず受け取り、アイテム情報を見てみる。

【奉仕の果実】

感謝の気持ちがかもった甘美な果実。愛情度により生命力の回復量が変わる。

「これがそうか。てか、アル。だったら普通に渡せよ」

「この方がサプライズ感があると思いました」

既視感デジャヴを覚える。

いや。そうだ！ あの変人だよ。

恐ろしい、ゲーム機を通して汚染する能力があるのか。

前後の出来事は、精神衛生上無かった事にして、お礼を言う。

「まあ、どこか釈然としないが、ありがとな」

「いえ」

視線を逸らし俯くアル。

これが恋愛小説なら、頬を染めて照れているって構図なのだろうが、短い時間だが一緒に過ごした経験から言うと、ツッコミを入れて貰えなかったので、いじけているのだろう。

カナタさんに、前回と同じ取引場所で待っているとメールを送った。若干拗ねていたアルだが、例のドリンクショップで飲み物を買ってあげると、一気に機嫌が良くなった。

まあ、相変わらずの無表情なので違いはわかりにくい。が。ちなみに、今日飲んでいるのは【シルフィードの憧憬】である。

「やあ、待たせたかい？」

「いえ、そんな事無いですよ」

実際、5分も待っていない。

「アルちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

挨拶を終えると、即座に取引に移行する。

「そうそう、なかなか良いのが出来たんだよ。まあ、とりあえず見してくれ」

「へえ、【パリーイングダガー】ですか」

防御用の剣である。

左手に持つ剣は、攻撃よりも攻撃を防ぐ事が多いので、より防御しやすい剣をと注文したのだ。

「鉄製だから頑丈だし、鍔が大きめで攻撃を受け止めやすい。切れ

味も現状のドロップ品よりかはマシな筈だよ」

「凄いいじゃないですか!」

「あゝ。んー」

ん?

「どうしたんですか?」

「いや。その、使った材料と手間を考えると、ちょっと。かなり予算オーバーしちゃってね」

そういうことか。まあ、序盤にしては中々の良品だ。それ程無茶な値段でなければ、是非とも買いたいが。

「で、いくらなんですか?」

「65万ユリルなんだよ」

「げっ!?!」

650Kか。そりゃ確かに言い辛いわな。

確かに良い物だけど、序盤にしてはとという言葉が付く。払えない額じゃないけど、剣1本に650Kか。

「うゝん……」

「やめておくかい? やめるんだったら、他のお得意さんにも聞いてみるつもりなんだけど。ああ。もちろん、シユウ君用の新しい剣

も造るよ」

左手の方は、これを買えばしばらく買う必要もなくなりそうだし、いいかな？

見た目も気に入っちゃったし。

「買いますよ。僕用に造ってくれたんでしょ？」

「ああ、凄腕の剣士が使うと思ったら、気合が入りすぎてしまっ
ね」

んん？　なんか、幻聴が聞こえたような。
ゲームの中でも幻聴ってあるのかな？

「凄腕の剣士って、なんですか？」

「シユウ君の事だよ。掲示板見てないのかい？」

ここで言う掲示板とは某大規模掲示板の事だろう。

「あそこはガセの情報も多いし、全部見るのに時間がかかるので、
最近は攻略サイトと公式しかチェックしてないです」

「そうか。じゃあ、話しておいた方がいいかな。実は、あの腕輪が
原因なんだよ」

「どづい事ですか？」

要約するところだ。

公式の取引掲示板の俺の記事、あれについて掲示板で色々議論されていたらしい。

異常な強さの金ぴか君は今だ誰にも倒されてなく、俺の記事は釣りじゃないかというのが、大半の意見だった。

だが、カナタさんが取引をした事を話したお得意さんの1人が、その事を書き込んでしまったのだ。

勿論、キャラ名は晒さなくてくれたが、それ以外の初日に手に入れた事とソロだという事は、はっきりと書かれてしまった。

初日に倒したという事で、そのプレイヤーが低レベルなのは間違い無く、更にソロだという事で余計に火がついてしまったらしい。

リアルで古武術の達人だの、チーターだの、実は運営の人間だの、様々な憶測が流れたが、最終的に凄腕の剣士という事に落ち着いたらしい。

まあ、よくわからない展開だが。

そのお得意さんの書き込みを含めて、釣りだという意見もないわけじゃないらしいけどね。

「参ったな。僕って、初戦でゴブリンにやられ掛けたようなプレイヤーですよ?」

「だが、ソロでゴブリンロードを倒したんだろ?」

いや。まあ、そうなんだが。

カナタさんが考えてるみたいに、まともに戦ってないんだよね。

「ええ。でも、アルもいましたよ」

「アルちゃんは、どう見ても戦闘系じゃないだろ？　ん〜、癒し系かな？」

癒し系は関係無いだろ！とツッコむ気力も無い。

「どちらかという支援系です」

「だろ？　だったら、ソロとあんまり変わらないんじゃないか？」

はあ。恥ずかしいが、全部話した方が誤解も解けるだろ。

「って、訳で、凄腕の剣士なんかじゃないんですよ」

「……………」

呆れているのか、ぼーっとして反応がない。

「カナタさん？」

「あ、ああ。しかし、信じられない話だな、それは」

「まあ、自分でも恥ずかしい戦い方ですが」

穴があつたら入りたい気分である。
実際穴があつても入りはしないが。

「そうじゃなくてね。発想というか思いつきというか」

「へ？」

「障害物を使って一方的に攻撃をするとか、壁役を立てて背後から攻撃するとか、そう言うのは聞いた事あるけど、転ばせるっていうのはね。まず、思い付かないものなんだよ」

「????？」

「どういう事だろ？」

「ゲームの世界が、いくら現実に近くなつたつて言っても、日常の全ての行動を再現している訳じゃないからね。思い込みつて言うのかな？ 転ぶなんてRPGに必要な行動じゃないだろ？ だから、そういうのはシステムの省いてると思う以前に、思いつきもしないよ」

「そ、そういうものですか？」

クソツ！ いつのまにか、俺も親父に汚染されていたのか。
凄まじい感染力だ。

「ん〜、これは黙っておいた方がいいね。それにシユウ君も、もう使わないほうがいいよ」

「えっ？」

「だって、つまらないだろ？ ボスを転ばして倒しました。なんてゲーム」

「確かに」

どうせ、ゴブリン狩りでしか使ってた技？だし、楽過ぎて物足りなかったもんな。
技も覚えだし、それほど困るわけじゃない。

「んじゃあ、使わない事にします。実際、あんまり面白く無かったですしね、あの戦い方」

「掲示板の方も、もう少ししたら落ち着くだろうから、放っとけばいいよ」

「わかりました。忠告してくれて、ありがとうございます」

前回と同じく話に加わらなかったアルだが。

今回は、狸寝入りではなく本当に熟睡してしまったようだ。

真面目な話には出番がないと感じ取ったのだろう。

まあ、ツッコミをいれて貰えないという、理由が大きく占めるとは思っが。

アルルーナ成長日誌

LV15 HP:529 SP:103

STR:96 VIT:118 INT:130 DEX:44

AGI:48

攻撃力:60 魔法攻撃力:77 防御力:96 魔法防御力:9
3 敏捷度:41

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度:484 「相方かな？」

満腹度:120% 「かなり満腹」

備考:

やたらと手の込んだボケをするようになった。
しかも、不味い事に親父の影響を受けている節がある。

1：パッシブスキル

取得しているだけで効果が現れるスキル。

2：K

キ口の略。

1Kは1000。

10Kは1万。

655Kだと65万5000。

第9話

「そういえば、取引を忘れてたね」

「あつ、取引の為に待ち合わせしたんでしたね。忘れてました」

「シュウ」

今回は本当に寝ていたアルが、やっと起きた様だ。
てか、アルってカナタさんとは挨拶しかした事ないんじゃないじゃ。

「おはよう、アルちゃん」

「おやすみなさい、カナタ」

「いや、違うだろ!」

相変わらず、AIとは思えない言動をする奴だ。

「で、どうしたんだ?」

「義理チョコです」

「テンドンかよ!」

「へぶちっ」

若干強めにツッコむ。

本来、俺にはツッコミ属性なんてないのに。

「もう1時間経つのか、速いな。あっ、カナタさんも1つどうぞです？」

「あ、ああ。よくわからないが貰うよ」

俺達のやり取りに唾然としていたようだ。

まあ、こんなステキAIは俺も見た事ないので気持ちはわかる。

「この果物、アルのスキルで出来たやつなんですよ」

「そんなスキルまであるのかい？　すごいなあ。じゃあ、ありがとう貰うよ、アルちゃん」

「どうぞ」

1つは収納し、俺も食べることにする。
しかし、

「クッ……」

先に食べたカナタさんの様子がおかしい。

まさか！？

一瞬、サラマンダーの怒りの悪夢が鮮明に脳裏を過る。

「どうしたんです？　大丈夫ですか？」

「っ……」

「っ……」

「美味しい！ めっちゃめっちゃ美味しい！！ 甘くて舌が蕩けそうだし」

「ナニ？ このハイテンションなナマモノ。」

しかし、そんなに美味しいのかと、気になり食べてみる。
と、

「……………!?!」

このまったりとして、蕩けるような……………以下略。

正直、今まで食べたどんな果物よりも美味しい。

「フツ……………」

隣りに座っているアルが勝ち誇ったかの様に鼻で笑うが、それに腹が立たないくらい美味しい。

「これは、すごいですね」

「ああ。実際の果物の味を再現したのか、パラメーターをいじって作り出した味なのかはわからないが、今まで食べた事ないよ。こんなに美味しい果物」

嬉しいスキルだ。

こんなに美味しい物が、1時間毎に3個も手に入るなんて。

「そういえば、さつきスキルで出来たって言ったけど、どういうスキルなんだい？」

「ん〜と、簡単に言うと1時間毎に3個、この奉仕の果実っていう

のが自動で出来るスキルです」

「えっ？ たった1時間で3個も出来るのかい？」

「そうです」

「……」

なんか考え込んでしまった。

「シユウ君」

「なんですか？」

「これ、売るつもりないかい？」

「はい？」

あの後、カナタさんの怒涛の”口撃”に遭った。

絶対に儲かるだの、女性プレイヤーや料理人はいくらでも出す筈だの、最後には独占は犯罪だとまで言い出す始末。

いや、別に独占なんてしませんから。

流石に、こればかりではいくら美味しくても飽きるだろうし。

なんとか落ち着いてもらい、さつさと取引を済ませた。

その時、奉仕の果実を1個おまけとしてつけたら、ものすごく喜んで10K値引きしてくれた。

アルのお陰なのだが、素直に感謝する気持ち起きないのは何故だろっ？
別れる際に、ぶつぶつ独り言を零していたが、大丈夫だろうか。
価格操作だの果物長者だの不穏な言葉が聞こえたが、聞かなかつた事にした。

「あと3個か。でも、また1時間経てば増えるし」

むう。悩み所である。

狩りでの収入はドロップ運に左右されるので、安定した収入源は喉から手が出るほど欲しい。

「シユウ？」

「あ、いや、さっき、カナタさんが言ってただろ？ 売ったらどうかって」

「????？」

聞いてなかったのかよ！

隣りでコクコクと頷いていたのは何だったんだ!？

「奉仕の果実を売ろうか、迷ってるんだ」

「……ッ!??？」

ん？ なんだ？

殺人現場を目撃した人くらい驚愕した表情をしてるけど。

そういえば、”感謝の気持ちがかもった”ってアイテム情報にあっ
たっけ。

ひよっとして、売られたりするの嫌なのかな？

だったら、アルに悪いし止めておこう。

「アル、ごめんな」

「金の卵を産む鳥」

「は？ 何を言ってる」

「金の卵を産む鳥として、私は一生幽閉されるんだわ。そして、卵
を産めなくなったら、この身体を」

「どこの悲劇のヒロインだよ！ ってか、俺はロリコンじゃない！
」

果実の他に何か売れそうな物がないか、アイテムの整理も兼ねてホ
ームポイントに戻ってきた。

決して、悪い意味で周りの注目を集め、居た堪れなくなり戻ってき
たわけではない。

「【目玉】に【腐肉】、【オークの耳】に【オークの心臓】って、
こんなのばっかりか！」

死体と豚しか狩ってなかったから、碌な物がない。
まあ、見た目はあれだが、アイテム情報によると薬の調合と料理に
使えるらしい。
だから、売れないって事はないだろう。

「ん？ 料理って」

「シュウ？」

「い、いや。なんでもない。気にしないでくれ」

「顔が真つ青ですが？」

まさか、NPCの店の料理の中にも入ってたのか！？
食べた事ない肉だな、とは思ったが、まさかな？
きつと、使い魔用の餌に使うんだ。そうに違いない。

「そうだよな？ そうだと言ってくれ、アル！」

「そうですよ」

と、アルが肯定してくれた。
考えていた内容などわかる訳ないので、適当に返事したのだろう。
それでも、第三者の口から聞いただけでも多少違う。

「よかったあ。多少は気がまぎれる」「この前、シュウが食べていた
スープの中に入れてましたよ」「よ？」

アル、そこを肯定して欲しくなかったよ。

何故考えが読めるのか、という疑問よりも先に、食べたスープを思い出してしまい意識を失った。

なんとか復帰するには、2時間を要した。

そして、最初に目に入ったのは、こちらに6個の果実を笑顔で差出すアルの姿だった。

受け取った俺の顔は、ちゃんと笑えていただろうか。
目から汗が流れ落ちる。

アルルーナ成長日誌

LV15 HP:529 SP:103

STR:96 VIT:118 INT:130 DEX:44

AGI:48

攻撃力:60 魔法攻撃力:77 防御力:96 魔法防御力:9

3 敏捷度:41

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度：488 「玩具かも？」
満腹度：90% 「満腹」

備考：

俺の思考を読むようになった。

親父の次は、か、いや、姉さんの影響か？

変人度が2ランクアップした感じだ。

こちら辺で食い止めないと不味い気がする……手遅れっばいが。

第10話

結局、ある程度の数が貯まってから売る事にした。

食事と風呂、夏休みの課題の処理時間以外、全ての時間をゲームに充てて2日かかったが、やっと100個用意できた。

まあ、INしてさえいれば貯まるので、特別何かをした訳ではない。そして、現在、苦手な露天中である。

「シユウ」

「なんだ？」

「暇です」

「そうだな」

ちなみに、露天を開いてから1時間ほど経つが、まだ1つも売れていない。

どうしてだろう？　こんなに美味しい物が、たった10Kなのに何故？

だが、すぐにその謎は全て解けた。

何故なら犯人は、

「なんか桃みたいなの果物ねえ。えっ！？　1万ユリルって、ぼったくりじゃないの？　これ」

この中にいる！！　じゃなくて、値段設定。

そもそも、余計な物に対して節約するであろう序盤に、食材に大金を使うプレイヤーがいるわけない。

それに、よく考えたら、これの味を知ってるのは俺とカナタさんだけだった。

ただの果物に10K払うプレイヤーなんて、もちろん、

「いるわけないだろうが!!」

「な、なによ。急に」

何時の間にか客が来ていた様だ。

「なっ!?!」

切れ長の瞳に薄めの唇。鼻筋の通った細面。

抜けるように白い肌と艶やかな長い黒髪が、互いを引き立たせあっている。

まさにゴツデイス……。

リアルでもこんな美人見た事無い。

ちよっと年上か、大学生かな? それともOL?

「?」

ま、マズイ。

このままでは、女神に変態だと思われてしまう。

「ああ、すいません。ちよっとWISを誤爆しちゃって」

「そうなの? そうは見えなかったけど?」

「いえ! 間違いなく、ただの誤爆です!」

変態になるかどうかの瀬戸際なのだ。
ここは多少強引にでも、

「そ、そうだ。驚かせてしまった御詫びに、これ1個食べてみてください」

「いいの？ 売り物でしょ？ まあ、その値段じゃ売れるとは思えないけど」

よし、なんとか誤魔化せたか。
さっさと果物に意識を向けさせるべきだな。

「とりあえず、食べてみてくださいよ。値段の訳もわかりますから」

「そこまで言うなら。じゃあ、貰うわね」

今、目の前で、女神が、自身の薄めの唇に手に取った果実を近づけていく。

そして、そつと唇を開き、

「シユウ、視線がいやらしいです」

「ブフオツ！！！」

「へ？ どうかしたの？」

どうやらアルの声は聞こえなかった様だ。
しかし、危なかった。

もう少しで、本物の変態確定だった。

「い、いえ、なんでもありません。どうぞ、気にせず食べてください」
「シユウがいやら」アル、今度【メイヴの赤い蜂蜜酒】を買って上げよう」シユウは良い人です」

クツ！ 痛い出費だ。

例のドリンクシヨップで、一番高い飲み物である。

何度かアルの注文を必死になって阻止した程、桁違いの値段だった。ちなみに、気になる価格は御求め易くない500Kである。

「???? よくわからないけど、そうみたいね。じゃ、今度こそ頂くわね」

同じ攻撃は2度と食らわない……じゃなく。

同じ失敗をしない様に女性から視線を外すと、彼女の足元に黒猫がいるのに気付いた。

野良猫まで配置してるとは、結構変な所に凝ってるんだな。

「お、美味しい!? こんな美味しい果物食べた事ないわ。どこで手に入れたの? ドロップ品?」

クククツ……、カモが食い付いて来た。

つて、キャラが違うし。

「すみません。入手方法はちょっと。言えるのは、ドロップ品じゃないって事だけです」

「そっかあ。ああ、いいのよ。駄目元で聞いてみただけだから」

「【マシロ】。これって、その樹人が実らせた果物だよ」

「へえ、マシロさんて言っんですかあ。って、えっ？」

さっきのは誰の声だ？

よし、冷静になって、この場にいる人物を挙げていこう。

俺、アル、マシロさん、黒猫。

いや、猫は喋れないだろ。

5mくらい離れた所に露天を開いている人がいるが、流石にあの人じゃないだろうし。

うむ。

「シユウ。その猫です」

「はあ？ いや、だって、ただの猫だぞ？」

「もう【シート】。あなたが嫌がったんでしょ？ 他の人に正体を知られるの」

「……………」

「ごめん、マシロ。うっかり口出ししちゃったんだよ」

「ね、猫が喋ってる？」

いや、まあ、ゲームの中だから、猫でも犬でも無機物でも喋らせる事は出来るだろうが、リアルな猫が普通に喋っている姿を目の当りにすると、ゾンビなどを見た時よりも衝撃的だった。

しかし、マシロさんとは知り合いの様だが、使い魔だろうか？

戦闘に役立ちそうにないけど、見た目はアルよりずっと使い魔らしい。

「えっと、その猫ってマシロさんの使い魔なんですか？」

「ええ。でも、この子は正体を知られるのを嫌がって、街の中では普通の猫の振りをしてるの。ただ、さっきの事でわかる通り、結構おっちょこちょいなよ。可愛いでしょ？」

「マ、マシロ」

ね、猫の癖に可愛いって言われて照れてやがる。
羨ましくない、羨ましくないぞ。

ただ、目から心の汗が流れてるだけだ。

「え、ええ、そうですね」

「可愛くないです」

おいおい、アル君。

何故に君はそんなに喧嘩腰なんだ？

「で、でも、アルと違って普通の猫にしか見えないんですが？」

「ああ、この姿は変装みたいなもので、本当の姿は違つよ。シー
ト、見せてあげて」

「しょうがないなあ。ありがたく思えよ、凡人」

「……ッ！……！」

このクソ猫、言うに事欠いて凡人だと。

その通りだよ、悪いか！
などと、思っている間に、変身が終わった様だ。

「……………」

「ね？　ね？　可愛いでしょ？」

「驚いて言葉も出ないか、凡人」

体長50cm程の二本足で立っている黒猫。

瞳は緑色で胸に白い斑がある。

赤いマントを羽織っている。

つて、少し大きくなってマントを着けて立っただけじゃん。

「もう、シート。ちゃんと名前呼びなさい……ねえ？　さっき、その女の子。あなたの事シュウって呼んでなかった？」

「え、ええ、僕の名前はシュウで、こっちが相棒のアルって言います」

「アルルーナです。マシロと化け猫」

「妖精猫だ！！」

使い魔同士、相性が悪い様である。

一方、マシロさんは、俺の事を熱っぽい視線で……いや、嘘です。だけど、驚愕の視線で見つめていた。

「あなたが、あの”凄腕の剣士”なの！？　うわあ、こんな可愛い男の子だったんだ。もっと、熊みたいな人かと思ってたわ」

「な、なんですと!?!」

か、可愛いと言われてしまった。などと喜んでいる場合ではない。それに、また中学生だと間違われてるなって、落ち込んでる場合でもない。

どうして、”アレ”が俺だとばれたんだ?

名前は晒されてなかったのに?

「あ、あの。なんで名前を聞いただけで、その剣士が僕だって?」

「だって、取引掲示板にキャラ名出してたでしょ? このゲーム晒しは厳禁だから、あそこの掲示板には名前書かれなかったけど、掲示板を見た人はみんな、『剣士』シユウ』って思ってる筈よ」

「……………」

そうだった。

よく考えたら、それらしいというか、モロに金ぴか君関係の取引なんて俺のしかない。

それに、俺が取引終了にしたのと同じ書き込みがあった時間を考えると100%シユウって名前の奴が剣士って誰でもわかるじゃないか!

「シユウ」

「ん? どうした、アル」

慰めてくれるのか?

普段、俺に精神的疲労を与えまくってるけど、本当はいい娘なんだなあ。

よし、今度良い物を買ってあげ

「ドジツ子属性獲得です」

「欲しくねえよ!!」

クツ！ こいつに癒しを求めるのは、元々無理があったか。
所詮、この世は焼肉定食……美味しい物は食い、不味ければ……

「シュウ……君でいいかな？ やっぱり、シュウ君が剣士なのね？」

「この凡人がねえ」

「い、いえ、僕みたいなのが……そ、そんなわけないじゃないですか？ あはははは」

「そうです。シュウは、あの品のないゴブリンを倒しただけで、凄腕ではないです」

「」「」……「」「」

ありがとう、アル。
見事な自爆っぷりだ。

結局、カナタさんにした説明をもう一度する事になった。
マシロさんには知られなくなかったが、あとからヘッポコとだとは

れると余計に印象最悪なので、しょうがなかった。

金ぴか君を転ばせたくだりでは、マシロさんに思いつきり爆笑されてしまった。

クソ猫……じゃなく、シートには逆に感心されてしまった。

どうせなら逆の反応が良かったと思ったのは、ここだけの秘密だ。

そして、テイマー同士、今度一緒に狩りに行こうとフレンド登録して、マシロさん+1は去っていった。

「シュウ」

「ん？ なんだ？」

「鼻の下が伸びてます」

「ソ、ソナナコトナイデスヨ」

「……………」

アルの視線が冷たかった。

LV16 HP:557 SP:109

STR:103 VIT:126 INT:137 DEX:47
AGI:52

攻撃力:63 魔法攻撃力:81 防御力:101 魔法防御力:
98 敏捷度:43

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度:502 「玩具かも？」
満腹度:86% 「満腹」

備考:

妙な属性を付けられてしまった。
アルはアルで微妙に天然度が増しているし。
どうすりゃいいのか、全くわからない。

1:WIS

WIS、ささやき、耳打ち等、ゲームによって呼び方が変わるが、他人には聞こえない1対1の会話の事。

第11話

マシロさんが帰った後、これ以上は無駄だと判断し、露天を終了した。

そして、メールで呼び出したカナタさんに、50個は知り合いに宣伝する際の試食用に、残り10個はその宣伝の報酬にして欲しいと依頼した。

カナタさんの知り合いなら、恐らくテスターなので情報や慣れから、後々形成されるトップ集団になるだろう。

そういう人達なら、上級狩場のドロップ品の取引などで莫大なユリルを得るだろう。

平均的なプレイヤーを狙うよりは、その方が早い時期に高額で果実を売る事が出来て稼げるはずだ。

と、アルに言われて、「ナ、ナルホド」と思わず納得してしまった。主従関係が著しく間違っている気がする。

現在、街から北西に歩いて2時間ほどの場所にある【亜人の巣窟】に潜入している。

今回の任務　じゃなくてクエストは、亜人に盗まれた【商人の鞆】を手に入れるのが目的だ。

既に攻略されているクエストだが、情報によるとPT推奨のクエストで難易度はなかなか高めのようなようだ。

まあ、俺もアルと2人PTコンビと言えなくもないので、腕試しも兼ね挑戦してみる事にしたのだ。

ちなみに、何故街のすぐ傍にそんな場所があるんだとか、何万個商

人が鞆を盗まれたんだとか考えてはいけない。

「お前の顔は見飽きたっつうの!!」

『ガアアアアアアア』

もはや、オークなどレベルと装備で強化された俺にとって、何の障害にもならない。

哀しいかな、プレイヤースキル戦闘の手際は大きく向上してない。

直ちに、他の敵を足止めしているアルの元に向かう。

「アル、お待たせ」

「遅いです、シュウ。ナンパされて困ってます」

フツ、いつまでも、俺が同じ位置で足踏みしていると思うなよ。

男子三日会わざれば刮目して見よ、という格言の意味を教えてやる
う。

「モテモテで良かったじゃないか。其方の素敵な殿方達にエスコートしてもらえば?」

と、背を向ける。

「……………ッ!」

勝った。ナニにかはわからないが。
ツッコミ属性など返上してやる。

そもそも、家の外では物静かで人見知りするような人間だったんだ。
このくらいの反撃は許容範囲だろう。

『ギエエエエエエ』

『グエエエエエエ』

『ゴオオオオウウ』

ん？ なんだ？ 新手か？

流石に、放っておくのは可哀想だと思い、手伝おうかと目を向けると、

「なっ!?!」

消えていく3体のオークの姿が、そして、

「シユウ、覚悟はいいですか？」

「……………」

どうやら、虎の尾を踏んでしまったようだ。
意外と導火線が短かったらしい。

「アル」

「命乞いですか？」

見苦しいとばかりに冷たい視線が向けられる。
俺は、何を言っても無駄だと諦め、無言で目を瞑る。

「いい覚悟です。一撃で葬ってあげましょう。眠りなさいっ！
《クラウンオブソーン》！！」

アルの声を人事の様に聞きながら意識を失った。

「はっ！！？」

「シュウ、どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもないよ」

どういう事だ？

俺の覚えている最後の記憶は、アルの逆鱗に触れ殺されたのだが、あれで死んだのならホームポイントに戻る筈だ。だが、ここはどう見ても亜人の巣窟の中である。

「ターゲットを発見しました。シュウ。シュウ？」

「あ、ああ、すまない。【オーガ】がいたのか？」

何時の間にか、最奥まで着ていたみたいだ。
全く記憶にないが、得したと思っておこう。

ちなみに、オーガはクエストを達成するのに必要なアイテム、商人

の鞆を落とすMobだ。

巫人の巣窟の最奥で同時には1匹だけしか沸かない、簡単に言えばボスみたいなクエスト用のMobである。

「はい。でも」

「ん？ ああ、先客か」

「ええ。そうです」

クエストを受けた別のPTがオーガと戦闘中である。

そういえば、他人の戦闘なんて気にしてなかったの、じっくり見た事が無かった。

参考になるような事がないかと、見てみるが、

「地味だな」

「面白みが無いです」

実に平凡なPTの戦い方である。

4人PTでPT構成は、片手槍盾持ち1人、両手斧1人、両手槍1人、片手剣盾持ち1人である。

以下、名前がわからないので武器で呼ぶ。

片手剣がタゲ取りをして、両手斧と両手槍の2人が背後から攻撃、タゲがそちらに移ったら片手剣が攻撃してタゲを取り、の繰り返し。片手槍は、HPの減った人に赤ポを掛けて回復役を担当している。

堅実で失敗の少ない戦い方だが、余り萌え いや、燃える戦い方ではない。

まあ、アルに転ばせたり、隙を作らせたりしている俺が、人の事をとにかくは言えないが。

このゲームでは、回復魔法という要素がないため、回復手段は赤ポか「ヒールクリスタル」、後はアルの奉仕の果実のような使い魔のスキルだけである。

少なくとも、今のところはであるが。

赤ポは、通常飲む事によつて100%の効果を発揮するが、身体に掛ける事でも飲んだ時の半分であるが効果を得る事が出来る。

戦闘中には呑気に飲む暇はないので、他人に使う場合は掛ける方が多い。

正直、びしょ濡れになり気持ち悪いので好きではないが、万が一の為、アルにも赤ポは持たせてある。

ちなみに、赤ポは4段階に分けて回復し、2秒毎にその赤ポの総回復量の25%ずつ回復する。

ヒールクリスタルの方は、一瞬で最大HPの75%を回復するが、高価であり、ドロップ確率も低い。

c の時は終盤にやっとドロップしていた物なので、正式サービスが開始されてからはまだ出て来てない。

ドロップが確認されたMobの所まで誰も到達してないのだろう。

「シュウ、終わったみたいですよ」

そんな事を考えていると、やっとオーガを倒した様だ。

まだ店売りの初級武器を使っているので、時間が掛かったみたいだ。目的の物が手に入った様で、オーガ部屋からPTが出てくる。入れ違いにアルと入ろうとすると、何故か止められた。

「おいおい、ソロかよ」

「PT用クエストって知らないんじゃないの？」

「情報収集は基本だろうが」

「子供を虐めてやるなよ」

ふむ。思いつきり馬鹿にされている。

勿論、PT”用”クエストではなくPT推奨クエストだと知っているし、オーガについても情報を漁って対策は考えている。

このゲームには、外装の年齢によって強さは変わらないので、育て方が同じなら老若男女で強さに違いは出ない。

正直、見た目社会人っぽいのにマナーも知らないのかと、一瞬力チンときたが、ここは大人になって無視する事にした。

もともと、”俺は”であったが。

「シユウ、いい年した大人がかなりお馬鹿です。どうしましょう？」

「……」

いや、アルさん、どうしましょう？ じゃないでしょ。

完全に挑発してるじゃないの。

2対4じゃ、向こうの装備がこちらより劣っているとはいえ、不利なのは変わらない。

PKされるのもするのも余りいい気分じゃないが、雰囲気的にどう

しようもないだろう。

若干、諦め気味にPTの方を見てみると、予想とは違った様子である。

何故か、4人共、驚愕の視線で俺を見つめている。

どうしたのか？と不思議に思っていると、

「お、おい、シュウって言ったら」

「ああ、掲示板で」

「だよな」

「なんで、こんな所にこんなのがソロでいるんだよ」

マシロさんの時と一緒に、一体どこまで信用されて広まってるんだ。まあ、この場合は、勘違いしてくれて助かったと見るべきか。駄目押しに適当に構えでもとってみる。

「「「「「!!!」「」「」」」」」

おお、反応してる、反応してる。

調子に乗って挑発もしてみる。

「自分達より弱い相手にしか粹がれないのか？」

決まった。かなりかつこよさげ。

アルは何を馬鹿なことをと、呆れた目で見ているが。

男には女子供にはわからないマロン……、もとい、浪漫ロマンがあるんだよ、アル君。

「なっ！！ テメツ」

「おい、止めろって」

「止めるな！ それに、こいつが本物なら倒せばレアアイテムとか手に入るだろ」

「そうだな。チャンスだよな、よく考えれば」

「だな」

「だろ？ デスペナだって、このレベルなら大した事無いし」

あら？ ナニ、この展開。

いや、そこは脇役らしく、尻尾を巻いて逃げて行ってくれないと。ひょっとしてピンチですか？

「ピンチです」

わざわざ思考を読んでまで返答してくれて、ありがとう。
うーむ。

よく考えれば、レベルと装備の差を考えると、アルがいればどうにかなるかもしれない。

LV16 HP:557 SP:109

STR:103 VIT:126 INT:137 DEX:47
AGI:52

攻撃力:63 魔法攻撃力:81 防御力:101 魔法防御力:
98 敏捷度:43

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度:543 「玩具かな？」
満腹度:88% 「満腹」

備考:
微かに残る記憶の片隅に……。
な、なんだ!?
思い出そうとすると、体が勝手に震えだす。

1：タゲ取り

Mobの標的ターゲットになる事。

もしくは、他人が標的になった場合、攻撃やスキル等によって自分に標的を移す役割。

第12話

「行くぞっ!!!」

掛け声と共に4人が一斉に掛かってくる。

戦意を挫く為にも、手早く1人を倒さなければならぬ。
先程の戦いを思い出し、楽そうな相手を選ぶ。

「アル、両手槍以外を足止めしてくれ」

「赤子を手で捻るようなものです」

2文字違っただけなのに、どこか猟奇的で身の毛が立つ台詞だ。

まあ、自信があるのならいいんだけどね。

もちろん、出来るだけ早く片付けて救援に向かうが。

「ここからは通行止めです」

「「「なっ!」」」

巧みに鞭を使い3人を足止めしてくれた。

向こうは見た目からかアルの事をこっちの戦力とは思ってなかったのか、予想外の攻撃に戸惑っている様だ。

そして、根っこの防壁を潜り抜けてきたのは、当初の予定通りの両手槍。

ではなく、両手斧だった。

「オラアッ!!!」

両手斧の斬撃を咄嗟に左手の剣で受け止める。

「っ!?!? ……ん?」

相手が大柄だったのと、武器の見た目からかなりの衝撃を覚悟したのだが、雑誌を丸めた物で叩かれたくらい感じしかなかった。こちらもち驚したが、それ以上に相手も驚いた様だ。

「な、なんでだ?」

まあ、身長が190近くある熊の様な大男の斧による攻撃を、小柄な子供が片手で微動だにせず受け止めるなんて、リアルでは有り得ないから当然だ。

漫画やアニメ、ゲームでしか見られない光景だが、よくよく考えたらそのゲームの中である。

いやいや、こんな事考えてる場合じゃないし。

左の剣で斧を受け止めたまま、右の剣を使い《クレセント》を始動させる。

「クレセントッ!」

「な、あッ」

「ステイングッ!」

そして、攻撃を受けた際に発生する硬直時間が解けない内に、空かさず左の剣で覚えただけの技を。

システムによるアシストを受けつつ、脇役Aの左胸目掛けて鋭い突きを放つ。

「えっ、あつ、な、にが？」

予想よりHPと防御力が低かった様で、一気にHPバーが0に近づき、勢いが止まる事無く消滅する。

パリンという、ガラスが割れたような音がすると脇役Aの外装が消えていき、バレーボールくらいの光る玉が現れた。

この光る玉は、プレイヤーが死亡した時に現れる。

何もしなければ3分間その場に残り、時間経過と共に消える。

玉が消えるとプレイヤーはホームポイントでデスペナを受け蘇生される。

操作により3分待たなくてもホームポイントに戻り蘇生は出来るが、1分間だけは何も出来ない状態で待たなければならない。

その1分間は、倒したプレイヤーにルート権が発生し、死亡したプレイヤーの所持するアイテムからランダムで2〜5個選ばれ、玉に触る事により手に入れることが出来る。

また、PKではなくMobや罠などで死亡した場合は、ルート権が発生しない。

玉が消える前に蘇生アイテムを使用すると、デスペナを受ける事無くその場で蘇生する事が出来る。

《ステイング》

対象の身体を貫き動きを止める。

スキル熟練度に応じて硬直時間が増加。

素早く光る玉に手を触れアイテムを回収し、アルの元に向かう。
脇役3人は、こちらを見ていた様で呆けた顔をしてポーッと佇んでいる。

「そっちの盾持ちを1人任せる」

「ジャ」

1人目はうまく倒せたが、あれは偶々隙が出来たからなので混乱状態から立ち直る前に、後2人は倒しておきたい。

一番近くにいた片手槍に狙いを決め、全力で走る。

そして、その勢いのまま右の剣で盾を弾き、左の剣で胴を薙ぐ。

「ぐ……あつ!? このつ、ガキがつ!!」

攻撃したショックで立ち直ってしまったが、武器が槍なので利点の筈のリーチが邪魔になり取り回しが悪いらしい。

脇役Bが距離を取ろうとするのを逃さず、《スティング》で動きを止め、《クレセント》で斬り裂く。

「クソッ！ 覚えて」

「ふう」

よし、次っ！

と、玉を叩き割る様に殴り、脇役Cに向かおうと視線を向けるが、

「なあ、アル？」

「なんですか？ 脇役Dなら倒しましたよ」

「なんで俺が勝手に割り振った脇役A〜Dを把握してるんだよ！？
いや、今更か。で、脇役Cは？」

「脇役Dと戦っている間に、尻尾を巻いて逃げていきました」

「そうですか」

多少拍子抜けしたが、まあいい。

相手の鈍さと、レベル、装備等、ステータスの数値に助けられたような勝利だったが、勝ちも勝ちだ。

アルが倒した脇役Dのアイテムを回収し、一息つく。

「シユウ。イメチェンですか？ はっきり言って似合ってますよ」

「ん？」

何の事かと思っただが、ふと公式HPで見た情報が思い浮かび、嫌な予感がしながら聞いてみる。

「アル。俺の目どうなってる？」

「大量殺人犯の様な目になってます」

そうだね。そうだったよ。

PKをすると白目の部分が赤くなり黒目の部分が白くなるという、
迷惑な演出があるんだった。

「はあく、こっちは被害者なんだけどな」

まあ、よく考えたら向こうから喧嘩を売ってきたが、こっちは攻撃を受けてないので、PK判定を受けてもしょうがない。

2人殺したから4時間はこのままだ。

当初の予定通り、クエストをしてから街まで歩けば到着する前に元に戻るだろう。

そんなに、気にする必要もないかな。

「多少アクシデントはあったけどオーガを倒そうか」

「oui^{ウイ}」

いや、別に返事の多様さは求めてないから。

ちなみに、脇役A〜Cから手に入れたアイテムは、NPC店で売られている最低ランクの初期装備や赤ポ、オークの耳等のドロップ品とゴミばかりだった。

「シユウ、脇役相手に期待するだけ無駄です」

「……………」

はじめから、それほど期待なんてしてなかったが、これほどとはね。今度からは相手にせず逃げよ。疲れるだけだ。

その後、特にトラブルも無くオーガはさっくり倒し街に戻った。余りにもあっさり終わってしまった為、PK犯状態が解除される前に街の中を歩いてしまい、まるで危険人物かのように遠巻きから、ヒソヒソと囁きあっている。

この目から流れてくる液体は涙じゃない。心の汗だ。そうに違いない。

まあ、知り合いと遭遇する前に解除出来たのでよかったとしよう。知り合いと言っても2人しかいないが……。

この目から流れてくる液体は涙じゃない。心の汗だ。そうに違いない。

「シユウ、つまらない上にテンドンです」

幼女に容赦無く突っ込まれる……。

この目か

「お仕置きです」

街の中で幼女に鞭で打たれる……。

この

LV18 HP:613 SP:121

STR:116 VIT:143 INT:153 DEX:53

AGI:57

攻撃力:70 魔法攻撃力:89 防御力:113 魔法防御力:

109 敏捷度:47

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度:615 「遊び道具」

満腹度:63% 「小腹がすいた」

備考:

ツッコミススキルと言うより、お仕置きスキルを覚えてしまった……。マシロさんの前では絶対発動して欲しくないものだ……。

【幻夢】では、レベルが上がると最大HP最大SPが上昇し、ステ

ータスポイントが手に入る。

ステータスポイントは、STRとAGIに自由に振り分ける事が出来る。

STRに振ると、攻撃力が上がり重い物を持つ事が出来る。 装備品の装備条件になっている場合がある。 ようになる。

AGIに振ると、身体の動きが素早くなり、高AGIになると現実では有り得ない速さで走る事も可能になる。

俺の【幻夢】内での身体であるシュウの育成は、今の所STRにほぼ全振りしている。

力の強いMobの攻撃を隙を作らず受け止める為と、少ない攻撃でMobを倒す為だ。

また、急に身体の動きが変わると、素早くなるメリットよりも、慣れない速度に対応出来なくなるといふデメリットの方が大きいといふのも、AGIに余り振らない理由になっている。

もつとも、戦闘に慣れて来たら徐々にAGIを多く振っていくつもりであるが、あくまで予定である。

1:STR

Strengthの略。

2:AGI

Agilityの略。

3:ルート権

他のプレイヤーが拾得出来ないようにゲームシステムが一定時間保護して、Mobやプレイヤーを倒したプレイヤーが優先的にアイテ

ムを拾得できる権利。
実際はゲームによって違いますが、作中ではこんな感じの意味で使
ってます。

4：デスペナ

【幻夢】のデスペナは、『Lvに応じた経験値のロスト』と『装備
品を一定確率でロストする』です。

第13話

姉さん、事件^{ヒンチ}です。

まあ、姉さんなんかいない 強制的にそう呼ばせる母親はいる
んだけどね。

「ずいぶん余裕があるんですね」

「いや、ちよつと現実逃避したかっただけだ。気にするな」

「フンツ……愚民の分際で身の程をわきまえないから、こつこついう事になるんですよ」

うむ、日増しにツッコミが強くなってるダ。
てか、俺ってそこまで言われるような事をしたか？
— 先ず、

「アル。戦略的撤退っ！！」

「S I^{シー}」

まだストックが有ったのかよ。

本日のメインディッシュは【スライム】だった。
オーソドックスなRPGでは、よく最弱のモンスターとして登場す

る不定形でゼリーの様な生物だ。

その弱さに相応しいゴミの様な経験値とアイテムしか手に入らない、まさにキングオブ雑魚キャラ。

しかし、【幻夢】のスライムは、攻略サイトの情報を見た感じ、同レベル帯のMobと比べると経験値やドロップが美味しいようである。

ただ、スライムをメインに狩りをしていると言う話を聞かないので、そこそこの強さか厄介さは有るのだろう。

今の所、確認されている生息地は、南東の鉱山にある洞窟だけみたいだ。

まあ、情報自体が余りないのが不安要素ではあるが、アルと2人ならそれ程苦戦するとは思えない。

「それにしても」

「シユウ？」

「ああ。いや、そんなに強くないのが引つ掛るんだ。こんなに楽なら、人気の狩り場になると思うんだけど、どうしてかなって」

バスケットボールくらいの大きさで少し攻撃し辛いとは思いますが、攻撃力やHPがそれ程高くない。

不意打ち気味に体当たりを食らったが被ダメは大してなく、踏み付けて3回突き刺してみたら呆気なく死んでしまった。

考え過ぎかな？

「この程度なら多少囲まれても大丈夫だろ？ もう少し奥に行くぞ」

「^{ダー}」

「まだ、それ続けるのか？ 正直、何語かすら解らなくなってきたから、そろそろ止めないか？」

「^{ニヒート}」

「……」

日本限定販売なんだから、日本語だけで十分だろうに。
やたらと無駄が多いゲームだ。

10分程、ちょこちょこ沸いてくるスライムを倒しながら進んでいると、かなり開けた場所に出た。

「もう行き止まりか、宝箱もなんにもないなあ」

「ですね」

「沸きが悪いから人気がないのかな？ PTは論外だろうし、ソロでも豚か犬でも乱獲した方が効率良さそうだ」

不味い狩り場とは言わないが、刺激が無さ過ぎて眠くなりそうだ。
今からでもいつもの所に行くかな。ん？

「アル。何見てるんだ？」

「山です」

「は？ 山？ 洞窟の中だぞ。そんな物どこにあ」

うん。山田 じゃなく山だ。

先程、かなり開けた場所と言ったが、直径100m位のドーム状の空間だ。

そして、辿り着いた当初はあんなモノは無かった筈である。てか、あつたら、目に入らない方がおかしい。

洞窟の天井に届きそうな勢いで聳え立っているスライムの山。というと、過剰広告の様であるが、そのくらい大きい。

「で、アル。何時の間にあの山は出て来たんだ？」

「そうですねえ。シユウが『沸きが悪いから』と言っ

「って、その時言えよ！！」

「へぶち……。もう！ アナタつたら乱暴なんだから。でも、そんなワイル「……。！！」いえ、なんでもありません、はい」

もうちょい強めでも良かったか？
しかし、

「コレどつすりゃいいんだ？」

「登り」

「登らねえよ!!」

「たく。」

「ボケるだけじゃなく、建設的な意見も出して欲しいものだ。」

「なあ?」

「なんですか?」

「アレってどうすりゃ正解なんだ? もしも、倒すのだとしたら何時間もかかるぞ」

「それ以前に、下手に倒すと崩れて来てぺちゃんこですよ」

「むう」

「そっぴや、そっぴや。」

「絶妙なバランスで積み上がった場合、下手に倒すとこちらに倒れ
てきそっぴや。」

「スライムに潰されて圧死。」

「まあ、厳密には倒れてきた衝撃でダメージを受けて死亡するんだろ
うが。」

「あんまり愉快的な死に方じゃないな」

「大丈夫です。録画の準備は出来てます」

「……………」

何故そんな物がゲームの中にあるんだ？
などと、もはやツッコミを入れる気にもならんよ。
という事で、冒頭に戻ってみる。

とりあえず、洞窟の入り口まで戻ろうと振り返り来た道に戻る事に。

「それにしても、アレは何かのイベントなのか？」

「ええ。アレを倒すと、街の中央にある地下迷宮に入る為に必要なキーアイテムが手に入る事になってます」

なっ、なんですとっ！！

テストの時は、レベル制限だったのが変わったのか。
だから、ここの情報が余り出なかったのかな？

「本当なんだな？　じゃあ、倒そ」

「もちろん、嘘です」

「アル。頼むから、疲れる嘘は止めてくれ」

「鋭意努力中」

本当かねえ。アルルーナの半分は悪ふざけで出来ています、って感じがするんだが。

まあ、アルの特異な性格は今更か。

ん？ 疲れ目かな？？

「アル」

「なんですか？」

「なんか、来た道が塞がれているのだが、俺の勘違いか？」

「いえ、物の見事に岩で塞がれていますよ。つまり、『逃がさんぞ！
ワレエツ！！ ウルアアアツ！！！！』って事だと思われます」

「……………」

うむ、最後のはよくわからなかったが、逃亡不能、途中回避不可な
イベントって事なのだろう。

しょうがない、覚悟を決めて殺れる所まで殺ってみるか。
どう考えても赤ポが持ちそうもないが。

「アル。今の内にジェノサイドモードに、30秒後に特攻するぞっ
！」

「シュウ。そんなモードはありませんか？」

「気にするな、なんとなく言ってみただけだ」

「はあ」

完全に呆れられてしまった感があるが、俺は負けない。
負けても全然構わないのだが。

「んじゃ、行きますか!！」

「スライム
Slime」

Mt・スライムに向かって勢いよく突っ込んでいくが、

「ぬおっ!」

残り5mの距離まで近づいた時、突然山が光りを放った。光りが治まった後に出て来たのは、

「ハツハツハツハ、アル。デカイなあ」

全長10mの巨大スライムであった。合体か、元々なかつた勝率が更に下がった気がする。

「奥義とか必殺わ」

「ありません」

「じゃあ、こんな事もあるっか」

「勝手にマッドサイエンティストにしないで下さい」

うん。手詰まりだ。

あれだけの数のスライムが合体したんだから、レベルなどステータス的にも大幅に上昇した筈だ。与ダメが通るかすら怪しい。

「シュウ、来ますよ!！」

「あ、ああ、ってその巨体で飛ぶなよ!!!！」

一気に押し潰そうというのか、合体スライムは通常のスライムが体当たりの際にする溜めの動作に入った。

「よ、よけ、ぐふおっ!！」

衝撃と急激な視界の変化に対応できず、頭がくらくらする。

グッ、あの巨体でその速さは反則だろうが!!

それに一直線に飛んで来るな! 物理的におかしいだろうが!!!! HPを確認すると今の一撃で5分の2がごっそり減っている。

「ま、まずっ」

3本の赤ポを腰の鞆から取り出し、口から零れるのも気にせず一気に飲み、即座にHPを回復させる。

そして、今頃になって、やっとアルの事を思い出し見てみるとごっ伏せに倒れていた。

「アル、大丈夫か!？」

「……………」

避け切れなかったのかと赤ポを取り出すが、

「どこかのノロマさんと一緒にしないで下さい。どんな強力な攻撃でも、あたらなければどうという事はないのです」

「ん？ あ……な、にが？」

まるで現実であるかの様に、意識が朦朧としている。

あれ？ 何かが乗っかっているみたい。体に重く感じる。つて、

「あ、アルツ！」

俺の体に跨る様にしてアルが乗っかっていた。

ちなみに俺の今の状態は、岩の壁を背に足を伸ばして座り、その上にアルが乗っているというカタチだ。

件のアルはパチリと目を開け、

「シュウ、謝罪を要求します」

「は？ 何を「謝罪を要求します！！」「むう」

よくわからないが、謝らないと話が進みそうもない。

「多大なご迷惑とご心配をかけたことを心よりお詫びします」

「何故か妙に不快感が残る謝罪ですが、海よりも広い心で許してあげましょう。それと、早く回復しましょう」

と、持たせておいた赤ポを飲み始める。

回復？

体当たりで受けたダメージなら、

「って、死にかけじゃん」

自身のHPバーを見ると、残り2ドットくらいしかなかった。いつのまに減ったのかはわからないが、即座に赤ポを取り出し完全回復させる。

「ふい〜、生き返った。……で、何が起こったんだ？」

徐々に戻り出した記憶と、アルの話に合わせてみるに。

ブツンしてしまった俺は、料理用に買ったおいた小麦粉とランタンを使って粉塵爆発を起こした様だ。

昔見たアクション映画の記憶に影響を受けての行動だろうが。

「しかし、そんな事までゲームの中で再現出来るとはねえ。どう考えても、無駄なことに力入れ過ぎだろ」

Mt・スライムは死んだみたいだから、いいけどね。

「よくもまあ、密閉空間での爆発で生き残ったなあ」

「完全な密閉空間じゃないですよ。岩で塞がれたたといっても、上の方は隙間がありましたし。あと、あの塞いでいた岩は無くなってました」

「イベント終了で消えたかな？」

それにしても、粉塵爆発ってRPGって感じの全くしない倒し方だな。
ゲームによっては銃器や火薬類もあるが、あくまでも弓矢や魔法の代替品的な位置付けだし。

簡単に使える分、値段が恐ろしく高い。
それが、小麦粉とランタンって、どれだけ安上がりなんだ。
安い分、ほとんど自爆技だけ……。

「ま、いつか。損したわけじゃないし」

「ポジティブ、ポジティブ」

いや、無表情で言われても怖いんだが。

「イベントの報酬って何かなあ〜つと」

「本体と一緒に消し飛んだんじゃないですか？」

えっ？

「さ、流石にそれはないだろ？ おっ、あった、あった。よかった
」

「チイツ」

今の舌打ちは聞かなかった事にしよう。

【ヒュージスライム召還石】

異界からヒュージスライムを呼び出す事が出来る。
装飾にも使える……かも？

「『かも?』ってなんだ。『かも?』って?」

「その可能性があるという事です」

「言葉の意味を知りたいわけじゃねえよ!」

「我儘ですね」

「!」

って、いかん、いかん。

アルのペースに巻き込まれてはダメだ。

ツッコミ属性がいつのまにか復活しているし、向こうの思う壺だ。
ん? これは、

「称号を獲得しました? えっ!?!」

【スライムキラー】

ヒュージスライムを倒した者に与えられる称号。

スライム系の敵がノンアクティブになる。

スライム系の敵に与えるダメージが増加する。

「スライムキラーシュウ参上!!プッ、クックック」

はっ!?!?

「笑うな! それにそんな台詞言わんわあ!?!」

このイベントについてカナタさんに聞いてみた所、スライムに潰されてという不名誉な死に様を知られたくないのと、同じ目にあつた仲間を増やす為に情報が伏せられていたらしい。

後の祭だが、はじめから、カナタさんに聞いとけばよかった。

ヒュージスライムを倒した事を報告するとかかなり驚いていたが、称号については激しく笑われてしまった。

『スライムキラーシユウ参上』、という台詞をアルが言ったせいで余計にツボに入ってしまったらしい。

倒し方については企業秘密と誤魔化しておいた。

『転ばす』に続いて『小麦粉で粉塵爆発』では、余りに……ね。

あゝ、あと、逃げ道を塞いでいた岩だが、イベントで消えたわけじゃないかった。

ちなみに、スライムの洞窟は完全な直線一本道で、入り口は街から鉱山に行くと正面に見える。

何が言いたいかというと……いい具合に撃ち出されたみたいだ……

はっはっは、笑え、笑え。

撃ち出された岩は街の広場に落ちて、露天やお客さんを何人か潰してしまつたらしい……はっはっは、はあ……流石に笑えんよ、これは……。

街の中は攻撃不可の為、ダメージが発生せず、物や建物が破壊可能なオブジェクトなので被害は皆無だったのが、せめてもの救いである。

一時、現場の広場と某掲示板は襲撃イベントか？と騒然としたが、それから何も起こらないのでバグか何かだという事で落ち着いたようだ。

マシロさんも広場にいたらしく、WISが着て、誰がやったんだと憤慨していた……あの怒り方だと岩の下敷きになったっばい。怖くて絶対に本当の事言えねえよ。わざと暴露しそうなアルは、例の飲み物で買収しておいた方が良さそうだ。

アルルーナ成長日誌

L V 2 1 H P : 6 9 7 S P : 1 3 7

S T R : 1 3 7 V I T : 1 6 8 I N T : 1 8 0 D E X : 5 8

A G I : 6 5

攻撃力 : 8 2 魔法攻撃力 : 9 9 防御力 : 1 3 1 魔法防御力 :
1 1 9 敏捷度 : 5 8

【通常攻撃】「消費S P 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費S P 5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費S P パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度：733 「玩具」
満腹度：98% 「満腹」

備考：

この頃、ログイン直後に背後から驚かせる事を日課にしているようだ。

初めて驚かされた時は、吃驚して顔から床に突っ込んでしまい、爆笑されてしまった……クソツ！

ただ、俺に耐性が出来た為か、新たな事に挑戦しようという兆しがある。

1：被ダメ

受けるダメージ。

2：与ダメ

与えるダメージ。

第14話

本日は、放置していた非戦闘系のクエストをこなすつもりである。所謂、パシリクエストだ。

ギルドではなく街中にいる特定のNPCから依頼を受け、買い物や届け物をして報酬を得るといふ、楽そうに思えるが非常にだるいクエストだ。

Mobと戦う緊張感もなく、ひたすら街中を走り回り無駄話を聞かされるといふ苦行。

何故そんなクエストを受けるかというと、少数ではあるが報酬が美味しい物があるからだ。

繰り返し受ける事は出来ないが、ステータスポイントが上昇したり、そのクエストを受けないと習得できないスキルがあったりするのだ。まあ、スキルの方は生産系なのであまり関係ない。

先ずは、STRが2上がるお使いクエストをするべき。

』
『という事で、お願いしますね』

「うーっす」

我ながら実にやる気のない返事である。

「将来が非常に危ぶまれる返事ですね。社会に出て見事に落ちぶれて行く姿が、簡単に想像できます」

「いやいや、流石にリアルで仕事中にあんな返事せんよ」

それに、まだ高校生だしな。そんな先の事言われても。

「フツ……。話し口調や態度には日頃の生活が如実に現れるものです。普段からの心構えが重要なんです。まだ高校生だと思っっていると、すぐに大学生になり、あっという間に社会に放り出されるのです」

いや、ゲームの中で生活態度や心構えってオカシイだろ。

なんか、周りにいる中高年だと思われる大人達が、ウンウンと頷いてるし。

人の話に聞き耳立てるんじゃないやねえよ！

会社行け、会社！ まだ午前中だろうが！！

てか、アル！ お前は俺の母親かっ！！

「ママと呼んでいいのよ？」

「呼ばねえよ！ って、毎回毎回、人の思考を勝手に読むな！！」

「もう、我俣なんだから。そんな子に育てた覚えはありませんよ！」

「だあかあらあ、テメエに育てられてねえだろっ！！」

5分後。

「 だろうが!! 」

クソッ！ 毎度の事だが、手を変え品を変え人の事をおちよくりやがって。

本当に、親の顔が見てみたいよ。
開発者出て来い、開発者。

「 そんな事言うなんて、もうシユウとはやっていけないっ! 」

「 なっ!?! 」

ま、まさか、使い魔の野生化フラグか？
結構、愛情度は高かった筈なのに、突然なんで？

「 どもも、ありがとうございます 」

「 はあ? 」

な、にを、

「 もっとやれー 」

「 いいぞ、兄ちゃん 」

「 ゲームの中で漫才が見れるなんてねえ。 お笑い養成所の人かしら? 」

「 AI相手にあれだけネタを仕込めるなんて、親がお笑い芸人かもよ? 」

「えっ？ えっ？」

漫才？ お笑い芸人？

てか、この周りの人だかりは何？？

ぷりーず、ぷりーず、ぎぶみー説明。

「はい、はい。お金はこれをお願いしまあ〜す」

どこで調達したのか、アルがシルクハットを持ってお金を回収している。

『ませ』

気付いたら、アルの手を掴み走っていた。
というと、なんだが恋愛小説の様に嫌過ぎる。

「もっつ、強引なん」

「……………」

無言でアルの頬つぺたを抓る。

盛り沢山に言葉では現せない感情が籠もっているのか、思いの外いつもより力が入る。

「いつ、いたひでぶ」

「とりあえず、黙れ」

「ひゃい」

ふう……とりあえず整理しよう。

お使いクエストを受けた。

ここまではおかしい所はない、あっても困るが。

で、アルによくわからない説教をされ、俺も熱くなって口論になり、いつのまにか漫才に突入。

漫才？ って、なんで漫才？

俺〓ツツコミ。

アル〓ボケ。

俺+アル〓漫才。

いやいや、俺〓ツツコミじゃない。

ん？

「アル、何してるんだ？」

「稼いだお金を数えています。ん、約5万ユリルといたたですか。意外と少ないですね。世知辛い世の中です」

50Kって1回の狩りで得る金額より多いじゃないか。

どんだけの人が見てたんだよ。

あゝあ、掲示板で思いつきり晒されそうだな。

「次はどうしますか？ ショートコントでいきますか？ それとも
正統派漫談？ もしかして、アコーデイ」

「だから、俺はツツコミでもお笑い芸人でもないつつの！」

「スライムキラー兼お笑い芸人。面白い職業だと思ったのに」

「俺の職業はただの剣士なの！勝手に変な職業にするなっ！！」

「シュウ、受けたクエストやらないんですか？」

「誰のせいだ！誰の！！」

「シュウのせいですか？」

「クツ！……………はぁ、まあいい」

付き合っていると、いつまでも終わらん。
最初は……………武器屋か。

「武器屋行くぞ」

「……………」

何故かアルが着いてこない。

「アル？」

「シュウ、すでに武器屋の中ですが？」

「えっ？」

いくら適当に走ってたからって、武器屋の中とは。ん？ そういえば……。

『ませ』って、『いらっしやいませ』かよっ！

『ありがとうございます。またお越し下さい』

NPC店員の若干無機質な声を背に受け道具屋を出る。

「これで終わりか」

「ええ、あとは戻って買ったアイテムを渡せばクエスト完了です」

なんか、予想以上に疲れたな。

元々、こういう系のクエストは苦手だったが、アルのせいで倍は気疲れが増したようだ。

「それにしても増えたな」

「どうかしましたか？」

「ん？ いや、使い魔連れてるプレイヤーが増えたなと思ってな」

この前までは滅多に見なかったのだが、最近、急に使い魔連れが増えた。

ただ、アルやマシロさんの連れていたシートの様な個性的な外装の

使い魔ではなく、皆全く同じ外装をしている。

粘土で造った人の様な形をしていて、身長は80cmくらい。大体、ゴブリンと同じくらいだ。

「錬金術の店で売っている汎用使い魔でしょう。個性の欠片もないガラクタです」

「個性があり過ぎるのも困るんだがな」

「それ程でもないですよ、シュウ」

「別に褒めてないから」

そういえば、そんな物を実装したって公式に載ってたような気がする。

アルがいるから関係ないって、ちゃんと見なかったんだよなあ。

それにしても、汎用使い魔か。

プレイヤーの要望が多かったのかねえ。

先着1人なのかわからないが、イベントで手に入る使い魔は同じ外装を連れているのを見た事がない。

流石に5万も使い魔獲得イベントを用意している筈もないだろうから、使い魔を手に入れられなかったプレイヤーから不満が出てきたんだろう。

「でも、いくら使い魔が欲しいからって、あんなゴブモドキ連れたくないなあ」

「……んん、コホン」「」

「へっ……?」

後ろから複数のわざとらしい咳払いが。
嫌な予感がするが、覚悟を決めて振りかえると、

「「「「「……………」」」」」

ゴブモドキを連れた方々が、大量にどっさり山盛りだ。
更に、まるで石化の邪眼、動けねえよ。

「はっ、はははは」

「「「「「……………」」」」」

空笑い程度じゃ場の空気は変わらないか。
どうしませう。

「シュウ」

「ん？」

なにか名案が、

「先に行ってますね」

と言い、テクテクと歩いて行く。

「……………」

「「「「「……………」」」」」

み、見捨てるなよ、おい！
主人を見捨てて、あっさり1人逃げていく使い魔。
てか、そんな個性いらんわ！

その後、誠心誠意の謝罪で赦してもらった事が出来た。

いやあ、人間話せばわかるもんだ……と、そんなに上手く行くわけもなく……。

いつのまにかゴブモドキ飼い主の数が増え、BOX状態に。

ダメージ判定が出るんじゃないかと思われるほど強力な視線と威圧感に耐えられず、心ばかりの謝罪品 奉仕の果実 を渡し、なんとか解放してもらった。

うーむ。向こうの方が明らかにハラスメント行為をしている。

でも、こちらに非があったので、強く出られないッス。

クエストを受けたNPCの所でアルを見つけた。

お金を持たせた覚えはないのに、何故か飲み物を手に寛いでいた。
更に、遅いと文句を言われる始末。

結局、クエストはこれだけにし狩りに行った。

いつも以上にサクサクとMobを狩れて、一気に3レベルも上がった。

どんなに頑張っても1日1レベルペースだったのだが、不思議なものだ。

ハッハッハッハ。はあ。

アルルーナ成長日誌

LV24 HP:791 SP:153

STR:158 VIT:191 INT:205 DEX:65

AGI:71

攻撃力:93 魔法攻撃力:111 防御力:143 魔法防御力:
127 敏捷度:67

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度:???

「ツツ」候補」

満腹度:77% 「若干空腹」

備考:

戦闘系の成長著しいが、それ以外の無駄な部分の方が更に顕著である。

街中では俺の傍から余り離れなかったのだが、最近、フラフラと自由行動をとる事がある。

偶に渡した覚えのないお金を持っていることがある……。

1：BOX状態。

故意にプレイヤーが自身や仲間、使い魔、アイテム等を使い、他のプレイヤーを困んで移動を制限した状態。

悪質なハラメント行為でもある。

第15話

「フンフーン フンフーン フンフーンフンフンフン」

「ご機嫌ですね」

「まあな」

先程、長年……な訳もないが、待ち侘びていた狩りのお誘いメールが着た。

お相手は、嬉しい事にマシロさんである。

まあ、メールの送り主の心当たりなど、カナタさんとマシロさんの2人しかない。

野良PTでもすれば、知り合いも増えるのだろうけどね。

「そういえば、マシロさんのメインスキルってなんだろう？」

「聞かなかつたんですか？」

「ああ、忘れてた」

「ドジッ子属性は健在ですね」

「ぬう」

悔しいが、完全に頭から抜け落ちていたので言い返せない。

メインスキルによって狩りでの役割が変わってくるが、コンビ狩りなのであまり関係ない。

という事で、どうしても聞かなければいけない事って訳でもないか

ら、いえ、すいません。舞い上がってすっかり忘れてました。会う時はいつも街の中だから、武器を出しているところ見た事ないんだよな。

「うむ。レイピアとかの細剣かなあ」

素早く舞うように敵を倒すマシロさん。

「イイ。実にイイ。」

ご飯をどんぶりですら杯はいけそうだ。

うん。女性プレイヤーには細剣や小型剣を選ぶ人が多いから、予想的にもおかしくない。

「妄想して鼻の下を伸ばさないで下さい」

「ソ、ソナコトシテナイデスヨ、アルサン」

く、空気が悪い。

「そ、そうだなあ。他にあるとしたら、両手槍の雑刀かな？ なんかお嬢様っぽいし、習い事が大学のサークルで」

「安易な発想ですね」

「……………」

今日は、妙に突っ掛かって来るな。

カルシウム不足か。ジュースだけじゃなく、魚食え。

「いいだろ！ マシロさんに似合いそうなん」シユウ君、私に何が似合うの？」「へ？」「

「久しぶりだな、凡人と、小娘」

「久しぶりですね、マシロと、金魚のフン」

い、いつの間に？ しかも、思いつきり会話を聞かれてる。つて、よく考えたら変な事を話してた訳じゃないから、別に焦る必要もなかったな。

「マシロさん、こんばんはです。あゝ、あとシートも久しぶり」

「こんばんは、シュウ君、アルちゃん。で、何が似合うの？」

「シュウと一緒に、マシロのメインスキルを予想していたんです」

「ふむふむ。それで？ 予想では何になったのかな？」

「あ、あのですね。細剣か

「ドリヤアアアアーツ!!」

『グオオオオオオオ………』

記憶違いでなければ、攻略サイトの情報によると、比較的高いHPと防御力を持つ【ライカンスロープ】。

それが、目の前でピンボールの様に弾き飛ばされて行き……死亡。

「「……………」」

「凡人と小娘、サボってないで手伝え」

えーと、先ず整理しよう。

マシロさんとPTを組むのはいつもよりも上の狩り場に行く為である。

目的地は、マシロさんが野良PTで知り合った人から聞いた一部テスターにしか知られていない、経験値・ドロップ共に美味い狩り場Mobの強さ、沸き具合が、1人では辛いがコンビ狩りならなんとか処理出来るとの事だ。

マシロさんのメインスキルは、「ん〜、狩り場についてからのお楽しみね」との事で、結局謎のまま。

道中、それ程Mobが沸かなかつたのと、マシロさんに良い所を見せたかったので俺が1人で処理した。

目的地までもうすぐという所で、先程までよりもワンランク上のMobであるライカンスロープが6体出現。

Mobの種類が変わったのは、このMobの出現地域に入ったからだ。

Mobの出現地域は、同レベル帯、属性、種族の3パターンで分類される。

ここまでは特におかしい所はない。

待つてましたとばかりに、マシロさんが武器を実体化させながらライカンスロープに向かって走る。

それに続こうと走りだして、興味津々だったマシロさんの武器を見る。

長柄の先に湾曲した巨大な刃が付いている大鎌。

その刃の周りには、毒々しい紫色の靄の様なエフェクトが掛かっている。

あまりに予想外なその武器に、アルと2人足が止ま……って、いかん、呑気に考えている場合じゃない。

「俺達も行くぞ。アルは、シートと一緒に足止めを頼む。普段の雑魚とは違うから無理はするなよ」

「化け猫とですか、気が進みませんが、まあ、いいでしょう」

そこまで毛嫌いしなくても思いつつ、今度こそ走り出す。

なんか、マシロさん1人でも全然余裕っぽい。だけど、

「そうも言ってもらえないよなっつと!!」

走った勢いを乗せて、マシロさんの背後を狙っていた奴を袈裟斬りに斬りつける。

振り返る前に《ステイング》を放ち動きを止め、一旦後ろに下がり距離をとる。

「遅いぞ、凡人」

「悪い」

喋っていた隙を付いた訳ではないだろうが、ライカンスロープが飛び掛かって来る。

「ちよ、つと、お」

防御した時の衝撃も豚さん達とは違うな。

大振りな爪による攻撃を弾いた所で、《ステイング》から《クレセ

ント》に繋げて技を叩き込むと、

『ギユイオオオオオ！』

断末魔の叫びと共に、ライカンスロープの体を構成するポリゴンが崩れ消えていく。

テスト時と正式サービス開始後しばらくは、覚えた技を使うのに技の名前を声に出さなければならなかった。

だが、プレイヤー大多数の要望メール、内容を簡単に言えば一々声に出すのが恥ずかしいにより思考による始動が可能となった。

俺もその内の1人だ。

ただ、何故か中高年の男性には音声入力の方が好まれていて、現在も音声による始動を使っているプレイヤーは残っている。

アルは残念がったが、俺も思考操作に切り替えた。

最初の頃は多少気に入っていたのだが、PTを組んで他人の前で叫ぶのは恥ずかしい。

ソロでも、狩り場に1人つきりという訳ではなく、周りに人がいるので恥ずかしいのだ。

その事を伝えた時のアルの一言、

「ケツ、ガキが一丁前に色気好きやがって」

お前はどこのオッサンだ。
せめて、見た目にあった言葉遣いをして欲しいよ。

「ラストっ」と

『グオオオオオオオオオオ……』

最後の1体が消えていく。

普段の雑魚とは違い、多少手間取ったが2人+2匹なら、なんとかなりそうだな。

「謙遜してたけど強いじゃない」

「そ、そんなことないですよ」

おおっ、好感度アップか？

「凡人にしては、だけどな」

「……………」

「シートッ!」

なんか、思いつきり嫌われてるな。

初めて会った時からだから、原因がわからん。

「化け猫は逃げ回ってた。無様に……プツ、ククク」

「アルツ！」

相変わらず口が悪い。

使い魔は飼い主に似るって言うが、あれは間違いだな。

「すみません、マシロさん」

「こちらこそごめんね、シュウ君」

謝罪しあう飼い主。

当のアルとシートはというと、睨めっこ状態である。

「……………」

「はあ……………」

どう考えても、仲良くってのは無理っぽいな。

「じゃ、じゃあ、先に進みましょうか」

「え、ええ」

険悪なアルとシートは放っておき、目的地までの道すがら大鎌について聞いてみた。

「ちょ、ちよつと」

シートも行ってしまった。

しょうがない、覚悟を決めて玉砕と行くか。

囲まれてるから逃げようがないし。

なによりマシロさんを放っておけない。

「アル、行く……ぞ？」

気を取り直した俺の目に、信じられない光景が映る。

マシロさんが向かって行った方向にいたMobが、次々と宙に舞い消えていく。

「ほ、ほえ?？」

ちょ、ちよつと待て、まずは深呼吸からだ。

吸って〜、吐いて〜、吸って〜、吐いて〜。よしっ！

目の前でバーサーカーの如く巨大な鎌を振り回し、次々とMobを蹴散らしていつてるのは、

「マシロですね」

そう、マシロさんだ。

見間違えじゃないんだよね？

なんか、俺の中にあつた【女神マシロ】のイメージがガラガラと崩れていく。

と、お馬鹿な事を考えて気を抜いたせいか、近づいて来たMobに気付かず、もろに後頭部に攻撃を受ける。

「ぬふおっ!?! な、なんじゃい!?!?!?」

慌てて振り返ると、そこにはステキな体格の【ストーンゴーレム】さんが

「ふふふ、蟻さんは今日も元気に働いて偉いね」

「シュウ」

「でも、僕はキリギリスさんみたいになり」

「シュウツ!?!」

「ん!?! な、なんだ? アル?」

「ここは? ホームポイント?
なんでこんな所に???

「やっと正気に……ただでさえ、ゲームの世界に入ってきて来てるんですから、更に他の世界にまで突入しないで下さい」

「で、何があったんだ?」

「はあ。簡単に説明すると

アルの話によると、ストーンゴーレムはなんとか倒せたが、ライカンスロープに囲まれタコ殴りにあい死亡。

ホームポイントに戻り蘇生するものの、無様な死骸を晒した事にシヨックを受け、現実逃避に突入。

で、マシロさんからメールが着ているみたいだから、早く読め……
って、おい。

「それを先に言えって」

「誰のせいです、誰の」

「ん〜と……………へ？」

「どうしたんですか？」

見間違いかなあ。

というか、見間違いであって欲しい。

「あの大群を倒したんだと」

「シュウって、役立たず？」

「クッ」

人が気にしている事をズケズケと、照り返しというものがない。

「デリカシーです」

「デリカシーって言ったもん」

「全然可愛くないですよ」

うん。本人もそう思ってるから、あまり触れないように。

やはり、勢いでボケるもんじゃない。

1つ勉強になった。

んん、続き続き。

死に戻ってる俺にWISしてみたけど応じないから、気になってメールしたらしい。

とりあえず、メールの返信しないとな。

その後、街に戻ってきたマシロさんと補給をしてから、もう一度狩りに。

流石に同じ場所には行かず、マシロさんが普段狩りをしている場所で、まったりと雑談しながら狩りをした。

バーサーカー状態の事は、怖くて聞けなかった。

ちなみに、レア鎌を手に入れる前のメインスキルは両手斧だったらしい。

わ、ワイルドなマシロさんもステキ？

「シュウ、流石に無理がありますよ」

ほっとけ！

雑談をする内にわかった事だが、あの狩り場の情報はやはり嘘情報だった。
マシロさんが鎌を手に入れた時のPTにいた、「レオ」という奴が情報元だったらしい。
あの場所はバグなのか、大量にMobが沸くトラップの様になっていてかなりの危険地帯だったようだ。
レオとやら、探し出して絶対復讐してやる。

アルルーナ成長日誌

L V 2 4 H P : 7 9 1 S P : 1 5 3

S T R : 1 5 8 V I T : 1 9 1 I N T : 2 0 5 D E X : 6 5
A G I : 7 1

攻撃力：93 魔法攻撃力：111 防御力：143 魔法防御力：
127 敏捷度：67

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度：??? 「甲斐性なし」

満腹度：52% 「空腹」

備考：

何故かマシロさんの使い魔のシートとは相性が悪いらしい。
会う度に舌戦を繰り広げている。

1：野良PT

広場など人の多い所で募集をかけて、同じ狩り場に行きたい人達とPTを組む事。

必然的に、初対面の人達とPTを組む事が多い。

PTの中に個性の強い人がいると、狩り自体がダメダメな結果に終わる事もある。

ドロップ品の扱いで揉める事も。

第16話

カナタさん経由で奉仕の果実の大量注文が入った。

今までは、1〜5個くらいまでの少量の注文しかなかったので、貯まった果実をカナタさんに渡しておき、取引は任せていた。

狩りの時間を取引に割きたくなかったのと、取引自体が苦手で面倒な為だ。

もちろん、手数料は取られた。

儲けの2割はがめついよ、カナタさん。

今回は、複雑な事情？により俺が直接出向く事になった。

「1000個ですか！？　で、でも、そんなにも何に使うんですか？」

「実は、知り合いにレベルが50になった奴がいてね。テスターを集めたギルドを作るみたいで、そのお祝いにパーティーをするらしいんだ。それで、デザート用の食材にどうかなって言うてみたら、試食したのが美味しかったらしく、是非って事になってね」

ギルドは入るのには制限がないが、作成にはレベル制限がありレベルが50に達したプレイヤーじゃないと作る事が出来ない。

うゝむ。これでも夏休みを利用して廃プレイを続けてるのに、トップとの差が凄いな。

「凄いですね。もう50か、僕なんてまだ33ですよ」

「それでも速い方だよ。多分、平均的なプレイヤーで20くらいだ
と思うよ」

トップ集団が異常なだけか。
第2集団って所かな、俺は。

「確認ですけど、1個1万ユリルでいいんですよね？」

「ああ、【ネイス】からは」

「？」

「ああ。ネイスって言うのは、そのギルマスになる奴の名前なんだ
けど。値引きしてくれとか特に言われてないから、それで大丈夫だ
よ」

おお、カナタさんの手数料を引いても800Kの儲け。

娯楽品にこんな払えるなんて、ネイスさんって人は太っ腹だな。

まあ、本人からすれば端金なんだろう。

若干悲しくなってきたが、あっさりと新しい防具を買う資金が出来
たから良ししよう。

前回、マシロさんとの狩りで露呈した紙の様な柔らかさは、普通の
狩りスタイルが雑魚の乱獲の為、防具の購入を後回しにしていたか
らだ。

本来ならばあの狩りの後にも買い換えたかったのだが、アルに対
する2度に渡る口止め料1Mが財政を圧迫。

更に、ドロップ運の無さによる狩りの収入の少なさが追い討ちをか
け、お手上げ状態になった。

だが、今回の臨時収入があれば、予定していた物よりも多少だが良
い防具を買えそうだ。

ん？ よくよく考えると口止め料が無かったら、普通に買えてたよ
うな？

深く考えるのはよそう。空しいだけだ。

「100個だと、今、カナタさんの所にある奴じゃ足りないですね。
んじゃ、取引窓出しますね」

「ちょっと待った。その事なんだが、今回はシユウ君が直接取引き
に行ってみないか？ 先行組に顔見知りを作っておくと、ドロツプ
品の取引とか情報面で助かる事が多いよ」

「僕がですか？ うーん」

でもなあ、苦手なんだよな取引自体。

「シユウ君が行くのなら、今回の僕の手数料はいらない」行きます
っ！「よ」

200Kの差はかなり大きいので多少我慢してでも行くべきだろう、
等と理性的な判断をする前に、脊椎反射の様に返事をしてしまった。
金の亡者と笑いたいなら笑え、

「くっくっくっく、あっはっはっは、はーっはっはっは……にゅい
っ……」

「いや。お前に言っていないし、何度も言うが思考を読むんじゃない
とりあえず、突然横で笑い出したアルを頭突きで黙らせる。
きつと、どこかから電波を受信したのだろう、気の毒な奴だ。」

「しゅ、シユウ。ツッコミがどんどん雑に」

「悪いが、今の俺は商人であってお笑い芸人ではない。ていうか、普段もお笑い芸人とは違うからな」

「す「スライムキラーでもないっ!」……ふう、中々手強くなりましたね」

勝ったな。

「シユウ君、漫才はもういいかな? 話を進めたいんだけど」

「あ、はっ、はい」

いかな。

どうも俺の中に無理やり埋め込まれたっばいツッコミ属性が、勝手に反応してしまう。

「取引相手なんだけど、ギルメンでパーティーの雑用を担当している、レオという名ま「レオ!」……ん? 知り合いなのかい?」

「い、いえ、名前を聞いた事あるだけですよ」

レオ、その名前を忘れた事はない。マシロさんを罠にかけた貴様の罪は万死に値する。

もつとも、実質的な被害を受けたのは俺だけだが、罠にかけようとしただけで重罪だ。

しかし、こんなにも早く復讐のチャンスに巡り会えるとは、日頃の行いの賜物だろうか。

「テスターだったというだけで、それ程目立つプレイヤーじゃないんだけどねえ？」

「ん〜、えっと、他のゲームだったかも……あはははは」

流石に、復讐をする為に探してましたとは言えないよな。

「で、取引場所

取引日時は、明日の21時30分でパーティー開始30分前らしい。調理する訳ではないので、ぎりぎりでもいいとの事だ。

取引場所は、パーティー会場でもあるギルドハウスで、ギルド設立にあたって購入した物らしい。

ブルジョアめっ！ どうせ足元を見た取引で稼いだ泡銭だろう。

レオだけでなく、そのギルド自体がむかつてきたが、流石にギルド相手に喧嘩するほど馬鹿ではない。

ちなみに、レオに対する復讐の方法は脳内で108パターン作成され、最適な物を厳選済みである。

非戦闘地域である街の中で、最大限の苦しみを与える方法。

それは、後のお楽しみである。

実は、フィールドやダンジョンでのPKも考えたが、ジェントルマンな俺に、そんな暴力的な行為は出来そうにないので即却下した。

「120%、瞬殺されますしね」

その通りだよ！ 弱くて悪かったなっ！

指定されたギルドハウスの壁に凭れ掛かっている、小太りな男に声を掛ける。

他にそれらしい人がいないので、間違いないだろう。

「レオさんですか？」

「そうだが？ ああ。シユウって奴か」

「つて、おい！ いきなり呼び捨てか。」

「いくら年上だからって、最低でもマナーとして相手の了承をとってからにしろよ。」

「マシロさんの事があるからか、余計にむかつく気がする。」

「え、えっと。早速ですけど、取引窓出しますね。いいですか？」

「早くしてくれ」

「こ、こいつは。」

「作戦完遂の為に、ここはグツと耐え……られそうにないです。」

「こ」「君がシユウ君かい？」「……へ？」

「な、なんだ？」

突然の第三者登場に若干慌ててしまう。

「えっと、そうですね。あなたは？」

「ね、ネイスさん。どうしたんですか？」

こ、この人がギルマス？

なんか、ヒョロっとしてて見た目で損してる感じた。

「カナタの紹介だからちょっと気になってね。はじめまして、シユウ君でいいかな？ 君の事はカナタから聞いているよ。よろしく」

い、いい人属性！？

ギルマスになるくらいだから、もっと偉そうで自尊心の高いタイプかと思つてただけ。

隣のマナーのマの字も知らない奴に、爪の垢を煎じて吞ませたい。

「は、はい。シユウです。んと、好きな様に呼んで下さい。こちらこそ、よろしく申し上げます」

「そういえば、例の果物の取引だったね。先にそちらを

ありがとうございました。また機会があれば、よろしく
お願いします」

「じちらこそ」

取引は無事に終了したが、『マシロさん 正確には俺 の復讐
をしちゃうぞ』作戦の実行は無理っぽい。

流石に、ネイスさんがいる前でやる訳にはいかないだろう。

「!？」

その時、当初の予定通りに、アルがお盆の上に飲み物の入ったコップを乗せて歩いてくる。

アル、作戦中止だ。先にホームポイントに帰還しろ！

「これをどうぞ、サービスです」

あ、アルーっ！ このタイミングは不味いだろ、もうちょい空気読んでくれ。

そもそも、余計な時には人の思考を読むくせに、肝心な時にスル―するなよ！

ど、どうしよ……。

「ん？ あ、ありがとう。見た事ないタイプだけど、シユウ君の使い魔かな？」

「はっ、はい。そうです」

俺の儂い願いを断ち切るかのように、あっさりと2人はコップを受け取ってしまう。

しょうがないので、俺も残ったコップを手に取る。

「奉仕の果実で作ったジュースです」

「へえ、じゃあ、ありがたく飲ませてもらうね」

「は、ははははは」

思わず作り笑いが出てしまう。

「いえ、中身はサラマンダーの怒りです」とは、とてもじゃないが言えない。

ネイスさんは、地獄を見るとき知らずゴクゴクと飲んでいく。

ああ、今更だが、俺の選んだ復讐は、何とかしてサラマンダーの怒りを飲ませるといふ単純なものだ。

戦闘中でさえ感じる事のない　まあ、感じたら大問題だが　痛みを唯一感じる手段が、舌の痛覚だけだった為、この作戦を選ぶ事になった。

「うん、美味しい」

へ？　どういう事だ？

俺の疑問を他所にネイスさんは普通に話を続ける。

「聞いているかもしれないけど、カナタとはこの時からの知り合いでね」

本当に果実から作ったジュースだったのか。

しかし、料理スキルも無しにどうやって作ったんだか、相変わらず謎の多い奴だ。

だが、良くやった！　グツジョブ！

「あれでなかなか「ぶふおっ！」……ど、どうした!？」

「なっ!？」

突然、レオが崩れ落ちた。

ま、まさか!?

アルの方を見てみると、満面の笑みを浮かべ親指で喉を掻き切るジエスチャーを……。

お、恐ろしい奴。

「だ、大丈夫ですか？」

「ぐう……喉が焼け」

プツ……。ま、不味い、笑いが込み上げて来る。

レオはあのまま呆気なく撃沈。無様と言っ言葉を中心の中で送ってあげた。

不思議がっていたネイスさんは、バグという事でなんとか誤魔化した。

まあ、同じ物 本当は違うが 自身も飲んでいたので、それほど難しい事ではなかった。

何故かギルドに誘われたが、しばらくはソロでやりたいと断った。ただ、フレンドリストの登録はしておいた。

「ふう、上手くいって良かった」

それにしても、緊張したせいか喉が乾いたな。そこで、ようやく手の中の存在を思い出した。そういえば、若干の興味で覚えた料理スキルは、そこまで上がっていない為、果実を加工した物は初めてである。どんな味かと期待して飲んでみると、

「ん？」

どこかで味わったような？

「ぐ、グフオツ！？」

「ふふふ、油断大敵ですよ。ご主人様？」

あ、アル！？ お、お前……。

次第に薄れる意識の中、満面の笑みを浮かべ親指で喉を掻き切るジエスチャーをする、アルの姿が

アルルーナ成長日誌

LV24 HP:791 SP:153

STR:158 VIT:191 INT:205 DEX:65

AGI：71

攻撃力：93 魔法攻撃力：111 防御力：143 魔法防御力：
127 敏捷度：67

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度：??? 「貧乏な甲斐性無し」
満腹度：88% 「満腹」

備考：
手の込んだいたずらが増えてきた。
ホームポイントや街の中ですら気が抜けない……。
なんとかせねば……。

1：紙の様な柔らかさ
紙は、防御力が低い。
柔らかいも同じような意味です。

2：ギルド

気の合うプレイヤー同士で作った集団。
クラン等他の呼び方をするゲームもある。

3：ギルマス

ギルドマスターの略。

簡単に言うとリーダーのようなもの。

4：ギルメン

ギルドメンバーの略。

5：M

メガの略。

1 Mだと100万。

2 . 5 Mだと250万。

第17話

レオと向かい合う様に立ち、腰に吊るした剣を鞘から抜く。

「それにしても……」

こんな大勢の人に注目されるなんて、初めての経験だ。そんな事を考えたせいか、不意に顔が火照ってきた。

更に、心音も早くなっていく。

落ち着こうと深呼吸するが、一向に動悸が鎮まらず、高鳴る胸の鼓動が観衆に聞こえてしまいそうだ。

ま、まさか！？　これが世に言う

「……恋？」

「シユウ。脳外科か精神科での診察を、強くお勧めします」

露天を覗く人達で混雑した広場。

多くのプレイヤーが、自身の目的を果たそうと声を上げている。

「オークの心臓5個、2千ユリルで売ってー！」

「Lv18盾剣士、狩りに連れてって下さいー！」

「【リザードの革】高値で買いますー！」

「さつき目玉買ったって叫んでた人どこー？」

「沼行きPT募集！ あと3人」

「高性能防具が激安っ！ 早い者勝ちだよー！」

ん？ 高性能防具！？

どの程度の物かと、防具売りの露天に並んでいるアイテムをチエツクするが、

「銅製の【チエインメイル】が、2万ユリルね」

いやいや、これはボリ過ぎだろ……。

店売りの同製品と大差ない性能で値段が2倍って、もうアホかと。スキル上げの過程で出たゴミなんて、店売りしないなら材料費で捌けよ。

「全く……」

取引での儲けを軍資金に、防具を買い換えようと露天を覗いているのだが、碌な物が無い。

せめて、鉄以上の素材で作った物が、あればいいんだけど。

「シユウ。あれなんかどうですか？」

「ん？」

アルの指差す方を見してみる。その先にあったのは、光沢のある青い生地に龍の図柄が描かれ、戦闘時に動きを妨げない

ようスリットが深く入っている　チャイナドレス。

「アル君。君は、俺にあれを着ると？」

「ハイ」

当然、着るつもりはないが、はじめて見る物なので興味が出た。手に取り、アイテム情報を確認してみる。

アイテム名は、【バトルドレス】。

何故か薄い服なのに、下手な金属鎧よりも防御力が高い上、若干だがステータスアップ効果もある。

開発チームの中にコスプレヲタがいるのか、不自然なほどに性能が高すぎる。

自身の趣味を、ゲームの中に持ち込む公私混同ぶりが、実に恐ろしい。

だが、このアイテムのもっとも恐ろしい所は、女性専用防具じゃないという装備制限の緩さだ。

女装趣味の中年男性が、チャイナドレスを纏って戦闘を行い、激しい動きによってスリットが

「うげ……」

いかん、不味いモノを想像してしまった。

ま、マシロさんだ。マシロさんが着た時の事を想像しよ

「シユウでも装備できますよ」

「や、止めてくれ、アル」

一瞬、自分が装備した姿を想像してしまったジャナイカ。

広場にある露天は、プレイヤーの邪魔にならないよう、決められた場所に並んでいるが、サービス開始してからは、まだまだ露天を開く人が少なく、各々適当な場所に開いていた。しかし、露天の数が増えていくと、プレイヤーから不満の声が洩れるようになった。

無秩序に開かれた露天は、何処にあるのかわかり難い上、集まった人目当ての アイテムやPT募集の叫び プレイヤー達の移動の邪魔になった為だ。

だが、すぐにプレイヤー同士、掲示板で意見を出し合い、露天を開く場所や広場でのルールを決めた事によって解決された。現在では、公式HPの初心者プレイガイドの所にも記載されている。

「ったく。3千万ユリルって誰が買えるんだよ」

「やっぱり、着たかったですか？」

「やっぱりってなんだ？ やっぱりって？」

もちろん、ホームポイントでこっそり着替えてみようなどと、思った訳じゃない。

露天巡りをしてる本来の目的を忘れて、マシロさんにプレゼントす

るか迷っただけだ。

あのチャイナドレスを着れば、ボディラインが

「鼻の下が伸びてますよ」

「い、嫌だな。気のせいだよ。ははははは」

健全な青少年なんだよ。妄想は標準装備で、みんな持ってる物なんだ。

そう、リンゴが木から落ちるのと同じで、必然の帰結なんだよっ！

「犯罪者予備軍」

「ぐ、ぬう……」

やばい、旗色が悪い。

なにか別の話題でもないかと、周りを見回すと、

「あれ、なんだ？」

そこには、広場に来た時にはなかった、黒山の人だかりが出来ていた。

なにかを遠巻きに見物している様だ。

これだ！？

「アル。ちょっと見に行くぞ」

「はあ……猛烈に嫌な予感がします」

「覗いてみるだけだっつて」

こんな時には役に立つと、小さな体に感謝して、プレイヤーの間を縫う様に進み、中心部に近づく。

女性プレイヤーの体に触れるという、幸運なアクシデント 自身の名譽の為に言わせてもらうが、故意にはない に恵まれつつも、なんとか人だかりの最前列に辿り着いた。

俺以上に小さな体のアルは、後ろを楽々と着いて来た。

どんな奴が騒ぎの元凶かと見ると、

「あれって……っ!？」

マシロさんとレオであった。

レオの奴、畏にかけただけでは飽き足らず、難癖でも付けているのか？

「マシロの方が絡んでるみたいですよ」

「……へっ?」

どういう事だ? 畏にかけられた事に、文句を言っているのかな? 前の狩りでの失点を回復する為に、マシロさんに加勢した方が良さそうだ。

「マシロさんっ!」

「シユウ君!？」 「お前、昨日の……」

同時に声を掛けてきた2人が、相手の言葉に反応し疑問の声を上げる。

「「えっ?」「

「あのですねえ

という訳なんですよ

「という訳って……?」「何言ってるんだ?」「

うむ。お約束な説明の省略は、起こらなかったようだが、でも、詳しく説明すると、昨日の復讐がばれるよな。

「まあいい。つまり、お前ら知り合いなんだな?」「

「そうよ

マシロさんがあっさり肯定すると、レオに憤怒の形相で睨まれた。もしかして、ばれちゃった?

「おかしいと思ったんだ。やっぱり、お前の仕業か」

「ん? 何? シュウ君が何かしたの?」「

「……は、はあ。ちょこつと、畏に嵌められた仕返しを」

レオは、あの味を思い出してしまったのか、若干顔を顰めた。経験者として、その気持ちはわかる。あれは、地獄だもんなあ……うつぶ。

「どこがちよこつとだっ! こっちは、死ぬかと思ったんだぞっ!」

「何をやったか知らないけど、子供の可愛い悪戯くらい、大目に見

なさいよっ！ それでも男なのっ！！」

こ、子供……。確かに子供だけど、マシロさんもそんなに年は変わらない筈なのに。

その時、これと違って変化のない状況に焦れたのか、野次馬の中の数人が「揉めてるなら、決闘しろっ！」と騒ぎ出した。

「そうだな。シュウ……だったな。決闘するぞ」

「へっ？」

「待ちなさいよ。やるなら、私とでしょ？」

ぬう……。正直、断りたい。

けど、マシロさんのバーサーカーっぷりを、こんな大勢の前で晒すのは憚られるし。

「こっ見えても、俺はフェミニストだからな。ゲームの中とはいえ、女相手に戦えるかよ」

「はぁっ？」「

畏に嵌めるのはいいのか……。

そっちのが、どう考えても卑怯でフェミニストっぽくないぞ。どっちにしろ、やるしかないか、

「マシロさん。僕がやりますよ」

「でも……」

「大丈夫ですよ。それに、マシロさんがやったら、100%マシロさんの勝ちですし」

あの地獄から無事帰還するような強さだからな。

テスターでも、名前を聞かないこいつは、大した強さじゃないだろ。まあ、俺よりは強いだろうけど……。

「勝手に言ってる……この勝負、500万ユリルずつ賭けるぞ。唯でさえ、あんな目に遭わされたんだ。叩きのめすだけじゃ気が済まん」

「あの、170万ちょいしか持ってないんですけど」

んなに持ってたら、もっと良い装備してるっての。

なんか、やる前から勝った気になってるし。

「足りない分は私が出すわ。いいでしょ？」

「えっ？」

「俺は別にいいぜ」

マシロさんって金持ちなんだな。

じゃ、なくてっ！

「いいんですか？ 負けたら」

「絶対にシユウ君が勝つから、大丈夫よ。楽勝、楽勝」

いや。その根拠のない自信は何処から……？

明らかに、レベルも装備もこつちが負けてるんだけど。

デュエルシステム。

P K犯になる事無く、P V Pを楽しめるシステムだ。

大まかな流れは、どちらかが決闘の申し込みをして、ルール設定を決める。

そのルールに双方が同意すると、カウントダウンが始まり、0になると同時にデュエルが開始される。

ルール設定だが、レベルや装備の差のある場合は、基本的にF Aでファーストアタック決着を付ける。

どちらかが死ぬまでのデスマッチだと、大抵の場合、戦う前から勝敗が決まってしまうからだ。

1対1だけでなく、複数対複数、1対複数等、様々な形でのP V Pを楽しめる。

戦闘を行うデュエルフィールドは、半径15mの円形で、他のプレイヤーは中に入る事が出来ない。

「ルールは、1対1のF Aで制限時間無し。で、いいですか？」

「ああ、それでいい。どんなルールでも俺が勝つんだからな」

「やっぱ、嫌な奴だな……」。

ルールの確認を済ませ、互いにデュエルフィールドの端に移動する。目の前に出て来たウィンドウの『Yes』のボタンを押す。

「シユウ君。頑張つてーっ!」

「凡人。負けたら、……わかってるな?」

好き勝手に野次を飛ばす観衆の中、マシロさんの応援とシートの脅迫の音が、よく聞こえた。

マシロさんの為でもある戦いなんだから、お前も応援しろよ。

まあ、シートらしいと言えば、シートらしい声援だけど。

「シユウ。始まりますよ」

「わかってる」

カウントダウンが0になったと同時に、レオがこちらに向かってじりじりと近づいてくる。

レオの武器は両手槍なので、なんとかして懐に入れば勝ちが見える。投擲スキルは取ってないが、隙を作る為に左手の剣を投げるか?

いや、アルに《悲鳴》を……

「ミゼラブルペイジーッ!」

「!?!」

互いの距離が残り6mという所で、レオが手に持つ槍に微弱な緑のエフェクトを纏いながら、物凄いスピードで突っ込んでくる。

いい年して、ヒーローヲタかよっ!!! ってか、

「アホらし……」

レオのあまりの天然っぷりに、真剣に策を練っていたのが馬鹿らしくなってくる。

1 m程左にずれて、右手を真横に突き出すと、レオは速度を緩める事無く、俺が持つ剣に自ずから斬られた。

「ぐふう」

目の前に浮かぶ『YOU WIN』の文字が虚しい。

《ミゼラブル ペイジ》

走った勢いを利用し、対象を貫く突進技。

スキル熟練度に応じて速度が増加。

対Mob戦では、技終わりの硬直時間の長さを考慮に入れても、非常に使い勝手がいい。

基本的にMobは、タゲったプレイヤーに真っ直ぐ向かってくるので、避けられないし 今の所は、であるが リーチの差で攻撃も受けない。

だが、この技はゲームバランスの為か、途中で軌道変更出来ないし、中断も出来ないように設定されている。

近距離から思考操作で使うなら、対人戦でも使える技だと思う。運悪く避けられたとしても、距離が取れる為、十分立て直す事が出来る。

しかし、遠距離から音声操作で使うのは、自爆以外のなにもでも

ない。
少し横に移動し、武器を突き出していれば、自分から当たってくるのだ。

レオに賭けたプレイヤーが多かったようで、かなりの罵声が飛んで来る。

自分達が勝手に賭けただけなのに、賭けの種にされたこっちはいい迷惑だ。

まあ、あんな馬鹿な負け方だと、文句を言いたくなるのもわかるが……。

「約束の金だ。確認しろ」

「へ？ あ、ああ、どうも」

突然現れた取引窓に吃驚したが、金額を確認し『OK』のボタンを押す。

てつきり、口約束など無視して、捨て台詞を残し去って行くと思っ
てたが、変な所が真面目な様だ。

「シユウ君。かっこ好かったわよ」

「相手に恵まれたな」

うらむ。せつかく褒められても、あんな勝ち方だから素直に喜べねえ。

シートの言う通り、相手の自爆だし。

「チイツ……じゃあな」

きまりが悪いのか、レオは舌打ちをして去って行った。

見た目もそうだが、言動もマンガに出てくるような『ちんぴらA』である。

道理で、負けフラグが満載な訳だ。

「それでいくとシユウは、主人公と仲の良い『モテナイ親友C』です
すね」

「……………」

あれか？ 序盤はそこそこ出番があるが、無謀な告白をして碎け散つたり、やたら体を張った失敗をしたりギャグ要員。

やがて、クールな美形や萌え系のキャラが増えてきて、最終的にはそんな奴いたか？って忘れられてる……。

「違うない。クツクツクツク」

「アルちゃんっ。もう……シートも笑わないのっ!」

レオから受け取ったお金の半分をマシロさんに渡そうとしたが、断られてしまった。

マシロさんのお金がなかったら、賭け自体成立しなかったから、と

言ってみたが、実際に戦ったのは俺だからと、逆に説得されてしまった。

その後、しばらく雑談した後、レオの無様な姿を見た為かどこかスツキリとした顔で帰って行った。

ちなみに、仕返しの内容を話したら、シートがグツジョブとばかりに、ぺしぺしと尻尾で叩いてくれた。

マシロさんは、良い事を聞いたと喜んでいたが、誰かに使うつもりだろうか……。

結局、防具はカナタさんに依頼する事にした。

当初は、1Mしか持ってなかったため、材料費の事を考えると頼み難く、露天で掘り出し物を探す事にしたのだが、6Mもあれば、今のSTR値ぎりぎりの防具一式が楽に揃う。

プレイヤーメイドの性能は、生産者のスキル熟練度の影響が一番大きい。ランダム要素も含まれてるので、絶対良品が出来るとは限らない。

ただ、カナタさんは、大半の時間をスキル上げに費やしてるそうなので、下手なプレイヤーに頼むよりは安心である。

本人は、防具よりも武器を作る方が好きらしいけど。

LV 24 HP : 791 SP : 153

STR : 158 VIT : 191 INT : 205 DEX : 65
AGI : 71

攻撃力 : 93 魔法攻撃力 : 111 防御力 : 143 魔法防御力 :
127 敏捷度 : 67

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

愛情度 : ??? 「ドS」
満腹度 : 18% 「ひもじい」

備考 :

いたずらに対するお仕置きは、餌抜きにした。
満腹度1桁になるまで、放置すると結構こたえたようだ。

1 : P v P

【P l a y e r v s P l a y e r】の略。
対人戦全般の事。

2 : F A

ファーストアタックの略。

第18話

チエインメイルを着込み、その上からブレストプレート装着する。そして、ヴァンブレイスとグリーヴをそれぞれ装備する。

といっても、実際に着替えるわけではないので、装備ウィンドウを操作する事により一瞬で終わった。

終わったのだが、

「シュウ、どうかしましたか？」

リアルより軽く感じていた筈の身体が、急に鉛のように重くなってしまうた。

「呪われてしまったようだ」

って、馬鹿な事を言ってる場合じゃないな。

今まで革装備だったから、装備重量の事を完全に忘れてた。

「重くて、まともに動けん」

「……馬鹿？」

馬鹿ですけど、ナニか？

とりあえず、ヴァンブレイスとグリーヴを外すと動きが元に戻った。防具が二箇所だけになったが、それでも前の装備よりも防御力が断然高かったりする。

まあ、前のがしょぼいだけなんだけど……。

「ふう、これでよし」

「ここまで来ると、ドジッ子ではなく天然属性ですね」

「それだけは止めてくれ」

これ以上、おかしな属性付けは阻止せねば。

武器、防具、装飾品、それぞれ装備条件以外に重さという要素がある。

装備条件は、アイテムによって違うが、レベル、STR値、AGI値、性別等である。

最大所持重量は、そのプレイヤーのレベルとSTR値により決定される。

各々アイテムの装備条件を満たしていても、重量オーバーの度合いによって段階的に動きが鈍くなる。

アイテムの重さは、種類だけでなく素材によっても変わる。

同じチェインメールでも、素材が鉄や青銅の場合よりも、銀の方が10〜20%重くなるのだ。

ただ、鞆の中身は重量無しという扱いになっている。

もちろん、アイテムを鞆から取り出したら話は別だが……。

ちなみに、極稀にだが、生産者が名前を付けられる物が出来るらしい。

スベリオール

【Superior Quality】、優れた品質という意味らしいが、プレイヤー間では、単純にNameネームか名持ちと呼ばれる。

装備条件と重量がきつい代わりに、性能が一般の物とは比べ物にならない程高い……らしい。
ドロップ品やダンジョンの宝箱等でも、名持ちは手に入る事があるみたいだ。
おそらく、マシロさんの大鎌も名持ちだろう。

ストーンゴーレムが、叩き潰すように両手を振り下ろして来るのを、後ろに飛び退き避ける。

攻撃により崩れた体勢を立て直す前に、背後に廻り込んで無防備な背中に、袈裟斬りから《クレセント》を叩き込み、更に《ステイング》を追加した後、”予定通り”にしゃがみ込む。

「よいせつと」

頭上を薙ぎ払う腕が通り過ぎたところで立ち上がり、胴体部分を2度斬り付けると、ストーンゴーレムの身体が砕け散り、ゆっくりと消えていく。
消えていく残骸を見つめながら、汚れを払うように左右の剣を振り、腰の鞘に収める。

「ぬるいな……」

「シュウ！ 変なポーズ取ってないで、こつちを手伝って下さいっ
！」

「へ〜い」

やれやれ、男のロマンがわかってないな。

収めた剣を鞘から抜き、残ったMobに向かって走る。

多少の攻撃を食らっても大丈夫という安心感からか、狩り場のランクを上げて、前より落ち着いて戦える。

もつとも、前の装備でも少数相手であれば、ソロ狩りは十分可能だった……。。

アルに比べて単純なAIなのか、行動パターンが少なく、それを覚えた後は狩りが各段に楽になった。

特に、ストーンゴレムは攻撃力は高いがスピードが遅く、攻撃も単調な為、一番のカモである。

「カエルの方貰うから、狼を片付けてくれ」

「楽な方選びましたね……」

「ソナナコトナイデスヨ」

ん〜と、カエルの攻撃方法は……あれ？ 何だっけ？

思わず動きを止めてしまった所に、【ジャイアントフロッグ】の舌が真っ直ぐ伸びてくる。

「つと！ ああ、舌だっただけ」

胸辺りに伸びて来たのを剣で逸らす。

舌のくせに武器で弾くと何故か金属音がするのが、如何にもゲームっぽく生々しくない。

アンデット系はやたら生々しいのに……。

そっぴや、カエルは舌での突きオンリーだったな。

「楽勝、楽勝」

舌攻撃を剣で弾き、舌が口の中に戻るまでの間に攻撃を加える。
同様に3度繰り返し返すと、

『ギユウイイイ』

動きを止め溶けるよう地面に消えていく。

順調に狩っていると、あっという間にレベルが2も上がった。
適正レベルのMobを狩ると、獲得できる経験値がかなり違うよう
だ。

こんな事なら、もうちょっと早めに狩り場を変えてたらよかったか
も……。

「あと1レベル上げたら、一旦補給に戻るか」

「そうですね」

ライカンスロープはちょい苦手なので、出来ればストーンゴーレム
かジャイアントフロッグあたりの群れがいて欲しい。

「人形かカエルいないかな？ ……ブフォツ」

「どうしたんで、へぶっ」

な、なんだあ？

何かにぶつかつたかと前を見てみるが、障害物やM o b等、何も見当たらない。

また顔から当たるのは嫌だと、ゆっくり前に手を伸ばしてみると、

「ん？　なんだこれ？」

「何かありますね……」

透明な何かがある。

手探りで大きさや形を調べてみると、縦は全く手が届かないので3 m以上、横は2 m程、奥行きは30 c mといった壁の様な物だった。フィールドのど真ん中に、なんでこんな物があるのか不思議である。

「バグかな？」

「そうかもしれないね」

一応、メールしておくか。

流石に、この透明な壁がイベント関係だとは思えないし。

最後に残ったストーンゴーレムを倒すと、ちょうどレベルが上がった。

「補給に戻るべ」

「は『ゴオオオオオオオ！』」

なんだ！？

もう次のM o bが沸いたのかと辺りを見回すが、予想外の物体が目
に飛びこんできた。

かなり離れている筈なのに、思いつきり目に付くその巨体。

「フィールドボスカよ……はじめて見た」

遠目からでも迫力のある、炎を帯びた緋色の巨体。

R P Gでは定番中の定番だが、人気が高いドラゴン系M o bである。
正式名称は、【ファイアドレイク】。

火属性のドラゴンで、本来なら、もっと街から離れた場所にいる筈
の特殊M o bだ。

「こんな所にいるなんて、どっかの馬鹿がトレインしてきたっばい
な」

「走って逃げている、あれじゃないですか？」

やたら重装備な男のプレイヤーが、必死になって逃げている。

ただ、障害物がこれといって無い為、炎のプレスをもろに受けてい
る。

その度に回復を行い、逃げる速度があまり上がらないようだ。
まあ、それは置いておいて。

滅多に見れないM o bなので、もっと近くで見たい。

「もうちょい近くに行くぞ」

「危ないですよ」

「だいじょぶ、だいじょぶ」

攻撃してタゲをもらわなかったら、安全の筈だし……。

【幻夢】では、ゲームの舞台である【ノア】の世界を、いくつかのエリアに分けている。

フィールドボスとは、各エリア毎に存在する親玉みたいなものだ。

普通のMobや条件を満たせば出現するフラグMobとは違い、エリア内で1体しか沸かず、倒した場合はその後1週間リポップしないらしい。

凶悪な強さを持つが、その分経験値とドロップ品が良い筈 誰も倒せてないのでわからないけど である。

名前のわかっているフィールドボスは、公式HPに載っている【フアイアドレイク】だけである。

「すげっ」

「爬虫類の分際で生意気な」

そう言う君は植物だろうに……。

それにしてもデカイ。

横と縦の違いはあるけど、あのヒュージスライムと同じ位はあるな。

「シユウ、あれなんでしよう？」

「ん？」

ファイアドレイクから逃げている脇役Eの走っている方向に、やら装飾過多な装備をしているプレイヤーがいる。面倒なので脇役Fでいいや。

脇役Fは、ファイアドレイクを見て逃げるところか、これもまた装飾過多な両手剣を構えて待ち構えている。

「義を見てせざるは勇なきなりっ！！」

うーん、なんか微妙に違う気が……。

脇役Eは、脇役Fに構う事無く逃げてるし。

「変態ですね」

「うん。間違い無く変態だ」

あんな凄そうな装備してるんだから、やっぱり強いんだろうな。

おっ、脇役Fにタゲが移ったみたいだ。

「我輩は名誉ある『ゴアアアアアッ！』『ウゴッ……』」

あの馬鹿、Mob相手に何をやってるんだ？

思いつきり爪の攻撃で跳ね飛ばされた。

「名乗りや前口上、変身中は攻撃しないのが『ガアッアアア！』『

ぐふう……」

どんなお約束だそれはっ！

てか、攻撃受け続けてるのに回復もせず、わざわざそんな事言っながら、余裕が有る

「あっ、死んだ……」

「脇役F警部に、敬礼！」

訳じゃなかったのか……。

つたく、どんなロールプレイだよ。

相変わらず、隣りでアルが馬鹿なことをしてるが、ツッコむと喜ばせるだけなのでスルーする。

「スルーするって、洒落ですか？ うぶぶ」

「なわけねえだろっ！」

しくしく……この勝手に反応する身体をどうにかして下さい……。

しかも、ツッコミの音が聞こえてしまったのか、思いつきりタゲられたし。

「アル、逃げるぞ」

「へい、親分」

誰が親分だっ！

背後から聞こえて来る不吉な足音は空耳だと思いたい。

空耳ではなかった様で、地響きと共に追い掛けられて、約5分。

「アル、どうしようか？」

「こんがりローストされるのも一興ですね」

いやいや、料理の食材じゃないから。

誰かに擦り付けてMPKするのも嫌だし、非常に不本意だけど潔く死ぬかな。

「アル、しょうがないけ、ブフォッ」

「どうしたんで、へぶっ」

またか……つてか、さっきぶつかった透明な壁だし。
どんだけ運が悪いんだよ、俺。

『ゴオアオオオアオ！！』

「げっ、もう来た」

透明な壁を避けて更に逃げる。
つて、いかんいかん、死ぬんだっとな。

「巻き添えを食らわないように下がってる」

「はい……」

俺が死ぬだけならアルはデスペナを食らわないので、アルを下からせる。

ゲームとはいえ、火は怖いな。

こんがりローストは正直勘弁して欲しい。

『グオアオオオオ』

「あれ？」

こっちに来ようとしてるんだけど、なんかつかえてる？

微妙にパントマイムみたいで面白……いや、その凶悪な顔だと滑稽かな。

「ああ、あの透明な壁か」

「シユウ、どうするんですか？ また逃げます？」

横にずれないように真っ直ぐ逃げれば、逃げ切れない事もないんだろうけど。

そういえば、

「アル、さっき覚えた《毒花粉》使ってみて」

「へい、おまちっ」

「寿司屋かつ！ じゃなくなつて……まあいいや、とりあえずやってみて」

毒が効いたら儲けものだな。

コスモスの一番右の奴から、緑色の花粉がファイアドレイクに向かって飛んでいく。

ある程度操作可能なのか、壁を避けて飛んで行ってる。

他の2本からも、違う効果の花粉が出るのかな？

「効いたみたいですよ」

「へ？ おおっ、グッジョブ、グッジョブ」

ファイアドレイクの赤い身体が、毒になった為か緑色になっている。しかも、HPが数秒毎にグングン減っていく。

「もうちょっとだな」

「飽きました……」

もう30分も経ったのか。

最初は、かなり減っていたのだが、HPが半分以下になっただけからあまり減らなくなった。

しかも、一定時間で毒状態が解除されるので、その度に《毒花粉》を使ったのだが、1回目は偶々だったのか滅多に効かない。

アルのSPが無くなると休憩させ、また《毒花粉》の繰り返し。アルじゃなくても飽きるよな。

「シユウ、もう減ってないっばいですよ」

「ん？ 本当だ」

あと1ドット位なのだが、それ以上減っていかない。
毒のダメージじゃ倒せないのかな。
うーうーん。

しょうがない、やってみるか。

「どうするんですか？」

「多分、一撃で倒せるだろうから、攻撃してみる」

まあ、こっちも向こうの攻撃一発で死ぬだろうけど……。

パーリングダガーを鞆に入れて、さっきドロップした【バックラー】
を取り出す。

露天に出しても売れない、店売りのゴミだが装備しないよりはマシ
だろう。

更に、ヴァンブレイスとグリーヴを装備すると、防御力はかなり高
くなった。

「装備しない方がいいんじゃないですか？ 動きやすい方が、攻撃
が当たると思いますが」

「でも、一撃耐えてからの方が確率高いだろ？」

「その装備で一撃耐えられるんですか？」

「ぬう……」

いや、無理かな？ やっぱり、身軽な方がいいか……。

デスペナで無くしたくない、ほぼ新品の防具を全て鞆に収納し、ドロップ品を間に合わせに装備する。

「んじゃ、行ってくる」

「逝つてらっしゃい」

何故か、不吉な言葉に聞こえたが、まあいい。

こういうのは、躊躇ったら良くない事が起こるんだよな。

せっかくここまで　アルが　頑張ったのに、横殴りで倒されるのはむかつくし。

「よっしゃー！」

横に移動して壁からファイアドレイクを抜け出させる。

壁が見えないので、またぶつかって、その隙にやられるのだけは嫌だからだ。

ファイアドレイクの口元を注視しながら、一定の距離を保つ。

『ガアアアアアツアア』

口からチロチロと火を出しながら、こちらにゆっくり近づいて来る。壁に阻まれてこちらに届かなかったが、何度もブレスを吐いていたので、そのタイミングはばっちり掴んでいる。

すうっと、口の火が吸いこまれた瞬間に、思いっきりファイアドレイク向かって走り出す。

「怖っ！　ちよい熱いし」

頭の上を掠めるように炎のブレスが吐き出されている。

広範囲で高威力だが、ブレス攻撃の間は本体が動かないので絶好のチャンスである。

一気に距離を詰め、

「ステイングッ!!」

熱くなつて思わず音声操作で発動してしまった……。

下腹辺りに《ステイング》が決まり、ブレス攻撃を続けていたファイアドレイクの動きが止まる。

更に、

『ゴオオオオオオ……』

ファイアドレイクの身体が罅割れ、内側から光りが溢れ出していく。

「よっしやーっ!!」

やったよ！ 俺、やったよ！

ドロップに恵まれなかった俺にも、やっとお宝が

<フィールドボス【ファイアドレイク】が、プレイヤー【シュウ】によつて倒されました。魔力供給源である【ファイアドレイク】が倒された為、現在から1週間、迷宮都市【ルトメイヴィス】周辺のモンスターの体力が減少します>

ナニ？ この嫌がらせの様なアナウンス……。

せめて、名前出すなら俺の了承とろっよ。

ポンポンっとなんが叩かれる。

「ん？ アル？」

満面の笑みでアルが発した言葉は、

「PKに狙われそうですね」

笑顔で言うな、笑顔でっ！

ファイアドレイクを倒した事により、一気に6レベルも上がって、ヴァンプレイスとグリーヴを装備出来るようになった。

ドロップ品も、防具作成や調合に使える【火龍の鱗】が5個、【ヒールクリスタル】が10個、【レポートストーン】が3個、他にも名持ちのアイテムが数個とウハウハだ。

良い事尽くめである。

ここまででは……。

アナウンスで名前を呼ばれた事により、掲示板で騒がれるし。カナタさんやマシロさん、更にネイスさんまで、メールやWISでどうやって倒したか聞き出そうとするし。

情報屋で、俺の情報が高値で売られていたり……もうね、勘弁してよ。

「まあ、人の噂も75日って言いますし」

慰めて……いるのか、ニヤニヤ笑っているので怪しいし、公式HPに名前が残ってるから、それはない。

しばらくは、過疎った狩り場でこそレベル上げしようと。

透明な壁はやはりバグだった様で、メールを送った次の日のメンテで修正されていた。
ファイアドレイクをバグ利用で倒したので、どうなるかと思ったが、御咎め無しで助かった。

アルルーナ成長日誌

L V 3 1 H P : 9 9 8 S P : 1 9 0

S T R : 2 0 2 V I T : 2 4 5 I N T : 2 6 2 D E X : 8 6
A G I : 8 9

攻撃力：118 魔法攻撃力：134 防御力：171 魔法防御力：155 敏捷度：93

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果实を生み出す。
奉仕の果实を1時間毎に3個自動生成。

【毒花粉】「消費SP18 土属性」

頭に生えている花から花粉を飛ばし、対象を猛毒状態にする。
5秒毎に現在HPの3%ダメージを与える。

愛情度：??? 「天然兼ツツコミ」

満腹度：48% 「空腹」

備考：

どうやら俺がINしてなくても、奉仕の果実は出るらしい。

偶に見かけたお金は、それを売って手に入れていたようだ。 □ :

カナタさんの目撃情報』

流石に、その金を巻き上げるのは、悪人っぽくて嫌だし……うーん、
知らない事にしよう。

1：トレイン

プレイヤーがMobを連れて、列を作っている様子からTrain^{トレイン}という。

トレイン状態で別のプレイヤーの元に行き、故意かどうかにかかわらず、タゲを移してそのプレイヤーを殺してしまうとMPKになる。相手が死ななかったとしても、十分に迷惑な行為なので、大人しく死ぬ方がいい。

2：MPK

Mobを使ってPKする事。

大量のMobを引き連れてタゲを擦り付けたり、かなり悪質な行為。

3：横殴り

他のプレイヤーが戦っているMobに対して、攻撃をする事。
禁止されてはいないが、ゲームによっては嫌がられる事が多い。
出来るだけ、他のプレイヤー近くで狩をするのは避けた方がいい。

第19話

うぜえ……。大声を出せば面白いと思っている芸人くらい、うざい。毎日毎日飽きもせず、金魚のフンみたいに人の後ろをちよろちよろしやがって。

「人気者ですね」

「どんだけ前向きな発想なんだよ」

ありもしない情報欲しさに、ストーカーされているだけだっちゆうに。

あんまりしつこいとハラメント行為で訴えるぞ、まったく。

ログイン直後、いつもなら声を掛けてくるか、悪戯を仕掛けて来るアルが、ボーっと立ったままだ。

「アル？」

「……………」

全く反応が無い。ただの屍のよ……じゃなくって。

前回こうなった時は、飲み物を物欲しそうにジーツと見ていたけど、ここはホームポイントなので、特に目を惹くような物は無いと思うんだが。

それに、何かを見ているというよりも、どこか生気がない気がする。いつも、無駄に生き生きとしているせいか、余計にそう感じてしまう。

なにか不具合か？ GMコールでも

「シユウ？ どうかしましたか？」

「へっ、あ、お前こそ、今……」

キョトンとした顔でこちらを見ている様子から、これといっておかしな所は見られない。

うぐむ、ちよつとラグっただけかな。

一昔前ならともかく、今時ラグるって大丈夫かねえ、この会社。

「いや、なんでもない。それより狩り行くぞ、狩り」

「わかりました」

ホームポイントから外に出て、赤ポの補充の為に道具屋に向かう。やっぱり、しばらくは目立たない所で狩りする方がいいかな。

「今日は、ちよい過疎った所で狩るからな」

「……ッ!？」

な、なんだ？ なんか変な事言っただか？

俺の言っただ事の何処に、驚愕するような言葉があったんだろ。

「やっぱり……」

「ん？ やっぱり？」

「人気の無い所で何をするつもりなんです？ このロリコンっ。幼女趣味っ！」

「いや、待て。このアホ幼女。やっぱりってなんだ。やっぱりって……てか、俺はロリコンじゃないし、どちらかと言うと、俺は年上好きだっ！」

何を叫んでるんだ俺は……。

近くにいたプレイヤーから、思いっきり注目集めてるし。

「自分の性癖を大声で叫ぶなんて、恥知らずな人ですね」

「誰のせいだよ」

赤ポを補充し、道具屋から出る。

人気の無い荒野の方に行こうか……なっ！？

「アル、今日って何かイベントあったっけ？」

「あつたとしても、こんな所じゃやらないと思いますよ」

ぱつと見でも30人以上いると思われるプレイヤーが、道具屋を取り巻く様にしてこちらを見ている。

俺には関係無いだらう。無い筈だ。無いといいなあ。

平静を装いながら、プレイヤーの囲いを抜け出そうとすると、突然PT要請ウィンドウが複数現れる。

「へっ?」

「シュウ、どうかしましたか?」

無言のPT要請って。

『No』ボタンを押して消していくが、それ以上の速さで新たなウィンドウが現れていく。
イジメよくない。

勝手に取引窓まで出してるし……。

「PT組んでくださいっ」

てか、あなた誰?

「早くOK押せよっ!」

命令口調で言われて押すわけねえだろ。

「要らないアイテム下さいっ!」

クレクレ君、地道に狩りしなさいよ。

「フレンド登録お願いします」

美女なら喜んで受けつけます。

あまりに酷いので要請拒否に設定し、人込みを掻き分けて逃げ出した。

適当に逃げ回り、人目の付かない路地裏に身を隠す事に……。

「なんで俺がシュウって気付かれるんだよ」

「シュウ、指名手配犯みたいで楽しいすね」

「楽しくねえよ」

どうせなら、かくれんぼと言って欲しい。

少しは気が紛れ……ないか、やっぱり。

「毎度あり」

ん？ こんなところに露天か？

入ってきた方とは反対側の道に、露天があった。

露天用の絨毯を広げているが、何故か商品が見当たらない。

「情報屋か？」

それにしてもあのプレイヤー、どこかで見た気がするな……思い出せないけど。

絶対に見た事あるんだけど思い出せないって事は、どこかで擦れ違った程度かなあ。

「……うぬ」

「？」

ま、見つかりとマズイし、一旦ホームポイントまで戻るべ。

「アル、ホームポイントまで」

「シユウの情報買いませんかーっ！ お買い得ですよーっ！！」

「って、待ていー！」

思わず、隠れていた木箱の陰から出て叫ぶ。
お前のせいだ。

まさか、情報が売られてるとは……。

「へっ？ あ、シユウだ」

「『あ、シユウだ』じゃないでしょ？ 勝手に人の情報売らないで下さいよ」

「な、ナンノコトダカワカラナイナ。アハハハハ」

だったら目を逸らすなよ。

「俺の事がシユウってわかったのはどうしてです？ 一応、名前は非表示にしてるんですが」

「……使い魔だよ、使い魔」

「アル？」

なんで、それでわかるんだ？

「そ、汎用使い魔以外は1種類1匹しかいないから、シユウが連れる使い魔がわかれば、名前の非表示なんて関係無いっしょ」

も、盲点だった。

そういえば、ゴブモドキ以外の使い魔はそうだったな。

「でも、どうして俺が使い魔を連れてるって？」

「前に掲示板で騒がれていた時に調べてたんだよ。いやあ、無駄にならなくて良かった、良かった」

俺としては、少しは悪いとか思っただけなんだが。

「まあ、いいですけど……もう売らないで下さいよ。今まで売ったのはどうしようもないけど、これ以上はハラスメント行為でメール送りますから」

「へーい。結構稼がせて貰ったし、いいよ」

なんか納得行かないけど、向こうの方がこういう事は上手っぽいし、これ以上は無駄だろう。

俺が口下手なだけかもしれないけど。

正直、儲けの5割くらいは欲しいが。

「じゃあ。アル、行くぞ」

「はい」

「あつ、俺の名前は【ポータ】だから」

聞いてないって。

「いいネタあつたら高値で買うからヨロシクね〜」

しばらくの間は、過疎った狩り場に通う予定だったのだが、何処に行ってもぞろぞろと付いて来るので、効率が悪い分損だと思い、普通に狩りする事にした。

主食は、狩り易いストーンゴーレムとジャイアントフロッグである。特にゴーレム系は、低い確率だが宝石を落としてくれるので、ドロップ的にも美味しく非常に嬉しいMobだ。

宝石とは、装備品の制作過程で使用する事により、ステータスアップや装備条件を軽減する等、様々な効果を付与する事が出来るアイテムだ。

しかし、鉱山での採掘数やドロップ数が少ないので、取引されるアイテムの中でも名持ち程ではないが高額である。

それにしても、何か対策を考えないとな。

自身考案のマニュアル通り、決まった手順でストーンゴーレムを倒

す。

大幅にレベルとスキル熟練度が上がった為、《ステイング》の時点で倒せる様になった。

その為、1体にかかる時間が少なくなりサクサク狩れて助かるし、強くなってる事が実感できて嬉しい。

「おおーっ！」

「うわっ、スゲエ……見たか、今の？」

「全然大した事無いじゃん」

「幼女鞭萌え」

「俺の方が強いって」

が……相変わらず、外野がうるさい。

近くに他のプレイヤーがいるから、そっちにタゲが分散してあんまり数を狩れないし。

もう少し離れてくれんなかな。

「シユウ、サクツと殺っちゃいますか？　まずは《毒花粉》で弱らせて」

「いやいや、更に状況を悪化させてどうする。まあ、もう少ししたら飽きるだろうから……たぶん、きつと……そうだったらいいなあ」

うーむ、どうするべ。

付いて来る事にデメリットがあれば、このパラッチ達もいなくなるんだろっけど。

「デメリット、デメリット………あつ」

「？」

そついやアレがこの近くにあつたな。

ちよつとだけ可哀想な気もするけど……。

まあ、これだけ嫌な思いをさせられたんだから、ちよつとした嫌がらせをしても罰は当たらないだろ。

「シユウにしては、なかなか卑劣な作戦ですね」

「だから、人の思考を読むなど何度……ま、慣れちゃったけど。で？ 反対なのか？」

まあ、こいつの性格を考えると有り得ないだろうけど。

案の定、アルは子供が見たら裸足で逃げ出しそうな顔でニヤリと笑

い。
「反対する理由は無い。やりたまえ」

「……………」

もはや、何処からツッコメばいいのやら。

反対じゃないんだつたら、別にいいんだけどさ。

ふう、到着つと。

微妙な沸き具合のMobを倒しながら歩いていると、ようやく目的地に着いた。

前に来た時と変わらず、疎らに木が生えているだけの何の変哲も無い草原が広がっている。

「アル、準備はいいか？」

「ひよっへーへふ」

赤い液体の入った小瓶を咥えながら、恐らく肯定だと思われる返事をする。

それを聞いて俺も、後ろの連中に気付かれない様に、こっそり鞆から赤ポを取り出し赤い液体を口に含む。

パパラッチ共、のこのこと着いてきた事を悔やむがいいさ。

「……………」

記憶が確かならココだった筈。

気合を入れ直し、1歩踏み出すと

「!?!」

一瞬で大量のMobが沸き、パパラッチと共に囲まれる。

しかし、2度目とはいえ、これだけの数のMobに囲まれるのはちよっとびびるものがあるな。

後ろの連中が騒がしいが、当然無視である。

『パパラッチ共に嫌がらせをしよう大作戦』の内容は、レオに嵌められた時の罠　モンスターパラダイス（仮）　を有効利用しようという、単純なものだ。

パパラッチの中に、この罠の情報を知っている者が1人でもいれば、成功しなかつただろう。

まあ、掲示板や攻略サイトでも出た事の無い情報なので、知らない可能性の方が高いと思い実行したのだけど……。

口に赤ポを含んだのは、1回目の回復を素早く出来るからだ。

先日掲示板で発見したのだが、赤ポは飲み込まない限り、口に含んだだけでは効果が発揮されない。

その事を利用して？と言っているのかわからないが、お酒を使ったアルコール消毒の様に、口に含んで吹き付ける行為が一部プレイヤーの間で流行っている様だ。

はつきり言って、映画や時代劇の見過ぎだ。

そんな事をするくらいなら、直接ぶつ掛けた方が速いし……。

まあ、男のロマンと言われれば、何も言えないんだけど。

多少見た事の無いMobも混じっているが、大半はストーンゴーレムやジャイアントフロッグ、ライカンスロープである。

決めていた通りに、出来るだけストーンゴーレムが多い場所を目指して走り出す。

走りながら後ろの方を見てみると、2、3人は俺の後ろに付いて来ようと走っているが、ほとんどのプレイヤーは目の前のMobの大

群にそれどころじゃないようだ。

「んーんっ!」

「んん」

アルの注意の声を聞き、前に向き直る。

しかし、口に飲み物を含んで走るのって、結構辛い物があるな。ストーンゴーレムを狙ったのは、動きが遅く身体が大きい為、そこが一番包囲網から抜け出し易い為だ。

「んっ! …… あ、飲んじやった」

ストーンゴーレムの陰から飛び出して来た、ライカンスロープの攻撃を受けた衝撃で思わず飲み込んでしまった。

まあ、ダメージを受けたので無駄になった訳じゃない。

少しだけ損した気分になったけど。

出来るだけ攻撃を避け、無理そうなものは剣で弾きながら進んでいくと、ようやく包囲網から抜け出せた。

少なくとも攻撃を受けたが、カナタさんの作ってくれた新装備のお陰で、大した被ダメージはなく赤ポ1本で十分だった。

「アル、あの木の向こうで」

「ひゃい」

皆まで言わずとも伝わった様だ。

てか、まだ赤ポ飲んでないって、どんだけ避けるの上手いんだよ…。

若干の敗北感に打ちひしがれながら、追い掛けてきたMobを迎え

撃つ為に振り返る。

付いて来ようとしたプレイヤーは、Mobのタゲを貰って足止めされてるのか姿が見えない。

「やっぱ、一番手は足の速い狼か」

十数匹のライカンスロープが、時間差で突っ込んで来た。

「アル、《悲鳴》を使って囲まれない様に」

「ひゅひへふ」

否定っぽい声が聞こえた気がするが、戦いながら目を向ける余裕は無い。

……あつ！ 口に赤ポ含んでたら、《悲鳴》使えないじゃん。
まあ、なんとか逃げ回ってもらおう。

『『『グオオオオオオオツ！！』『』』

「クツ……、よっ、ほっ」

前の時の様に、囲まれて呆気なく死亡という事は流石にないが、結構辛いものがある。

強引でもいいので攻撃を当て、とにかく数を減らす事を優先する。

「3匹目つと、ぬおっ」

3匹目のライカンスロープを《クレセント》で倒し終えた直後、すぐ傍に現れたストーンゴーレムに焦り、動きが止まった所を殴り飛ばされてしまった。

「クツ、もう追いついて来たのか……アルっ」

ストーンゴーレムを引き離す為に、場所を移動しようとアルを探す。おいおい。何、私は無関係ですみたいな顔をして、離れて観戦してるんだよ。

その後、なんとか移動を繰り返しながら、追いついて来る奴を着実に減らし倒し終えた。

まあ、半分くらいはパラッチに押し付けた形になったけど……。マシロさんの様に、群れの中突っ込んで蹴散らすような真似は出来ないのも、今回の方法を取った。

単純だが、Mobは種類によって移動速度が違う　ライカンスロップとストーンゴーレムだと特に顕著　ので、出来るだけ囲まれないように引き狩りするという方法だ。

今回の事で、パラッチがほぼいなくなった。

MPKだと掲示板で騒ぐのもいたが、「勝手に付いて行って、巻き込まれただけだろ」と擁護してくれる人が多く、あっさり鎮火した。ほぼなのは、やたらにしつこい情報屋が1人いる為だ。

上手く隠れているつもりだろうが、思いつきり顔が見えてるぞ、ポータ。

ちなみに、サボっていたアルは、餌抜きにしておいた。

次回からは、ちゃんと働いてくれる筈だ。

アルルーナ成長日誌

L V 3 4 H P : 1 0 8 7 S P : 2 0 6

S T R : 2 2 1 V I T : 2 7 0 I N T : 2 8 6 D E X : 9 5

A G I : 9 9

攻撃力：127 魔法攻撃力：152 防御力：184 魔法防御
力：169 敏捷度：102

【通常攻撃】「消費SP 無属性」

根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」

悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」

主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

【毒花粉】「消費SP18 土属性」

頭に生えている花から花粉を飛ばし、対象を猛毒状態にする。

5秒毎に現在HPの3%ダメージを与える。

愛情度：???? 「若干の黒さ」

満腹度：6% 「枯死寸前」

備考：

前前から思っていたのだが、飼主との関係性を表す筈の愛情度の状態表示が、俺に対する悪口にしが見えない……。
大体、『若干の黒さ』ってなんだよ。
俺が腹黒いとも言いたいのか。

1：GM

GMとはゲームマスターの略。

元々はTRPGのゲームマスターから来ている。

プレイヤー間の揉め事を解決したり、自分ではどうにもできないゲーム進行に関わるトラブルを解消するなど、ユーザーサポートが仕事である。

ゲーム内イベントの進行役をする事もある。

同じ人間がやっている事なので、不正 特定プレイヤーとの癒着等 が行われる事があるが、気にしているとゲームが楽しめない
ので無視する方が無難かも。

2：GMコール

GMをゲーム内で呼び出すシステム。

順番待ちする事もある。

3：ラグ

lagは遅延や遅れの意。

通信負荷などにより、画面がコマ送りみたいになったり、完全な静

止画になったりする事を表す。

「ラグった」「重い」「固まった」などと言う事が多い。

4：クレクレ君

他のプレイヤーにアイテムが欲しいと言うプレイヤー。

初心者が多いが、高レベルプレイヤーにも稀に……。

迷惑がる人も多いので、ほどほどに。

それと、貰えなくても悪態を付かないように。

5：引き狩り

本来は遠距離職（魔法や弓）で攻撃を受けないように、逃げながら攻撃をする行為。

慣れない内は、動きの遅いMobでやるいい。

ただ、広範囲を使つてやると、他のプレイヤーの迷惑になってしまうので、気を付けてやる事。

適当に逃げると、逃げた先にMobが居て殺されてしまうという間抜けな結果に……。

第20話

グロくて苦手だが経験値の良い、夜間のアンデット狩りを終えて街に戻った。

そろそろ朝食の時間なので、早くホームポイントでログアウトしようと、水晶玉の様なオブジェクトに手をかざすが、一向に何も起こらない。

「あれ？」

おかしいな、いつもなら一瞬でホームポイントに移動するのに……。何度も水晶玉の上で左右に手を振り、壊れてるのかと軽く叩いてみるが全く反応しない。

街の中だから、ログアウトしてもPKやMobに殺される事はないが、盗賊系のプレイヤーにアイテムを盗まれるのは遠慮したい。大人しくGMコールするかな、順番待ちで時間がかかりそうだけど。

「シユウ？ 先程から何をやってるんですか？」

「ん？ ああ、不具合でも起きたのか、ホームポイントに移動されないんだ」

「ほーむぽいんと……ですか？」

アルが、きょとんとした顔でこちらを見ている。

何を不思議そうな顔をしてるんだ？

まあ、そんな事よりも、他のプレイヤーもGMコールしてるだろう

から、早くしないとな。

飯の時間に遅れると、姉さんにゲームを禁止されてしまう。

「よくわかりませんが。そんな事よりも、早く宿に戻って休ませよう」

「は？」

宿って……何の為に行くんだ？

宿屋は、雰囲気作りの為に用意されたと思われる、全くと言っていい程利用されていない施設である。

数時間眠る事によりHPを回復してくれるが、宿泊には安くはないお金を取られるし、はつきり言って赤ポを飲んだ方が安上がりだ。

何より、ゲーム中は睡魔が襲ってこないで、寝ている間の時間が勿体無いのである。

ボケるのはいいが、今の様な非常事態には勘弁して欲しい。

とりあえず、ポケボケなアルは放置し、システムメニューを呼び出そうと左肩を右手で2回叩くが、

「あ、あれ？」

ウィンドウが出て来ない。

何かの間違いだと4回5回と繰り返すが、無反応だ。

「冗談だろ……GMコールも出来ないって、それにどうやってログアウトするんだよ……」

いやいや、餅つけ俺。

運営もプレイヤーの接続状態くらい把握してるだろうから、いつかは異常に気付く筈だ。

何より、何時までも起きて来なかったら、家族の誰かが 機械音痴の姉さんと、強引に動かして破壊してしまいそうだが 緊急停止ボタンを押してくれるだろう。

「ふう、テンパる必要なかったな」

それにしても、他のプレイヤーは大丈夫なんだろうか？

普段と変わらず雑談をしているが、もしかしてバグってんの俺だけか？

そうだとしたら、知り合いと連絡さえ取れば、代わりにGMコールしてもらっただけだ。

メールもWISも出来ないので、連絡の取り様がない。

「ただ待つのもだるいなあ」

「だから、早く宿に行きましょうよ」

当然の如くポケアルは無視し、手持ち無沙汰なので奉仕の果実でも食べようと鞆を開けて手をつ込むが、いつもの様な不思議な感触がする前に中身が手に当たった。

鞆までバグってるのかと覗いてみたら、中には干からびた肉やロブ、少し刃こぼれしているナイフ等が入っていた。

ナニコレ？ 干し肉って意外に美味しそう……じゃなくって、こんな物鞆に入れた覚えないし。

それ以前に、なんで普通の鞆みたいに底が見えてるの？

「は、はははは……これって本当の冒険者みたいじゃん……ははは、ははは」

人間、非常事態に遭遇すると思わず笑ってしまうと言うが、本当な

んだな。

……。

……。

…。

「という夢を見たんだ」

「アニキ……ゲームのし過ぎだよ」

妹から『何？この汚物』みたいな視線を受けつつ、食パンに噛り付く。

心温まる朝食時の一コマであった。

突然ではあるが、現在、スタートダッシュイベント真っ最中である。サービス開始直後にやらなくて、何故今更という気もしないでもないが……。

イベント内容を簡単に説明すると、イベントアイテム【悪魔の卵】のドロップと経験値2倍の2つで、期間は今日から1週間後のメンテナンスの時間まで。

悪魔の卵は、Mobを倒すと一定確率でドロップし、地面に投げ割ると色々なモノ、つまりアイテムが出て来るらしい。どんなアイテムが出て来るかは公式HPにも載ってなく不明で、イベントが始まったばかりなので情報もまだ出ていない。経験値2倍は、まあ読んで字の如くそのままだ。

「それにしても」

「欲望に忠実な人が多いですね」

「うぬう」

いや、ここに来ている時点で、人の事は言えないんだけどね。

時折聞こえてくる初心者プレイヤーの「狩場を荒らさないで下さい！」という叫びが胸に響く。

ゴブリンの草原、はつきり言って初心者用の狩り場であるが、今は高レベルプレイヤーが稲穂を刈るようにゴブリンを追いかけて倒している。

明らかに沸きが追いついていない。

店売りの初期防具で偽装しているつもりの様だが、やたらにごつかったり装飾の多い武器を持っていてはハッキリ言って台無しである。中には周りの視線など気にせず、普段の装備で堂々と狩っているプレイヤーもいるが、そういう強心臓の持ち主は極少数である。

悪魔の卵をより多く手に入れる為、とにかく数を狩ろうとここに来たのだろう。

みんな考える事は同じか……。

「アル、いつもの所に行くぞ」

「ここで狩らないんですか？」

「ああ。ここだと取り合いになって、逆に効率が悪いし。多分豚や死体の狩り場も、こことあんまり変わらないだろうからな」

まだレベルの低いプレイヤーには、今回のイベントっていい迷惑なんだろうな。

合掌。

爪を弾き。胴を薙ぎ。舌を斬り払い。頭を貫く。

受けきれない攻撃は飛び退き。体勢を立て直す前に斬り裂く。

装備やレベル、なにより戦闘への慣れからか、格段にMobを早く狩れるようになった。

まあ、行動パターンと倒し方を覚えれば誰でも出来るんだけどね……。

「おっ、卵ゲット」

「まだ投げないんですか？」

「そろそろ投げてみるか」

悪魔の卵。最初、どんな物が出るのかと2個投げてみたが、2000ユリルとラージヒールポーション1個という微妙な結果だった。

一気に大量に投げれば、1個くらいはレアが出るだろうという根拠のない考えから、1個ずつ投げるのを止め、とりあえずある程度まとまった数を貯める事にした。

自分の出した卵の中身のせいで、狩りに対する意欲が若干削がれたが、経験値2倍があった事を思い出したので、いつもの倍以上のペースでの狩りになった。

やっぱり、目に見えて経験値が増えればやる気が出る。

我ながら単純だと思うが。

悪魔の卵33個。2時間の狩りにしては中々の成果だと思う。

ドロップ率を知らないから、本当の所はわからないけど。

「んじゃ、投げるぞ」

「ほい」

近くにMobがないか見渡し、鞆から悪魔の卵を取り出す。

ちなみに、大層な名前が付いているが、見た目はただの黒い鶏卵である。

「……………」

「……………?」

ふと、ある考えが頭を過り、卵を割る為に振り上げた腕を下ろす。

「どうしました? 投げないんですか?」

「う、あ、ああ。いやな。そろそろ掲示板の方にも情報が出てるだろうから、それを見てからの方がいいかなーって思ってたな」

「……………」

うーむ。何やらアルの視線が冷たい。

「べ、別に、大した物が出ないんだったら、そのまま売った方が堅実に儲けられるんじゃないかとか、出た場合でも自分のリアルラックでは無理っぽいとか、考えたわけじゃないんだからな？」

「はあ……………」

俺から視線を外し、呆れたとでもいう顔でため息をつく。
どうやら更に機嫌を損ねた様だ。

「ど、どうした？」

「……………」

言葉にするのも億劫なのか、そつと視線を投げかけてきた。

俺は、再び出合った視線を逸らす事も出来ず、目は口ほどにものを言う、という諺が正しかった事を理解してしまう。

言葉には出ていないのに『このチキン野郎が！！』という声がどこからか聞こえてくるのだ。

ただの視線なのに、本日一番のダメージを受けた様な気がするのは何故だろう。

HPは減ってない……………よな？

あの後、何故か地味に減っていたHPを赤ポで回復しつつ街に戻り、情報収集の為にログアウトした。

「情報、情報つと」

さっそく某掲示板をチェックして見る。

ガセも多いだろうが、大体どんな物が出るかは分かるだろう。

「えーつと。んー、お金の場合は200ユリルに固定っばいな。赤ポに青ポにヒールクリスタルと、おっ！ テレポ石まで出るのか。後は、銅製の武器防具に鉱石に……えっ？ な、名持ち!？」

ま、マジデスカ？

流石に名持ちまでは出ないと思ったんだけど、サービス精神旺盛だな。運営は。

ただ、卵を高く売るために書き込まれた、ガセっていう可能性もある。

真偽は分からないけど、自分で拾った分は売らないで投げた方がいいかもしれない。

流石に、人から買ってまでは投げるつもりはないけど。

「他には、投げた場所に投げ方か」

Mobに攻撃されながら投げたら赤ポが出ただの、街の南側にある噴水の周りを時計回りに歩いてから投げたらテレポ石が出ただの、まあ、所謂ジंकクスって奴か。

ちなみに、気になる名持ちはと言うと、街中でリアルの名前を叫びながら投げたら出たというらしい。

「……多少期待したけど、これ見るとやっぱりネタっばいな。流石に、こんな釣りじゃ誰も本気にしてやらんだろう」

こんなの釣られて本当に実行したら、次の日からどこかその瞬

間からそいつは勇者決定だ。

まあ、街で人が来ないような所を探して、小声で言って投げる位ならやる奴も少しはいるかもしれない。

「取引掲示板は……っと、『卵産 ヒールクリスタル1個600Kで売ります。@3』か。ん？ 何故に相場の3倍？」

普通に考えたら、卵のせいで供給が増えるだろうから、値段は下げるべきだと思っただけ、訳がわからんな。

別に、卵から出たのも普通にドロップしたのも、同じヒールクリスタルだろうに。

それとも、卵から出たっただけで、付加価値が付いたとでも言いたいのかねえ。

「残りの卵関連は、『卵5Kで買います。@100』、『卵300Kで売ります。@24』、『買(卵 出)10K』だけか」

やっぱり、まだまだ卵の値段も安定しないよなあ。

中身の情報も少ないし、始まったばかりでイベント終了まで、まだ時間もあるし。

「もうしばらく様子を見た方がいいっばいな」

これからの情報次第だけど、もし投げるなら、最終日に貯め込んだのを一気に投げる事にしよう。

下手なジnkクスよりも、数打ちや当たる精神の方が確率が高そうだし、もし売らるなら、ドロップしなくなっただけの方が、プレミアムも付いて価値も上がるだろう。

イベント終了後に、しばらく時間を置いて売ってのもいいかも。

あっ……でも、その場合は、また同様のイベント告知が出る前に売

らないといけないから、見極めが難しいかもな。
ほんと、投げるのか売るのが、悩むなあ……。

アルルーナ成長日誌

LV38 HP:1209 SP:228

STR:248 VIT:304 INT:314 DEX:10
6 AGI:111

攻撃力:138 魔法攻撃力:172 防御力:202 魔法防
御力:188 敏捷度:112

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

【毒花粉】「消費SP18 土属性」
頭に生えている花から花粉を飛ばし、対象を猛毒状態にする。

5秒毎に現在HPの3%ダメージを与える。

愛情度：??? 「小胆」

満腹度：78% 「若干空腹」

備考：

もしかしたら、視線だけでダメージを与える《邪眼》スキルを修得しているかもしれない。

親父へんたいのみならず、徐々にはあるが妹いもうとの影響を受けている可能性が出て来た。

朝食時に受けたあの視線には妙に興ふ、ゴホゴホッ……、ど、どこまで予想外の進化を遂げるのかを想像すると、実に恐ろしい事である。

第21話

雲一つ無い空の下、俺は一体何をしているんだろう。

辺りは、見渡す限り草原が広がっており、所々思い出した様に疎らに木が生えている。

2週間近くも同じ狩り場に来続けているので、本日も代わり映えのしない、いつもの風景の筈のだが、

「シユウ君、たすけてー！」

「……ヘルプ」

なんでこんな事になったんだろう。

目の前では、2人の女性がライカンスロープ3体を引き連れ、木の周りをグルグルと走り逃がっている。

1時間ほど放置すればバターになれそうな勢いだったりするが、決して服を脱いで欲しいなどと思っている訳ではない。

ないはずだ。……多分。

「シユウ、ぼーっと見てないで、ちゃんとフォローしてください！」

私だけでは手に余ります」

アルの方を見てみると、ジャイアントフロッグ2体を鞭を使い上手く牽制しながら、2人を追っているライカンスロープに《悲鳴》を使い、逃走を援護している。

相変わらず器用な奴である。

って、のんきに見物している場合じゃなかったな。

「すみません、ミューさん。マチュアさん。今行きます」

半ば無意識で戦っていたジャイアントフロッグにさっさと止めを刺し、2人を助けるべく駆け出す。

しつこい様だが、本当に、なーんでこんな事になったんだろなあ。

「類は友を呼ぶですよ」

自分もその中に入ってるっていう、自覚はないのか？ アルよ。

ホームポイントから外に出ると、抜けるような青空が目に入ってきた。

絶好の狩り日和である。

まあ、現在、天気は晴れしかないのだから、毎日狩り日和なんだけど。

「いつもの場所に行くぞ」

「楽に狩れるのはいいのですが、正直飽き飽きです」

今日もいつもの通り、ストーンゴーレムの狩り場に行くのだが、そろそろ狩り場の適正レベルから外れるので、近々卒業予定である。しかし、いつも思うのだが、この無駄に広い街は中々に不便だ。

ホームポイントから各門まで行くのに、歩きだと20分近く掛かってしまうのだ。

当然の事だが、その分狩りの時間が減ってしまう。

プレイヤー数を考えると、収容する為にこの広さもしようがないの

かもしれないけど、夏休みが終わりゲーム時間の確保が難しくなる
までには、なんとか改善して欲しいものである。

「物欲しそうに屋台を見ても、何も買わんぞ」

「相変わらずの渋ちんですね」

「悪かったな」

全体的に相場が下がっているので収入が減り、少しでもお金は貯め
ておきたいのだ。

そうこうしている内に、ようやく西門に着いた。

そして、狩り場に向かう為に西門から出よう、と？

「ふむ、アル君。あの人は、一体何してるんだと思うかね？」

「さあ？ 私に聞かれましたも……痴話喧嘩とかじゃないんですか
？」

「いや、流石にそれは無いと思うが」

すんなり通過する筈であった西門の所で、女性2人組が何やら怪し
げに会話をしている。

まあ、自分には関係のない事だから、素通りすればいいだけの事だ。
念の為に、

「からまれない様に目を合わせるなよ。気配を無にするんだ」

「野生の猿じゃないんですから」

只でさえ、騒がしい身の上なので、これ以上の厄介事は勘弁してもらいたいのだ。

本当に勘弁して欲しかったのだが、

「あつ、その君。ちょっといいかな？」

俺じゃないよね？ うん。そうに違いない。

若干の希望を胸に辺りを見まわすが、その2人組以外には自分達しかいない。

まるで、おかしい呪いが掛けられてるかの様に、トラブルが沸いてくる。

「そのキョロキョロしてる君だよ」

と、2人組が近付いてきた。

とんかつ……、もとい、カツアゲじゃないといいなあ。

我ながら実にさむい。

「えつと、なんでしよう？」

「私はミューって言うの。で、こっちはマチュアね」

と、徐に自己紹介を始めたのだが、どうしろと？

そこで初めて2人の姿を間近で確認する事になった。

ミューさんは、腰まで届きそうな髪を無造作に背中に流して、特徴的な大きな瞳が少し垂れているからか、どこか優しげな印象である。

一言で言うと、お姉さん？ てか、お姉さま？って感じかな。

富の偏在を思わせるその体付きは、いたいけな青少年には目の毒であり、いつかのバトルドレスを着ると同性を除けば、デュエルで敵

無しになりそうな勢いだ。

最後に、悲しい事だが、俺よりも頭一つ分背が高かったりする。

「ヨロシク」

続いてもう一人のマチュアさんは、なんと言えばいいだろう？

涼しげな目元といい。無表情なのが、ちょっと怖いかも。

ミューさんと比べると正反対な容姿をしていて、スレンダーな体形に皮装備が、ばっちり嵌ってたりする。

で、である……、ミューさんよりも少し身長は低いのだが、俺よりは高かったりする。

ま、まだ成長期なんだ。すぐに追いぬいて見せるよ。きっと。

年齢は、ミューさん同様、クリスマスを過ぎてしまった位だと思われる。怖くて本人には聞けないが。

それにしても、2人とタイプは違うが、かなり綺麗である。

本当にリアルの姿が反映されてるのだろうか？と疑いたくなるほど知り合う女性は美女揃いだ。

変な所で運がいいのかもしれない。

リアルで女っ気の無い反動だろうか？

「は、はぁ……、どうもです」

話を聞くと、普段は俺も籠もっていた経験のある豚＋死体狩り場で狩っていたそうなのだが、イベントのせいでというか、狩り場荒らしプレイヤーのせいで、追い出されてしまったとの事だ。

となると、1つ上の狩り場に行くしかないのだが、候補はアンデッ

ト系Mob満載のダンジョン【死霊の塔】とストーンゴーレム地帯の2択しかない。

死霊の塔は、沸きが良いすぎて大人数のPTなら美味しいのだが、流石にコンビではつらく、自然と行き先はストーンゴーレム地帯になってしまう。

適正レベルではあるのだがぎりぎりだし、2人とも初めて狩り場にコンビでっていうのは、ちょっと不安との事で、広場で面子を1人見つけ、早速狩り場に向かおうとした所、知り合いからPTのお誘いWISが来たとかで、あっさり抜けて行ってしまったそうだ。

そして、どうしようかと話し合っている所に、俺様登場といった展開になったようだ。

ちなみに、2人とも職業？は盾持ちの剣士である。

余談ではあるが、俺も死霊の塔は行った事がなかったりする。

というか、ダンジョンってクエストで行った亜人の巣窟以外行っていないな。

ダンジョンは基本的に沸きがいいので、ソロでは辛いからしょうがないのだけど、いつかは行ってみたいものだ。

「そつえば、名前聞いてなかったね」

散々喋っておいて、今更かと少しツッコミたくなる。

ほんのりと天然が入っているのだろう。

「あ、えっと。シュウって言います。呼び捨てでもいいですし、好きに呼んで下さい」

「じゃあ、私は、シユウ君って呼ぶね。って、シユウくん？ ん？
シユウって、ファイアドレイク倒したってアナウンスが流れた？」

「……っ!？」

ミユーさんって、第1印象では”まったりとした大人しめのお姉さん”って感じだったのだが、中々に慌ただしい性格のようだ。
オーバーリアクションで、ド派手に驚きを表している。

ついでに、表情に余り変化が無いのでわかり難いが、マチユアさんも驚いている様だ。

「はい、悲しい事にそのシユウです」

「という事は、ひょっとして、そこにいるのって噂のアルちゃんじゃない？」

「噂のって言うのはよくわかりませんが、使い魔のアルです」

「アルルーナです。好きな呼び名で呼んで下さい」

珍しくまともな受け答えをしている。

槍が降らなければいいが。

「それにしても、噂のって一体どんな噂なんですか？」

「えっと、確か、シユウ君に囚われた花の妖精で、夜な夜な良からぬ事をされてるって」

いや、嬉しげに言われても困るのですが。

どっちかって言うと、こっちが弄ばれている感じだし。

「思いっきり誤報です」

「うん。でも、シユウ君って、そういう事に興味津々のお年頃だし。ねえ?」

「ククク
……………」

そこで同意を求めないで下さい。

って、マチユアさん。あっさりと言で領かないですよ。からかっているのだろうが、一応誤解は解かなくては、巡り巡ってマシロさんの耳に入っては大変である。

「だから、あくまでも噂で、誤解なんですよ」

「そうです!」

「あ、アル?」「アルちゃん?」「?」

おお、誤解を解いてくれるのか。

普段は本当に使い魔か?って思うような行動や言動しかないけど、忠誠心を疑ってごめんよ。

後で、蜂蜜酒を買って上げるからね。

「シユウは、シユウは……………只、鞭で打って、悲鳴を上げろって命令するだけです」

うん。すまない。なんか、そんな予感はしていたんだ。

君にそっち方面の忠誠心を期待した俺が馬鹿だった。

そつだよ。馬鹿だつたよ、こんちくしょう!!

「「な、なんて」「

ち、違うんです、ミューさん。マチュアさん。

「羨ましい事を」

「酷い事、を?」「は?」「へ?」

ぽかーんだ。絵に描いたような、ぽかーんだよ。

啞然を広辞苑で引いたら、普通に載つてそつな勢いだ。

マチュアさんが、異世界の住人だつたとは。

「あつ……」

今更ながらに自分の発言が、カミングアウト以外の何物でもない事に気付いたのか、マチュアさんは、ほおを赤らめて固まつてしまつた。

先程の発言を忘れさえすれば、大変可愛らしい姿なのであるが、人間そんなに都合よく記憶の改竄は出来ないのである。

擦つた揉んだの末、なんとか誤解は解けたのだが、同時にPTに入る事が決定していた。

押しに弱いな、俺。年上の女性相手だと特に。

そつして、冒頭に戻り、現在に至る。

「えつとですねえ。普段はどういう狩り方してるんですか？」

ソロでも楽勝の為、特に不安に思う事も無く狩り場に来たのだが、冒頭のような事になってしまった。

ひよつとして、Mobの情報とか調べないで狩り場に行こうとしてたとか？

流石にそれはないか。

「んー、みんなで1匹ずつ囲んで一斉攻撃って感じかな？ そうだよね？」

「コクコク
……………」

ま、マジデスか？

その狩り方って、全くプレイヤースキルが育たないような。

正直、そんな狩り方したら、ストーンゴーレム1匹で全滅しそうで怖すぎ。

「Mobに攻撃パターンがあるって事は知ってますよね？」

「うんうん」
「コクコク
……………」

よかった。流石にこれは知っていたか。

というか、攻撃パターンを覚えての狩りって基本の筈なだけどな、攻略サイトどころか公式HPのよくある質問のコーナーにも載ってるし。

「ソロオンリーなので、PTでの動きっていうのはわからないんですけど、各Mobに対応した狩り方さえ覚えたら、グッと狩りの効

率も上がりますよ。赤ポの節約にもなりますし、覚えて損は無いです
思います」

「ふむふむ」
フムフム

なんか、そこまで真剣に聞かれても逆に困るのだが。
第三者から見ると、なに当たり前の事を偉そうに言ってるんだ？
て感じに見られそうで、嫌過ぎる。

「今から戻って攻略サイト見るのは、結構時間掛かるし……。この
狩り場は3種類しか沸かないので、狩りながら教えた方が早いと思
うんですけど、どうします？」

「シユウ先生。お願いしまーす」

「コクコク
……………」

即答ですか。

いや、まあ、うん。いいんだけどね。

只、マチュアさん、少しは声を出してください。

無言、無表情は受けるプレッシャーがきついです。

パーリングダガーを鞆に入れて、代わりに戦略的撤退用の盾を取り
出し左手に装備する。
エスケープくん

2人とも盾持ちだし、同じスタイルの方がわかり易いだろう。

「じゃあ、ストーンゴーレムの攻略方法から実演しますね」

「シユウ君、頑張ってください」

「がんばれー」

「じろじろ」

何故かアルも一緒にになり、擬態語を使ってまで見学をアピールしているが、ツツコミを入れたら負けの様な気がするので、敢えてそこは無視をする。

気持ちを切り替えて、弟子達？の熱い視線を受けながら、のそのそと俺の方に近づいて来る教材君1号ストーンゴーレムに向かって歩く。

「えーっと、まず、ストーンゴーレムは、一定距離まで近づくとつと」

毎度御馴染みとなった振り下ろし攻撃を飛び退き避けると、攻撃後の硬直時間を使って解説を続ける。

「こんな感じに両手を使った振り下ろし攻撃をしてくるんです。この攻撃をした後は、必ず硬直時間が発生するので、その間に攻撃します」

話している間に硬直が解けたので、再び近付いて振り下ろし攻撃を誘い避ける。

そして、何時もの様に後ろに廻り込まず、胸の辺りを一度だけ斬りつける。

「こういう風に前から攻撃してもいいですが……」

そこで言葉を止め、これから来るであろう攻撃に備えて盾を構えた直後、重い衝撃を受け3m程後方に弾き飛ばされた。

ストーンゴーレムは、その鈍重さと引き換えになのか、このレベル帯では考えられない攻撃力を誇っている為、若干ではあるが防御をダメージが突き抜けて来た。

おいおい、完璧に盾でガードしたのに突き抜けるって、普段は美味しい雑魚扱いしてたけど、改めて考えると結構怖い奴だな。

ちなみに今受けた攻撃は、振り下ろし攻撃の硬直後、前方の近距離にプレイヤーがいるとしてくる、バンザイ攻撃である。

ただ両手を振り上げるだけで正にバンザイなのだが、ストーンゴーレムの攻撃の中で一番ダメージが大きく、おまけに普段からは考えられないほどに動きが速い、恐ろしい攻撃なのだ。

「この様に痛い目に遭いますので、無難に後ろに廻り込んで攻撃するのが勧めです」

「……」

俺も初めて見た時は、かなり驚いた経験がある。

攻略サイトなどの情報から知ってはいたが、百聞は一見に如かずである。

バンザイ攻撃の恐ろしさは、文字だけでは伝え切れないのだ。

名前がマヌケな分、余計に……。

事実、振り返ってみると3人とも目を丸くしていた。

いやいや、アル君。何故君まで驚いているんだ。

「アル、お前は何度か見てるだろ？」

「はい。ただ、1人だけ驚かないのもなんですので、合わせてみま

した」

「さいですか……、んじゃ、まあ、続けますね」

相変わらずの高性能である。無駄にはあるが。

いつもの事なので横に置いておき、今度は飛び退きから後ろに廻り込む。

《ステイング》を叩き込み、タイミングを計りしやがみ込む。

そして、頭上を腕が通りすぎた後立ち上がり、胴を斬りつけてから後ろに下がる。

「後ろに廻りこんだ場合は、裏拳の前後が攻撃のチャンスです。ただ、裏拳の硬直後はバンザイ攻撃が来るので、長々と攻撃しないで一旦距離を取って下さいね？」

「はい」「了解です」「……偉そうに」

一部適切でない返事があつた気がするが、我慢をする。

ああ、もちろん、お仕置きまでは我慢するつもりはない。

本日は飯抜き決定。

「あとは、もう一度最初から繰り返すだけで倒せます。ストーンゴレムの攻撃は、振り下ろしとバンザイと裏拳だけなので、落ちて着いてさえいればソロでも十分狩れます。もちろん、沸きの良い場所だと、他に沸いた奴の足止め役も要りますけど、ね！」

話を続けながらも、役目を終えた教材君1号に止めを刺す。

それにしても、慣れない事をしながらだと精神的に疲れるなあ。

てか、正直、もう勘弁して欲しい。

その後、ライカンスロープ教材君2号とジャイアントフロツゲ教材君3号の倒し方 ストーンゴーレムほど明確な弱点は無いので苦労したが も説明し終わり、忘れないうちに即チャレンジである。

流石に、いきなり上手くはいかなかったが、2時間の狩りを終える頃には、なんとか2人だけでも狩れる様になった。

ライカンスロープとジャイアントフロツグには多少赤ポを使っていたが、ストーンゴーレム相手なら2人ともノーダメで倒せるようになったので、俺が抜かされる日はそう遠くないだろう。

無事に狩りを終え街に戻り、とりあえず各ドロップ品を分ける。余り通常ドロップは良くなかったが、まったりしていた割りに卵が13個落ちたので、まずまずである。

「卵が1個余りますね……。ジャンケンで決めましょうか？」

正直、卵1個の為に相場調べてお金で分配つても面倒だしな。こそこそと2人が話し合っているが、なんたる？ も、もしか、ジャンケンで何を出すかの相談！？

「な、なんか問題でも？ あっ！ くじ引きの方がよかったですか？」

「うっん。そうじゃなくて、今日は色々面倒を掛けちゃったから、それはシユウ君が貰っておいてよ。家庭教師料としては、ちよっと安いけどね」

ミユーさん笑顔が眩し過ぎます。モテナイ君には、目に毒の領域に突入してますですよ。

しかし、出会った当初はどうなる事かと思っただが、この笑顔が見れただけで中々に幸運な1日だったかもしれん。

「受けとって、感謝の気持ち」

マチユアさんは……、なんと言うか、その無表情さに慣れが生じてきましたよ。

不思議発言と合わせて、異世界の住人認定。

「じゃあ、ありがたく頂戴しますね」

「ぶどぶど」

と、ミユーさんから卵を受け取るうとしたのだが、横から何かに掠め取られてしまった。

泥棒か!?!と見てみると、そこにはアルが……。

いや、なんとなくわかってたけどさ。そこは期待を裏切ろうよ。

「アル。何をす」「お代官様、これを……」「」

「「はい?」「」

どこでスイッチが入ったんだろう?

ミユーさんを見ると突然の事で吃驚しているが、マチユアさんは何

故かヤラレタと言わんばかりの悔しげな顔をしている。
よくわからないが何かの勝負があったようだ。

「お代官様好物の山吹色のお菓子にございます」

ここは乗った方がいいのか。

それとも無難にツツコミを入れるべきだろうか。

助けを求めてミューさんを見るが、さっと目を逸らしてしまった。
自然と目に入ってしまったマチュアさんは、無言で頷いている。

ゴーサインか？ それはゴーサインなのか？？

「ん、っん。ごほん。……越後屋、おぬしも悪よのう」

定番の台詞と共に、アルから卵を受け取る。

俺の選択は、間違ってたんだらうか？

「いえいえ、お代官様には敵いません」

「あっはっはっはっは」

っ、ツツコミが来ない。

ま、まずい。ツツコミポケオンリーがないという事が、どれほど危険かと言う
事を忘れていた。

一縷の望みを胸に、先程の様子からツツコミを入れてくれそうなマ
チュアさんを探したが、まるで障子越しに会話を聞いているかの様
なポーズトリプルボケをしている姿を発見してしまった。

もはや異次元空間。

アルと馬鹿笑いをしつつ、最後の希望とばかりにミューさんを探す
が。

い、いない。やはり、救世主ツツコミはこの世にいないのか？

と、諦めかけたその時、後頭部に待ち望んでいた衝撃が走った。

「大岡越前かつー!!」

みゆ、ミューさん。……番組が違います。

「あつ、そつだ！ 早速、卵投げてみようか」

どこか虚ろな笑顔でミューさんが提案をした。

思いの外、ダメージは大きかった様だ。

結論、人間慣れない事はするべきではない。

「そ、そうですね」

余り気は進まないが、先程のピンチを救ってくれたお礼もある。

まあ、5個だけだし、いいだろ。

「じゃあ、私から投げるね」

まずは言い出しっぺからとばかりに、ミューさんが鞆から卵を取り出した。

「ミュー、がんばれー」

何処から取り出したのか、マチユアさんが小さな旗を振って応援している。

な、何故にバングラディッシュ？

「ではでは、1個目ー！ おっ、テレポ石だ。ラッキー。幸先いかも。続いて2個目ー！ しくしく、200えーん。負けずに3個目ー！ ヒールクリスタル びみよー、赤石かー」

サクサク投げるなあ。

見た目に反して、男前な性格なのかもしれない。

「テレポ石も赤石も、卵のせいでちょっと相場下がってますけど、中々いい感じじゃないですか」

「そかな？」

「少なくとも、前回のシュウよりは断然マシな結果ですよ。ミュー」

「悪かったな。残り、ラストどうぞ」

「んじゃ、ラストワーン！」

止めの一撃とばかりに卵を地面に叩きつけると、

「ぬおっ！？」「きゃっ」「……っ！？」「」

ミューさんを中心とした光の柱が立ち昇り、それが消えると共に紙ふぶきが降って来た。

これが掲示板で騒がれてた”当たり”か。

当たりは総じてレアアイテムが出るらしいけど、ミューさんのは何だろ？

「指輪？」

「指輪ですね」

「指輪以外の何物でもないですね」

「……鼻輪かも」

「「それはないからっ！」「」

アルにまでツッコミを入れさせるとは、マチュアさん侮りがたし。綺麗な紫色の宝石が真中にちょこんと鎮座した指輪だ。素材は恐らく銀製で、彫金はされてなくかなりシンプルである。

「ひょっとして名持ちですか？」

「うん。違うみたい……、えーと、アイテム名は【浄化の指輪】で……、効果は、……」

「「効果は？」」

浄化って言うくらいだから、ステータス異常無効とか？ 回復？ もしくは、アンデット系Mobに追加ダメージ？ どちらにしても、中々の良品っぽい。

「お酒に酔わなくなる」

ん？ 聞き間違いかな？

「えっ？ もう一回お願いします」

「装備したら、お酒に酔わなくなるんですって……はあ」

そうですか。アルコールを浄化ですか。
まあ、なんと言うか……、ドンマイ？

残り2人結果は、

マチュアさん：金鉱石 鉄製のブロードソード 青銅製のスケイル
アーマー スモールヒールポーション
俺：200ユリル ミドルヒールポーション 銅鉱石 はずれ×2

以上である。

2人はお礼の言葉を残し、去って行^{ログアウト}った。

アルにそつと肩を叩かれた時に泣きそうになったのは、ここだけの秘密である。

好感度の上昇により、飯抜きは勘弁してあげた。

てか、リアルラック皆無だな、俺……。

やっぱり、卵は投げずに売った方がよさげだに。

LV38 HP:1209 SP:228

STR:248 VIT:304 INT:314 DEX:10

6 AGI:111

攻撃力:138 魔法攻撃力:172 防御力:202 魔法防御
力:188 敏捷度:112

【通常攻撃】「消費SP 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費SP5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費SP パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。
奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

【毒花粉】「消費SP18 土属性」
頭に生えている花から花粉を飛ばし、対象を猛毒状態にする。
5秒毎に現在HPの3%ダメージを与える。

愛情度:???' 「薄幸の……少年」

満腹度:100% 「満腹」

備考:

どこかマチユアさんを意識している様で、普段より2割程パワーが増している。

キャラ被りを警戒しているのだろうか？
方向性が違うので、杞憂だと思っが……。

第22話

久しぶりのまったり、のんびり優雅な午後である。

これからの事を考えるでもなく、道行くプレイヤー達をぼんやり眺めながら、カフェテラスでコーヒーを啜る。

もちろん、ブラックなんかで飲める筈もなく、ミルクと砂糖は標準装備だ。

アルはというと、隣りの椅子に座って、のほほんと使い魔用ドリンクを飲んでいる。

そろそろ人間ウォッチングにも飽きてきたので、せつかくログインしているのだから、とりあえず幻夢の事について何か面白い事がないかと思ひ浮かべる。

先ず最初に、ここ最近の自分の行動を振り返ってみると、

「俺らしくないな……まったく」

幻夢を始めた直後は、いつも通りのプレイスタイルだった気もする。自分から知り合いを作ろうとせず、ソロでのプレイしか考えていなかった。

しかし、いつのまにかフレンドリストには7人も名前が登録されている。

俺の情報を売って稼いでいたポータはおろか、明らかに敵対関係っぽいレオの名前までが何故か登録されていたりする。

今までのゲームでは考えられなかった事だ。

妙にリアルについて聞いてくるプレイヤーに引いてしまったり、やたらと性別に拘るプレイヤーを敬遠してしまったりと、同じゲームをやっているリアルの友人以外とはフレンド登録など滅多にした事はなかった。

他のプレイヤーに上手く話しかける事が出来ず、狩り場が被って野

良PTを組む事になっても効率重視の無言PTで、とても仲良く
なれる雰囲気にならなかった……毎回そうだったわけじゃないけど。
せっかくのMMORPGなのだから、もっと人当たりのいい人間を
ロールプレイすれば良かった。

どうせ、リアルではどんな人間なのかわからないのだから、普段と
は違った自分を演じたらもっとゲームを楽しめた筈だ。

嫌われたとしても本当の自分じゃないと言い訳出来たのだから。

あー、何が言いたいのかと言うと、頭の中や家族、ゲーム仲間以外
には縮こまってしまって、素の自分を出す事が出来なかったのに、
幻夢では思いつきり素の自分でプレイしてしまっている。

まあ、相変わらずのソロプレイなのは悲しいところなのだが……。
カナタさんやマシロさん、レオにネイスさんにポータ、ミューさん
にマチュアさん。

どの出会いも、もちろん緊張はあった。

しかし、アルを交えての交渉、突然のアルのボケにツッコミを入れ
たりしている内に、自然と緊張なく会話を成立させている自分がい
た。

やっぱり、

「アルのおかげか、な」

って、何を言っちゃってるんだ俺はっ!!

むう……、なんか物凄く恥ずかしい事を考えていた気がする。

しかも、ちらちらと見ていたのに気付いたのか、アルがこちらを不
思議そうに見ているし。

い、いかん。何か話して誤魔化さねば!

「あー、い、今の仕事って月にいくら貰ってるんだ?」

って、何言っちゃってるんだ。

いくら話題がないとはいえ、俺は親戚のオッサンかつ！
それ以前にAIなんか聞いてどうするよ……。

「え〜と、手取りで大体84万え、んっ!？」

「へえー、結構貰ってるん……えっ!？」

聞き間違いじゃないよね？ よね？ よね？
84万ってどんだけ高給取やねんっ!!

「「……………」」

じゃなくって!!

「ま、前々から、怪しい怪しいとは思っていたが、お、おまえ」

「ナ、ナニイテルデスカ？ ユウエンチノマスコットノナカニ、ヒ
トナンテイナイデスヨ！ サンタサンハ、オトウサンナンカジャナ
イ、デス、ヨ？ …………… アハハ、ハ………… ハハ」

いや、動揺し過ぎで思いつきり片言になってるから。

しかし、使い魔AI。

やけに人間臭いとは思ってはいたが、こんな裏があったとは……。

……………。

……………。

…。

「で、リアルの性別と年齢、住所を聞き出そうとしたところで、目が覚めちゃったんだ」

「四季。……”ウメボシ”と”ゾウキン”どちらがいいかしら？」

輝かんばかりの姉^{かあ}さんの笑顔と共に、魔の二択が突き付けられた。素敵な朝食時の一コマであった。

「ぬ、ぬう……、まだこめかみが痛いような……」

「大丈夫ですか？ シュウ」

ログイン後にまで痛みを継続させるとは、流石は姉^{かあ}さんである。

イベント中、経験値2倍と悪魔の卵というエサに釣られて 食事と風呂以外 ほぼ全ての時間を狩りに注ぎ込んだせいか、萌え…

…燃え尽き気味な、今日この頃。

ストレス解消や楽しむ為のゲームをやって、逆に疲労をためるっていうのは激しく間違ってる気もしないでもない。

まあ、それでもログインするのを止められず、こつして当てもなく街をぶらついている俺は、間違はなく重症^{ゲーフラタ}なんだろう。

「ああ、なんとか大丈夫だ。それより、そろそろ飯でも食うべ」

「そうですね」

残念ながら、まだプレイヤーの料理屋などがない　広場にまで行けば、露天で屋台っぽく生産品を売ってるが　現状では、NPCのレストランしかないのです、どこに入っても味もメニューも同じである。

「俺は……いつものにするか、アルは何にする？」

「水晶ソーダを一つお願いします」

この水晶ソーダ、地味に狂的……もとい強敵だ。名前に水晶と付いてはいるが、当然の事ながら本物の水晶が入っているわけではない。

まあ、そんな飲み物高過ぎて絶対買わないが……。ちなみに主なというか、唯一の材料はスライムがドロップするスライムゼリーである。

スライムには、嫌な記憶を思い起こさせられるので、苦手意識があったりなかったり。

ソーダと言うのも、製造過程でどうしても出来るのか、炭酸飲料の様な小さな泡がたくさん見られる為、それっぽいという理由で安易に付けたとしか思えない。

もちろん、本物の炭酸飲料の様に泡が動くななんて事はなく、静止したままだ。

口当たりはねっとりしててのどに張り付き、味は薄っすらと甘み

が付いている程度。

まあ、そのなんだ……既に経験済みだったりするんだ。はじめて店に入った時に、ソーダと言う名前に惹かれてあっさり頼んでしまったんだよ。

完全に頭の中ではソーダのつもりだったから、一気に口に入れたせいで死の危険を感じたさ。ふふふふ。

「そ、そうか。じゃあ、タルタルステーキ一つと水晶ソーダ一つを」

『では、ご注文を繰り返させていただきます。タルタルステーキをお一つと水晶ソーダをお一つでよろしいですか？』

こんな注文の確認は本来なら聞き流す所だが、そんなプレイヤーの気の緩みを上手くついたトラップだったりする。

途中で了承の返事をすれば省略出来るのだが、そうするプレイヤーは現在ではかなり少ない筈だ。

というのもこのNPCのウェイター、それほど高い確率ではないが、どの店でも注文の聞き間違いをしゃがるのだっ！

上記は、すでに4回も被害にあったマシロさん。あの男気溢れる性格のせいか、何度被害にあっても毎回確認は省略するそうだ

からの情報で、某掲示板では開発チームの悪意の詰まった悪ふざけとしか思えない仕様との噂もあったりする。

某掲示板情報なので真偽は謎なのであるが、実際にマシロさんがバグ報告のメールを出しても、修正するどころかメールを返信すらして来ないので、噂は真実なのだろうと思われる。

悲しい事だが……。

「はい」

『かしこまりました。少々お待ち下さい』

「やっぱり美味しいな」

ゲーム内なので生肉でも食中毒の危険がない為に、安心して食べられるのも美味しさの要素になってるのかも。

「ええ、このマツタリ感がなんとも」

「いや、そっちはどうでもいいから……」

マジでゲテモノ料理は勘弁して欲しい。

まあ、例え材料にゾンビの目玉やオークの心臓を使っていたとしても、所詮はデータに過ぎないので気にせず食べればいいだけの話なのだが、余程図太くない人間じゃないとスルー出来ない事だったりする。

かくいう俺も、普段食べているNPCレストランの料理に、これらの食材を使用している事が判明したその日、店の全メニューの使用食材をNPCのコックから聞き出したのは懐かしい思い出である。ちなみに、調査の結果、この店にある30種類のメニューの中で安全な料理は6種類だけだった。

しかも、狙ったかの様に高額ベスト6。

「情報を制する者は世界を制す。くつくつく、見ろ、あいつ。オークの耳を美味そうに食ってやがる」

うわ。あっちの女の子、腐肉の入ったハンバーグを……な、何故か

微妙に興奮……。

いやいや、変なものに目覚めてはダメだ。がんばれ、俺っ！

「シユウも美味しそうに食べてましたけどね」

「ぬっ！？ せつかく人が無かった事にしてるんだから、思い出させるなよ……」

脳裏を過った味を忘れるべく、タルタルステーキを口に入れる。

絶対に俺は、オークの耳が入ったスープを美味い美味いと飲んだ覚えはないぞ。

こりこりとした歯応えが良かったなんて、

「あつ、シユウ君じゃないか、アルちゃんも久しぶりだね」

「……………」

「お久しぶりです、カナタ」

腐肉の入ったハンバーグなんてもってのほかだ。
肉汁が溢れてきてジューシーだったなんて、

「シユウ君？ おーい」

「……………」

ましてや、ゴブリンの指が入ったカレーライスなんて、

「カナタ。多分聞こえてないですよ」

「そうか、しょうがないな。……シュ・ウ・く・ん!!」
な、なんか、身体が揺れてる。
地震か? って、

「へ? ぬわっ! カナタさん?」

突然身体が揺さぶられたと思ったら、目の前にカナタさんが出現して吃驚仰天である。

どうやら、思考がダークサイドに落ちかけていたので気付かなかったが、カナタさんに話し掛けられていた様だ。

「やあ。久しぶりだね。相席させてもらってもいいかな?」

「は、はい。どうぞどうぞ」

「じゃあ、失礼するよ」

と何事もなかったように向かい側に座る。

そういえば、他のプレイヤーと一緒に食事するのは初めてだな。

「シュウ君はタルタルで、アルちゃんは……っ!? 水晶ソーダか
!」

どうやらカナタさんも経験者のようだ。

もしかしたら、誰しもが通る青春の1ページなのかもしれない。
嫌過ぎるが……。

「カナタさんも飲んだ事があるんですか?」

「ああ。cの時にねえ」

どこか遠い目で話すカナタさん。気持ちはわかる。

サラマンダーの怒りほど強烈ではないが、結局は同じお花畑直行コースだったりするので、ふと現物を目にした時に封印した記憶が一気に蘇えるのだ。

「2人とも、そんな嫌そうな顔をして、お店に失礼ですよ。こーんなに美味しいのに」

「それってお前だけだから」

「うん。正直、僕もシュウ君の意見の方に賛同させてもらおうよ」

本当に美味しそうに水晶ソーダに口をつけているアルを見ると、ふつふつと殺意が湧いて来る気がするが、それ以上に、あの強力な粘性を持つ半固体をどう飲み込んでいるのかが、かなり疑問である。当然の事ながら、疑問が解消された所で2度と飲む気はない。

「そういえば、カナタさんって料理の材料に気を付けてます？」

必要以上に何故か声を潜めてしまった。

まあ、他のプレイヤーに聞かれたところでこっちに不利益などないのだが、タダで情報を提供するのには癪だったりする。我ながらせこい気もするが。

「おつ、流石だね。タルタルを選んだのは、やっぱり偶然じゃなかったのか」

「ええ、しばらくは知らずに食べてましたけどね」

「攻略サイトにも敢えて載せてないようだから、気付いてる人は少ないと思うよ。調理スキル上げている人は滅多にいないみたいだし、ま、世の中には知らない方が幸せな事があるんだと改めて知ったね、僕も」

もう食べ終わって帰ったようだが、腐肉入りハンバーグを食べていた女の子なんて、もしも知ってしまったら物凄いショックを受けるのは確実だろう。

やはり、ニヤニヤ観察していたのは間違いではなかった。人として間違ってる気はするけど。

「じゃ、いい加減、僕も注文しようかな」

そう言ってテーブルの端に置かれたベルをカナタさんが鳴らした。そっぴや食べ終わってないのに結構話し込んだな。

まあ、冷めたりする料理じゃないから良かったけど。

『いらっしやいませ。こちらが当店のメニューとなります』

ベルで呼ばれたNPCのウェイターが、水をテーブルに置くと共にメニューをカナタさんに差出す。

何注文するんだろ。

まあ、ゲテモノを避けると6品しかないから予想は付くけどな。

「じゃあ、スパイシーカツレツを1つ」

「えっ!?!」

思いつきりゲテモノですけど!?!

ん？ いや、まあ、リアルでもある食材だからいいのか？

「どうかしたかい？」

「い、いえ。なんでもないです」

きつと好きなんだろう。

俺は正直ごめんだが……。

『では、ご注文を繰り返させていただきます。スパイシーカツレツをお一つでよろしいですか？』

「ああ、それで頼むよ」

『かしこまりました。少々お待ち下さい』

颯爽とウェイターが厨房に注文を伝えるべく歩いて行く。

もともと量が多い料理じゃないので、すでに食べ終わってしまったが、カナタさんと雑談しながら食べ終わるのを待つ事にした。そして、美味しそうにカツを食べるカナタさんに対して、先程の疑問に思った事を何気なく口にしてみる。

「でも、カナタさんが蛙の肉が大丈夫だとは、正直意外でした。リアルでもよく食べたりするんですか？」

「えっ？ …………… かーえーるう？」

思いつきり凍りついた様に固まるカナタさんの笑顔。
も、もしや…………。

「は、はい。え？ え？ あれ？ 知ってたんじゃないんですか？」

「い、いや、鶏肉だとばかり…………おかしいな。c の時にちゃんと確認したんだけどな」

やはり、知らなくて食べてたのか。
カナタさんの記憶違いじゃないとしたら、

「多分ですけど、サービス開始の時に少しだけ仕様変更があったから、その時に一緒に変わったんじゃないですかね？」

「そ、そうか…………、若干味が変わったとは思ってたんだが、まさか食材が変わっていたとは…………」

「いいじゃないですか。リアルでも食用として存在するんですから。ははっ、はははははははは」

ナイスフォロー、俺。
これで何か別の話題を振れば

「リアルにジャイアントフロッグの様にグロテスクな食用蛙はいないと思いますよ」

「……………」

ぼそつと余計な事言つなよ……、アル。

とりあえず、「所詮データだよ。データ」ということで強引に空気を変え、食後のコーヒーを飲みながらまったり会話する事になった。

「で、今何レベルくらいになったんだい？ やっぱり、今回のイベントで結構上げたんだらうね」

「えつと、53になったところです」

イベント終了ぎりぎりまで粘り、狩り時間確保のためにレポ石まで使ったかきもあって結構上がったのだ。

まあ、そのせいで適正レベルを外れたから、次からは新しい狩り場に行く事になったため面倒でしかたがない。

「ソロでその速さは凄いな。まあ、学生の強みもあるんだらうけど……、”宿題終わってない”は、夏の風物詩だからねえ。大丈夫かい？」

「そのところはご安心を。夏休み入ってすぐに終わらせましたから」

ゲームの為なら、普段苦手な事でも思わぬ力を発揮するのが、自分のダメ過ぎるところだらう。

そういう時は半ば暴走気味なので、正解率は推して知るべし。

「それにしても53か。誰かが作ったギルドに入るつもりもなさそうだし、自分でギルド立ち上げるのかい？」

「あー、ギルドですか……、そういえば、そういうのもありましたね」

自分には関係ないと思ってたから、完全に忘れていたな。

ギルド、ギルドかー、どうしようかな。

ん？ そういえば、

「そういえば、カナタさんはどこか入らないんですか？ まだ入ってませんよね？ テスターの知り合いとかから勧誘が多そうですけど」

「うーん。確かに結構誘われるんだよ。ただ、ギルドに入るメリットってギルマスかサブでもないとならないから、ただのギルメンとして誘われても、ちょっとね。痛いギルメンがいる所に入っちゃったら、便利なアイテム製造機として使われそうだしね」

「そうですね。ないと思いますけど、素材だけ渡されて作ってとか言われたら……。それに、ギルド経験値を貢ぐだけってのも嫌過ぎですし」

幻夢でのギルドのシステムは、ギルメンが得た経験値の一部をギルド経験値として徴収する事によって成長する仕組みになっている。ギルメンが戦闘で得た経験値に対して何%がギルド経験値として盗られるかは、ギルマスが自由に設定出来る。

その代わりにギルドレベルが上昇した時に獲得するギルドポイントを割り振る事で、ステータス上昇やスキル熟練度が上昇しやすくな

る等の特典もある。

まあ、一方的に搾取されるだけなら誰も入らないので、当然といえば当然なのだが。

ただし、ギルドポイントをどの項目に割り振るかはギルマスしか選べず、更にギルマス、サブ、ギルメン、研修生の順でステータス上昇などの増加割合は少なくなっていく。

ぶっちゃけ、大手ギルドのギルマスやサブは勝ち組というわけなのだ。

かといって、馬鹿みたいに人数集める事だけ考えて、誰でも入れてしまうとトラブル処理に追われるし、痛いギルドとして晒されるという危険性もあるので、ギルメン加入の見極めはとても難しかったりする。

何が言いたいかというと、……………どうしようかなあ？

「もしも別のギルドに入る事になったらギルドに吸われた経験値が勿体無いけど、とりあえずソロギルドを作るのもいいかもしれないね。ギルドレベルが上がリやすい5まであげて、スキル熟練度上昇にポイント全振りするだけでもスキル強化が随分楽になるだろうし、経験値を吸われるのが嫌になったら0%に設定するだけでいいからね」

「それいいですね。勧誘除けにもなりますし、ギルマスだから受けるポーナスも大きいですし」

「勧誘を受けた事ないですけどね」

いいじゃんか、見栄を張ったって。

幻夢ではまだないけど、別ゲーで多少は勧誘された事あるんだよ。

「そうなのかい？ シュウ君ぐらいの高レベル使い魔持ちはかなり

勧誘が酷いと思うよ。まあ、変に有名だから逆に勧誘しづらいつてもあるかもしれないね」

「へ、変に有名……」

細々とゲームを楽しみたかっただけなのに、何この仕打ち。

そりゃ、スタートダッシュしたり、トップ集団に入りたくないとは思ったりもしたけど、理想と現実の落差は一体。

「ミューとマチュアも変態だと思ってた」

「いや、それはお前のせいだからっ！」

「へ、変態？ ……しゅ、シユウ君。年長者として、それはちょっとどうかと思うよ」

何なの？ この負のスパイラル……。

神様、俺が何かやりましたか？

うん。数日続いた激務に対する小休止のつもりだったんだけどね。余計に疲れた気がするよ。

カナタさんの誤解はなんとか解けたと思う……、解けてたらいいなあ。

誤解を解いている最中にぼそつとアルが余計な口を挟んだせいで、微妙な所かもしれない。

教育的指導として魔の二択を選択させた。

「どつちも嫌だ」等とふざけた事を抜かしたので、両方お見舞いしておいた。
本来、ダメージも痛覚に影響も与えない筈　そもそもAIに痛覚
つて　なのだが、”ウメボシ”はかなり効いたようだ。
特殊スキル【おしおき】の技だという設定なのだろうか？
もしそうだとしたら、開発チーム初めてのGJ。

アルルーナ成長日誌

L V 4 9 H P : 1 5 2 6 S P : 2 8 1

S T R : 3 2 8 V I T : 3 9 5 I N T : 4 0 2 D E X : 1 4
1 A G I : 1 4 3

攻撃力：1 8 7 魔法攻撃力：2 1 3 防御力：2 4 6 魔法防御
力：2 3 2 敏捷度：1 4 9

【通常攻撃】「消費S P 無属性」
根っこを鞭のように使い攻撃する。

【悲鳴】「消費S P 5 精神属性」
悲鳴を上げ対象を気絶させる。

【奉仕の実り】「消費S P パッシブスキル」
主人に対する想いが特殊な果実を生み出す。

奉仕の果実を1時間毎に3個自動生成。

【毒花粉】「消費SP18 土属性」

頭に生えている花から花粉を飛ばし、対象を猛毒状態にする。
5秒毎に現在HPの3%ダメージを与える。

愛情度：??? 「神経質な変態」

満腹度：100% 「満腹」

備考：

シユウ変態説を流布する企みを持っているようだ。
抑止力を手に入れたので、なんとしても阻止してみせる。

休載のお知らせ

しばらくの間、アルルーナ成長日誌をお休みさせて頂きます。
わざわざ更新チェックして頂いてる読者の方には、本当に申し訳ないです。

話の展開は頭の中にあるのに全く筆が進まず、どうにも続きが書けない状態になってしまいました。

初心者が、短編ではなくいきなり連載から始めたというのと コメデイを選んだのが身のほど知らずの行為だったかもしれない。

今後どうなるかわかりませんが、一旦、この作品を離れて気分を変えようと思います。

現在、気分転換に新しい小説を執筆しています。

題材は、こりもせずにもたV R M M O R P G の小説です。

こちらは、アルルーナ成長日誌と違いこれといって笑いがある小説ではないので、自分で言うのもなんですが全く面白くないです。

リハビリをしているんだと生温かい目で見守ってください。

だったら投稿すると言われるそうですが、生存報告の変わりという事で……。

めぼしい作品を全部読んでしまって、他に読む物がない人だけ期待しないで読み下さい。

ただし、読み終わってから貴重な時間を無駄にしたと言われるても、どうしようもありませんので、その時は自己責任という事で諦めて下さい。

最後にもう一度、突然休載をして本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2238d/>

アルルーナ成長日誌

2010年10月9日10時58分発行